# 宮竹野際遺跡 7

Miyatake nogiwa Site

浜松市教育委員会

2018年3月

Hamamatsu Municipal Board of Education,March,2018

# 宮竹野際遺跡7

2018

浜松市教育委員会

I 区　上層遺構面東半　完掘状況（北西から）

1　Ⅱb・Ⅱc区　全景（北西から）

2　Ⅰ区　SD03・SD04　検出状況（南から）

主要出土遺物

1　SE02　主要出土遺物

2　古代主要遺物

3　貿易陶磁器

# 例　言

1　本書は静岡県浜松市東区宮竹町において実施した宮竹野際遺跡（８次調査）の発掘調査に関わる報告である。

2　当発掘調査は、都市計画道路高林芳川線整備事業に先立つ事前調査として実施した。調査は、浜松市（主管課：浜松市東・浜北土木整備事務所）の委託を受け、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が実施した。実務は浜松市から委託を受けた株式会社シン技術コンサルが実施した。調査に関わる費用は全額浜松市が負担した。

3　発掘調査に関わる期間は、現地調査が、平成 28 年（2016）10 月 17 日から平成 29 年（2017）2 月 17 日まで、整理作業が平成 29 年 7 月 6 日から平成 30 年（2018）3 月 23 日までである。調査面積は 1,300 ㎡である。

4　現地調査は、和田達也・鈴木京太郎（浜松市文化財課）の指示のもと、田村典雄（株式会社シン技術コンサル）が実務を行った。

5　整理作業は、和田の指示のもと、福嶋正史（株式会社シン技術コンサル）が実務を行った。

6　本書の執筆は第１章１・２、第２章１（２）、第４章（４）、第５章を和田が行い、その他を福嶋が行った。現地調査における写真撮影は、和田と田村が実施し、出土遺物の写真撮影は、和田と福嶋が行った。編集は、和田の指示のもと、福嶋が行った。

7　調査に関わる記録や出土遺物は浜松市文化財課（浜松市地域遺産センター）が保管している。

# 凡　例

1　本書で用いる座標は世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海抜高である。

2　遺構の略号は以下の通りである。

SD：溝　SK：土坑　SP：小穴　SE：井戸　SX：遺物集積・不明遺構

3　遺物番号は遺物の種別にかかわりなく連番を付した。

4　本書で報告する土器の断面と種別の関係は以下の通りである。

5　本文中の引用文献等の表記については、以下のように略す。

浜松市博物館→浜市博　　教育委員会→教委　　（財）浜松市文化協会→浜文協

（財）浜松市文化振興財団→浜文振　　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所→静文研

# 目　次


巻頭図版

例　言

凡　例

第１章　序　論 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1
2　遺跡をめぐる環境 …… 2
3　本発掘調査の方法と経過 …… 11

第２章　検出遺構 …… 13

1　基本層位 …… 13
2　Ⅰ区の遺構 …… 15
3　Ⅱ区の遺構 …… 34

第３章　出土遺物 …… 43

1　Ⅰ区の出土遺物 …… 43
2　Ⅱ区の出土遺物 …… 56

第４章　後　論 …… 59

遺跡景観の復元―中世の様相― …… 59

第５章　総　括 …… 67

出土遺物観察表

図　版

# 図　版　目　次

## 巻頭図版


1　Ⅰ区　上層遺構面東半　完掘状況（北西から）
2　1　Ⅱb・Ⅱc区　全景（北西から）
　2　Ⅰ区　SD03・SD04　検出状況（南から）
3　主要出土遺物
4　1　SE02　主要出土遺物
　2　古代主要遺物
　3　貿易陶磁器


## 図　版


1　Ⅰ区　調査区全景（北東から）
2　1　Ⅰ区　SD01・SD02・SE02（東から）
　2　Ⅰ区　SD01 西端遺物出土状況（南西から）
3　1　Ⅰ区　SD01 遺物出土状況（東から）
　2　Ⅰ区　SD01 遺物出土状況（西から）
　3　Ⅰ区　SD02 遺物出土状況（南西から）
4　1　Ⅰ区　SD03・SD04 断面（南東から）
　2　Ⅰ区　SD03・SD04 南側遺物出土状況（東から）
5　1　Ⅰ区　SE02 断面（南から）
　2　Ⅰ区　SE02 遺物出土状況（南から）
6　1　Ⅰ区　SE01 完掘状況（西から）
　2　Ⅰ区　SE03 完掘状況（南から）
7　1　Ⅰ区　SK01 と SD01 遺物出土状況（南西から）
　2　Ⅰ区　SK04 遺物出土状況（南西から）
8　1　Ⅰ区　SX02 完掘状況（北東から）
　2　Ⅰ区　SX02 遺物出土状況（西から）
　3　Ⅰ区　SX02 遺物出土状況 SP43（南から）
9　1　Ⅰ区　東端小穴群完掘状況（南から）
　2　Ⅰ区　SP05 断面（西から）
　3　Ⅰ区　SP15 遺物出土状況（西から）
10　1　Ⅰ区　下層 SD08・SK05（南西から）
　2　Ⅰ区　SD08 断面（南から）
　3　Ⅰ区　下層調査区 1 完掘状況（西から）
11　Ⅱb区・Ⅱc区　全景（北西から）

12　1　Ⅱb区　全景（北西から）
　　2　Ⅱb区　SD11・SK11 完掘状況（南西から）
13　1　Ⅱb区　SE04 上層遺物出土状況（北西から）
　　2　Ⅱb区　SE04 下層遺物出土状況（西から）
14　1　Ⅱb区　SE04（北から）
　　2　Ⅱb区　SK11 遺物出土状況（西から）
15　1　Ⅱc区　調査区全景（南東から）
　　2　Ⅱc区　SD14・SD15 全景（北西から）
16　1　Ⅱc区　SD14・SD15 遺物出土状況（南東から）
　　2　Ⅱc区　SD14・SD15 遺物出土状況（南から）
　　3　Ⅱc区　SD14・SD15 遺物出土状況（東から）
　　4　Ⅱa区　全景（北から）
　　5　Ⅱa区　SD09・SP56 完掘状況（北東から）
　　6　Ⅱa区　SD10 完掘状況（東から）
17　主要出土遺物
18　1　SD01　主要出土遺物
　　2　SD01　出土遺物（1）
19　SD01　出土遺物（2）
20　SD02 ～ SD04　出土主要遺物
21　1　SE02　主要出土遺物
　　2　SE02　出土遺物（1）
22　SE02　出土遺物（2）
23　1　SK04　出土遺物（1）
　　2　SK04　出土遺物（2）
24　1　SX02　主要出土遺物
　　2　SX02　出土遺物
25　小穴・Ⅰ区包含層　出土主要遺物
26　SD11・SD14・SD15　出土主要遺物
27　SE04・SK11・Ⅱ区包含層　出土主要遺物
28　山茶碗高台部

# 挿 図 目 次


Fig.1　宮竹野際遺跡の位置 …… 1
Fig.2　宮竹野際遺跡周辺の遺跡分布 …… 3
Fig.3　宮竹野際遺跡周辺の地籍 …… 4
Fig.4　宮竹野際遺跡の調査状況 …… 6
Fig.5　宮竹野際遺跡周辺の調査状況 …… 7
Fig.6　宮竹野際遺跡確認調査箇所 …… 9
Fig.7　宮竹野際遺跡試掘調査土層柱状図 …… 10
Fig.8　宮竹野際遺跡グリッド配置図 …… 12
Fig.9　基本層位柱状図 …… 13
Fig.10　基本層位と遺構検出面の関係 …… 14
Fig.11　Ⅰ区時代別全体図 …… 15
Fig.12　下層調査区３北西壁断面 …… 16
Fig.13　Ⅰ区下層調査区全体図 …… 16
Fig.14　Ⅰ区下層 SD06 ～ SD08・SK06 詳細図 …… 18
Fig.15　Ⅰ区上層（古墳時代～平安時代
・鎌倉時代）全体図 …… 19
Fig.16　Ⅰ区 SD05・SK04 詳細図 …… 20
Fig.17　Ⅰ区下層 SX01 詳細図 …… 21
Fig.18　Ⅰ区 SX02 詳細図（１） …… 22
Fig.19　Ⅰ区 SX02 詳細図（２） …… 23
Fig.20　Ⅰ区 SD01 詳細図 …… 25
Fig.21　Ⅰ区 SD01・SD02 詳細図 …… 26
Fig.22　Ⅰ区 SD03・SD04 詳細図 …… 27
Fig.23　Ⅰ区 SE01・SE03 詳細図 …… 28
Fig.24　Ⅰ区 SE02 詳細図 …… 29
Fig.25　Ⅰ区 SK01 ～ SK03 詳細図 …… 30
Fig.26　Ⅰ区東端小穴群 …… 30
Fig.27　Ⅰ区 SP04 ～ SP13 詳細図 …… 31
Fig.28　Ⅰ区 SP14 ～ SP25・SP28・SP29 詳細図 …… 32
Fig.29　Ⅰ区 SP31・32・35 ～ 39・44 ～ 46
・49 ～ 51・54・55 詳細図 …… 33
Fig.30　Ⅱ区全体図 …… 34
Fig.31　Ⅱ区 SD09・SD10 詳細図 …… 35
Fig.32　Ⅱ区 SD11 ～ SD13 詳細図 …… 36
Fig.33　Ⅱ区 SD14・SD15 詳細図（１） …… 37
Fig.34　Ⅱ区 SD14・SD15 詳細図（２） …… 38
Fig.35　Ⅱ区 SE04 詳細図 …… 40
Fig.36　Ⅱ区 SK07 ～ SK11 詳細図 …… 41
Fig.37　Ⅱ区小穴群詳細図 …… 42
Fig.38　SD01 出土遺物（１） …… 43
Fig.39　SD01 出土遺物（２） …… 44
Fig.40　SD01 出土遺物（３） …… 45
Fig.41　SD01 出土遺物（４） …… 46
Fig.42　SD02 ～ SD04 出土遺物 …… 47
Fig.43　SE02 出土遺物（１） …… 48
Fig.44　SE02 出土遺物（２） …… 49
Fig.45　SE02 出土遺物（３） …… 50
Fig.46　SE02 出土遺物（４） …… 51
Fig.47　SE03・SK01・SK03・SK04・SP04
・SP05・SP07・SP15・SP18 出土遺物 …… 52
Fig.48　SX02 出土遺物 …… 53
Fig.49　Ⅰ区包含層出土遺物（１） …… 54
Fig.50　Ⅰ区包含層出土遺物（２） …… 55
Fig.51　SD11 ～ SD15 出土遺物 …… 56
Fig.52　SE04 出土遺物 …… 57
Fig.53　SE04・SK11・SP68
・Ⅱ区包含層出土遺物 …… 58
Fig.54　湖美湖西窯の碗皿類編年図
（鈴木 2013 から引用） …… 60
Fig.55　SD01・SE02 出土主要遺物 …… 61
Fig.56　８次調査における中世の遺構 …… 62
Fig.57　宮竹野際遺跡の
中世以後の遺構（溝・井戸） …… 63
Fig.58　宮竹野際遺跡周辺の調査成果と地籍 …… 65
Fig.59　宮竹野際遺跡８次調査区の変遷（１） …… 67
Fig.60　宮竹野際遺跡８次調査区の変遷（２） …… 68


# 表 目 次


Tab.1　宮竹野際遺跡における調査等一覧 …… 8

# 第1章　序　論

## 1　調査に至る経緯

**宮竹野際遺跡の概要**　宮竹野際遺跡は、静岡県浜松市東区宮竹町地内にある縄文時代から近世まで継続的に営まれた複合遺跡である。1986年のマンション建設に伴う発掘調査により、遺跡の存在が明らかになった。以降、浜松市教育委員会や静岡県埋蔵文化財調査研究所によって2017年12月までに、9度の調査が行われている。なかでも、弥生時代・古代・中世の調査成果が特筆できる。弥生時代は、水田跡の検出が挙げられる。古代には、墨書土器や硯類・獣脚付壺などが出土し、長上郡家に関連した遺跡と評価されている。中世では、鎌倉時代の屋敷地に伴う方形区画がみられ、集落が営まれたことが窺える。

**開発計画の浮上**　2006年に（都）中郡福塚線と（都）高林芳川線の整備事業が、浜松市（主管課：2011年6月30日まで浜松市南土木整備事務所、2011年7月1日から浜松市東・浜北土木整備事務所）によって具体化された。計画区域は、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が2004年に実施した5次調査区と近接しており、遺跡の連続性が想定された。このため、遺跡の有無や残存状況の確認を目的として、対象地に13ヶ所の調査坑を設定し、2006年と2009年に確認調査を実施した。確認調査の結果、対象地の南半において遺跡が展開していることが判明した。対象地のうち、事業を進める条件が整った（都）中郡福塚線に関わる部分を対象として、2010～2011年に本発掘調査（6次調査）が行われた。

**8次調査の実施**　（都）高林芳川線の改良工事が実施される段階に至ったため、2009年の確認調査の結果をもとに、工事を主管する浜松市東・浜北土木整備事務所と浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）が協議を行い、（都）高林芳川線の改良工事部分において本発掘調査を実施することになった。発掘調査は、浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）が実施した。なお、現地調査および整理作業の実務を、株式会社シン技術コンサルに委託した。現地調査は、2016年10月17日から2017年2月17日にかけて実施した。調査面積は、1,300㎡である。

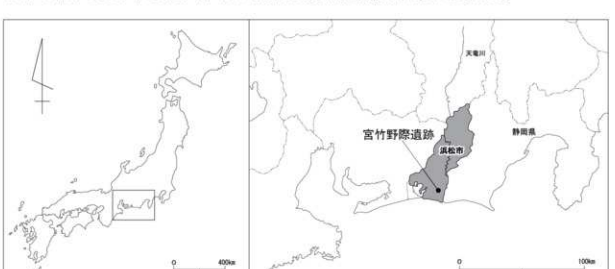



Fig.1　宮竹野際遺跡の位置

## 2　遺跡をめぐる環境

### （1）地理的環境

宮竹野際遺跡は、天竜川下流域に広がる沖積平野に所在する。宮竹野際遺跡とその周辺は、天竜川本流や天竜川の主要な分流である馬込川に挟まれている。また、支流や旧流路が下流域において網目状に展開し、複雑な地形を作り出している。宮竹野際遺跡をはじめとした遺跡の多くは、河川により形成された沖積平野の微高地上に展開している。

### （2）歴史的環境

**縄文時代以前**　天竜川西岸の沖積平野において人々の痕跡が確認できるのは、縄文時代晩期のことと考えられる。宮竹野際遺跡４次調査では、縄文時代晩期後半の土器が出土しているが、集落等の様相は不明確である。

**弥生時代**　天竜川西岸の沖積平野において安定的に集落が形成される段階である。宮竹野際遺跡では、集落の存在は不明だが、２・４次調査では弥生時代中期と推定される水田が確認されている。中期の集落としては将監名遺跡や大蒲町村東Ⅰ遺跡が挙げられる。なかでも将監名遺跡では、中期中葉に環濠を伴う集落造営が確認でき、銅鐸の舌や有孔磨製石剣といった特殊遺物が出土していることから、拠点集落であったと捉えられる。後期には、宮竹野際遺跡の南に近接する山の神遺跡において、外周に環濠をめぐらした南北250mを超える大規模な集落造営が確認できる。山の神遺跡は、後期前半（山中式期）から拠点集落として整備され、弥生時代後期後半（欠山式期）にかけて盛行した様子が窺える。周囲には松東遺跡・越前遺跡・森西遺跡などの分岐集落が展開していたと捉えられる。宮竹野際遺跡も山の神遺跡の分岐集落のひとつであったとみられるが様相は不明確である。また、木船遺跡出土の銅鐸２個体やツツミドオリ銅鐸、松東遺跡出土の近畿式銅鐸の飾り耳や突線鈕２式の鈕、森西遺跡出土の銅鐸形土製品など銅鐸や銅鐸関連製品の出土が集中する点が注目できる。

**古墳時代**　弥生時代後期に最大規模に拡大した宮竹野際遺跡周辺の遺跡は、古墳時代に至ると様相が不明確になる。山の神遺跡や天王中野遺跡などで古墳時代前期の遺物が出土しており、集落が分散・縮小傾向にあったためと捉えられる。三方原台地の東端には古墳時代を通じて古墳が築造され、後期以降、群集墳が造営されている。宮竹野際遺跡では７世紀代に集落造営が開始され、奈良・平安時代の遺跡の展開へとつながる素地が形成された時期と評価できる。

**飛鳥・奈良・平安時代**　律令制の確立に伴い、浜松市とその周辺は、遠江国として掌握される。宮竹野際遺跡とその周辺は長田郡に属し、709年（和銅２）の長上郡・長下郡分郡後は、長上郡に属した。長上郡の中心は、木簡が出土した大蒲町村東Ⅰ・Ⅱ遺跡とその周辺にあったと想定できる。この近傍には、木船廃寺があり、郡家隣接寺院とみられる。宮竹野際遺跡では、８世紀中葉以降、急速に施設が整備された状況が窺え、「北家」と記された墨書土器をはじめとした文字資料や陶硯、獣脚付盤など、官衙関連遺跡に特徴的な遺物の出土が注目できる。長上郡の郡家推定地は、郡域の南側に偏っており、宮竹野際遺跡の展開する北側に郡家関連施設を整備した可能性が指摘される。

**鎌倉時代**　宮竹野際遺跡とその周辺には、伊勢神宮系の荘園である蒲御厨が成立した。宮竹野際遺跡では、鎌倉時代の居住域が各調査区で確認でき、蒲御厨内の集落域と評価されている。宮竹野際遺跡の南側に所在する山の神遺跡では、大規模な溝に囲まれた一町四方の区画がみられる。

Fig.2　宮竹野際遺跡周辺の遺跡分布

Fig.3　宮竹野際遺跡周辺の地籍

## （3）宮竹野際遺跡とその周辺における調査履歴

**発見の経緯**　1986年（昭和61）に現在の宮竹野際遺跡の範囲内においてマンション建設が計画されたため分布調査を実施し、当該地域に遺物が散布している状況が確認された。この結果を受けて試掘調査を実施し、遺跡の存在が明らかになった。以後、宮竹野際遺跡の範囲内において、住宅建設や道路拡幅工事等の開発が相次いで計画・実施されてきた。宮竹野際遺跡では、2017年（平成29）12月現在までに9回の発掘調査が行われている。調査位置と調査成果をまとめ（Fig.4・Tab.1）、遺跡に関わる重要な情報が得られた1～6次調査について触れることとする。また、宮竹野際遺跡の南側に所在し、宮竹野際遺跡との関連性が強いと想定できる山の神遺跡の調査履歴とその成果について触れる。

**1次調査**　1次調査は、マンション建設に先立ち、浜松市教育委員会が1986年（昭和61）と1988年（昭和63）に実施した発掘調査である。調査面積は約475㎡である。古代と中世の遺構が確認されている。古代では、9世紀後半を中心とした時期の遺構や遺物が確認された。平面形が方形の柱穴で構成された3棟以上の掘立柱建物や木組の井戸枠を伴う井戸が特筆できる。中世では、12世紀から13世紀前半にかけての遺構や遺物が豊富に検出された。溝で区画された一辺15～20m程度の屋敷地に複数棟の掘立柱建物が建てられていた状況が確認された。出土遺物は弥生時代後期から認められ、周辺に弥生時代後期に遡る遺跡が展開した可能性が指摘されている（教委1988）。

**2次調査**　2次調査は、大規模複合店舗建設に伴い、浜松市教育委員会指導のもと、（財）浜松市文化協会が1993年（平成5）から1994年（平成6）にかけて実施した発掘調査である。調査面積は3,500㎡である。弥生時代と古代・中世の遺構が確認されている。弥生時代中期の水田が検出されたほか、古代では、8世紀前半に遡る竪穴建物1棟と、8世紀後半から9世紀代の掘立柱建物群が確認されている。また、陶馬を含む祭祀遺物や円面硯、布目瓦が出土し、官衙関連遺跡である可能性が示された。中世では屋敷地の様相は明らかでないものの、1次調査区で検出されたものとの連続性が窺える溝が検出された（浜文協1994）。

**3次調査**　3次調査は、2次調査が実施された大規模複合店舗の設計変更に伴い、1995年（平成7）に実施された本発掘調査である。調査面積は150㎡である。中世の井戸が2基検出されている（教委1995）。

**4次調査**　4次調査は、商業施設建設に伴い、浜松市教育員会指導のもと、（財）浜松市文化協会が1995年（平成7）から1996年（平成8）にかけて実施した本発掘調査である。調査面積は6,500㎡である。弥生時代中期の水田と中世の井戸が検出されている（浜文協1997）。

**5次調査**　5次調査は、（都）中郡福塚線県単独街路整備事業に伴い、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が2004年（平成16）から2005年（平成17）にかけて実施した発掘調査である。調査面積は1,100㎡である。古代の遺構・遺物が豊富に検出され、陶硯類・獣脚付壺・布目瓦など官衙関連遺跡の存在を窺わせる遺物の出土が特筆できる（静文研2006）。

**6次調査**　6次調査は、（都）中郡福塚線及び（都）高林芳川線の整備事業に先立つ事前調査として、浜松市教育委員会の指導のもと、（財）浜松市文化振興財団が2010年（平成22）から2011年（平成23）にかけて実施した。古代と鎌倉時代の調査成果が注目できる。古代には自然流路や掘立柱建物が検出され、自然流路からは墨書土器や陶硯などの文字関連資料や製塩土器や獣足と

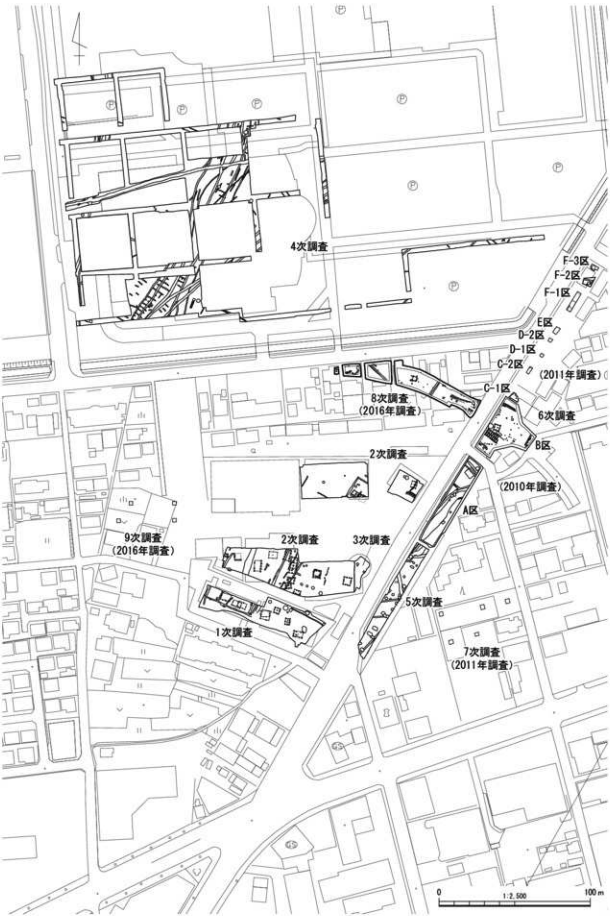



Fig.4　宮竹野際遺跡の調査状況

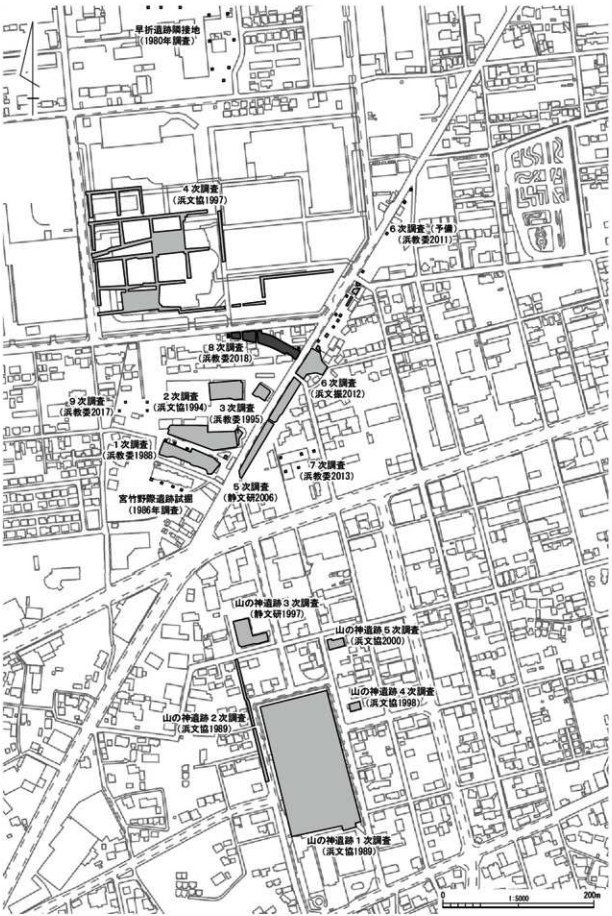



Fig.5 宮竹野際遺跡周辺の調査状況

Tab.1　宮竹野際遺跡における調査等一覧

| 次 数 | 調査期間 | 調査面積 | 調査主体 | 主な時期 | 特記事項 | 備 考 | 文 献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 次 | 1986.10 ～ 1988.4 | 475 ㎡ | 浜松市教委 | 弥生・古代・中世 | 古代・中世の掘立柱建物・区画護等を検出 | 本調査 | 浜松市教委 1988 |
| 2 次 | 1993.12 ～ 1994.3 | 3,500 ㎡ | 浜文協 | 弥生・古代・中世 | 弥生時代の水田や古代・中世の掘立柱建物を検出 | 本調査 | 浜文協 1994 |
| 3 次 | 1995.1 | 150 ㎡ | 浜松市教委 | 弥生・中世 | 中世の井戸を検出 | 本調査 | 浜松市教委 1995 |
| 4 次 | 1995.10 ～ 1996.6 | 6,500 ㎡ | 浜文協 | 弥生・古代・中世 | 弥生時代の溝、古代・中世の井戸等を検出 | 本調査 | 浜文協 1997 |
| 5 次 | 2004.12 ～ 2005.5 | 1,100 ㎡ | 静文研 | 弥生・古代・中世 | 弥生時代の水田、古代の集落を検出 | 本調査 | 静文研 2006 |
| (6 次) | 2006.12 | | 浜松市教委 | 古代 | 古代の遺跡の展開を確認 | 確認調査 | 浜松市教委 2011 |
| (6 次) | 2009.2 | | 浜松市教委 | 古代・中世 | 柱穴・土坑を検出 | 確認調査 | 浜松市教委 2011 |
| 6 次 | 2010.7 ～ 2011.3・7 | 1,650 ㎡ | 浜文振 | 古代・中世 | 貴土郡家に占小ける施設が展開する可能性 | 本調査 | 浜文振 2012 |
| 7 次 | 2011.7 | | 浜松市教委 | — | 範囲外 | 試掘調査 | 浜松市教委 2013 |
| 8 次 | 2016.10 ～ 2017.2 | 1,300 ㎡ | 浜松市教委 | 古墳・中世 | 鎌倉時代の区画溝を確認 | 本調査 | 本報告 |
| 9 次 | 2016.11 | | 浜松市教委 | — | 範囲外 | 試掘調査 | 浜松市教委 2017 |

浜松市教育委員会　1988『宮竹野際遺跡』
(財) 浜松市文化協会　1994『宮竹野際遺跡 2』
浜松市教育委員会　1995『宮竹野際遺跡 3』
(財) 浜松市文化協会　1997『宮竹野際遺跡 4』
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所　2006『宮竹野際遺跡』
浜松市教育委員会　2011『平成 23 年度 浜松市試掘調査概要』
(財) 浜松市文化振興財団　2012『宮竹野際遺跡 6 次』
浜松市教育委員会　2013『平成 25 年度 浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2017『平成 28 年度 浜松市文化財調査報告』

いった官衙的様相が窺える遺物が豊富に出土した点が注目できる。また、墨書土器のうち「北家」と記されたものがみられ、宮竹野際遺跡南側 1km に推定される長上郡家中枢部と有機的な関連をもつ郡家関連施設があったと想定されている。「北家」の整備は、8 世紀中葉以降に進められた状況が窺える。鎌倉時代には、自然流路が湿地化し、水田として用いられていた。調査区内からは井戸が 3 基検出されている（浜文振 2012）。

**山の神遺跡**　山の神遺跡は、宮竹野際遺跡の南東に展開する弥生時代後期と中世を中心とした時期の遺跡である（Fig.5）。浜松アリーナの建設に伴い 1987 年（昭和 62）から 1988 年（昭和 63）にかけて実施された 1 次調査によって弥生時代後期前半（山中式期）の環濠集落と平安時代末から鎌倉時代にかけての集落が展開していることが明らかになった。以降、浜松市博物館や（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所によって計 5 回にわたる本発掘調査が実施され、弥生時代後期と平安時代末から鎌倉時代にかけての様相が明らかにされている。

弥生時代後期には、後期前半に平面形が東西 125m・南北 220m の不整惰円形をした環濠に囲まれた集落が造営され、後期後半には、環濠が廃絶し、集落域が拡大したことが判明している。

平安時代末期から鎌倉時代にかけて、広範囲に遺構が展開しており、伊勢神宮系の荘園である蒲御厨に関連する遺構群と考えられている。なかでも、屋敷地を区画する一町（約 109m）四方の溝の存在が特筆できる。

## （4）確認調査の実施

宮竹野際遺跡における（都）中郡福塚線や（都）高林芳川線の整備事業に関わる確認調査は、調査坑が 13 ヶ所にのぼる。2006 年（平成 18）に 1 回と 2009 年（平成 21）に 2 回の計 3 回に分けて実施した（Fig.6）。

確認調査の結果、遺跡の展開が確認できたのは 2006 年 - 調査坑 1 ～ 3 及び 2009 年 - 調査坑 1 ～ 4・8 ～ 10 である。2009 年の調査坑 4 以南で遺跡の展開が確認でき、2006 年 - 調査坑 1 ～ 3、2009 年 - 調査坑 1 ～ 4 に該当する部分は 6 次調査によって本発掘が実施され、調査成果が公開されている（浜文振 2012）。

8 次調査対象地に関わる確認調査は、2009 年 2 月 26 日に実施した 2009 年 - 調査坑 8 ～ 10 が該当する。包含層からは古代から中世を中心とした時期の遺物が多く出土している試掘調査の結果を踏まえ、2016 年度（平成 28）の（都）高林芳川線整備事業に関わる全域を調査対象とした。

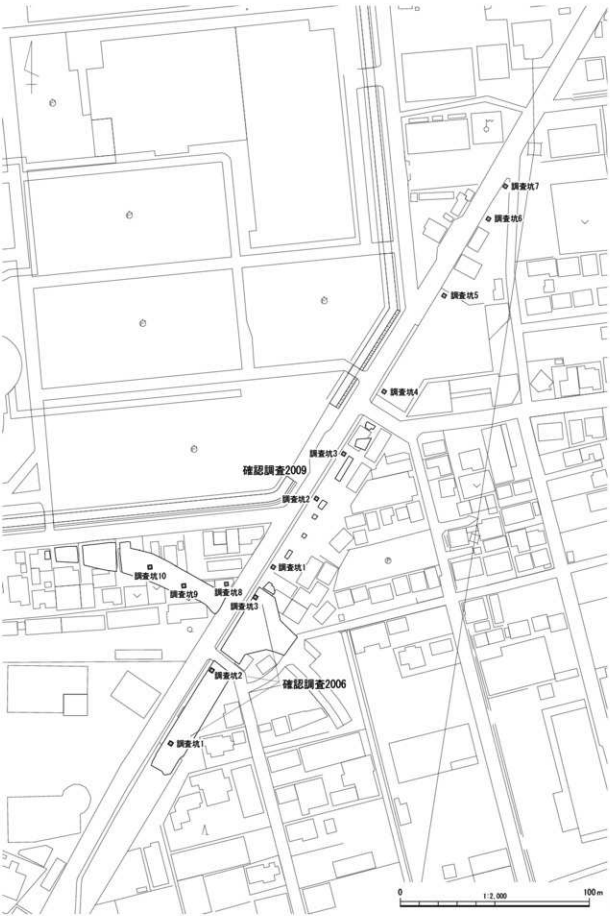



Fig.6 宮竹野原遺跡確認調査箇所

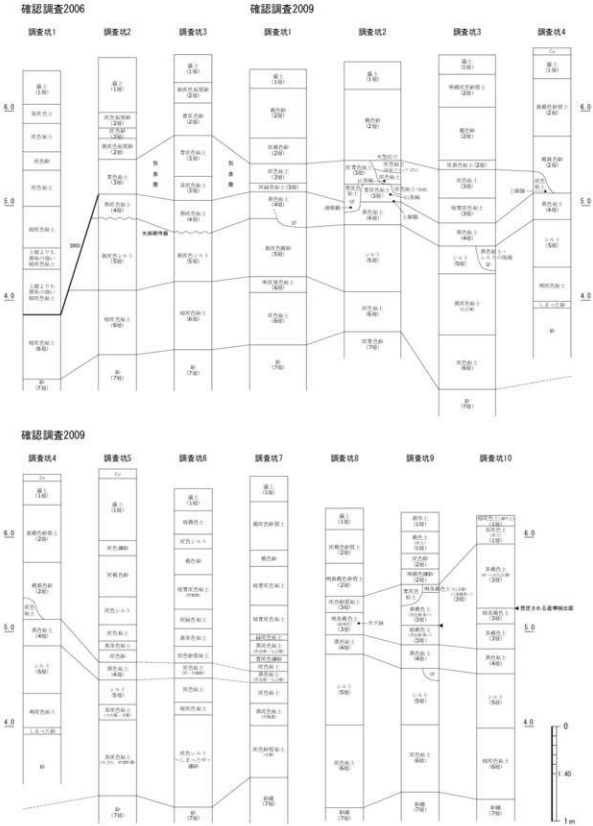



Fig.7　宮竹野際遺跡試掘調査土層柱状図

## 3　本発掘調査の方法と経過

### （1）調査方法

**調査区の設定**　本発掘調査にあたり、国家座標に基づいて10m間隔のグリッドを設定した。発掘調査区は、対象地を横断する地下埋設物を境として東側をⅠ区、西側をⅡ区とした。さらにⅡ区はⅡａ～Ⅱｃ区の３区に細分し調査を行った。

**表土掘削**　調査対象地の盛土及び表土は重機（バックホー）を用いて除去した。地表の標高は6.2～6.4mである。表土・盛土の厚さは、Ⅰ区が約0.7～1.0m、Ⅱ区が約0.4～0.6mである。調査で発生した排土は、場内で仮置き後、場外へ搬出し処理した。

**包含層掘削、遺構検出**　表土や盛土を除去した後、人力による包含層掘削と遺構検出を行った。また、調査区の壁面を精査し、土層堆積状況の確認を行った。基本層位は概ね６次調査と同様であり、細分した部分については枝番を付した。遺構の平面検出は鴨嘴を使用し、検出された遺構は移植ごてや竹ベラを使用して掘削した。掘削排土は、ベルトコンベヤーを用いて調査区外へ搬出した。

**図面作成**　遺構平面図や土層図は、基準点をもとに、トータルステーションを用いて計測し、作図した。遺物の出土状態は必要に応じて平面図と立面図を作成した。

**写真撮影**　写真撮影は、銀塩フィルムを用いて行った。銀塩フィルムによる写真撮影は、モノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムの双方を用いた。カメラは６×７判を主体に、全景写真には４×５判を使用した。なお、銀塩フィルムで撮影したカットすべてと、補足的な写真をデジタル一眼レフカメラにて撮影した。

### （2）調査経過

**発掘調査**　2016年度の現地調査は2016年10月17日から2017年2月17日にかけて実施した。調査期間は、Ⅰ区が2016年10月17日～12月21日、Ⅱ区が2017年1月16日～2月17日である。本調査では、中世の遺構や遺物がすべての調査区において豊富に検出できた。なかでも区画溝の可能性がある遺構が特筆できる。また、古代の遺構や遺物も少量ではあるが出土している。出土遺物の中には獣足や緑釉陶器、壺Ｇといった官衙関係遺物が含まれており注目できる。

**整理作業**　整理作業は、遺物の水洗・注記を発掘調査と並行して2016年12月から2017年2月まで現場事務所で行った。本格的な遺物整理作業と報告書作成作業は2017年7月から2018年3月にかけて整理作業を受託した株式会社シン技術コンサル北関東支店で実施した。

**調査参加者**

**現地調査**

磯部永幸、大野功、大庭俊、縞巌鉱治、小林俊海、澤木秀和、澤田万里、鈴木悟、鈴木幸雄、田口久子、竹内誠一、西澤徳恵、野本徹、渡邊昌衛

**整理作業**

赤間淳子、池田敏雄、伊東恵美子、宇野理恵、柿沼幸子、佐藤久美子、菅原桂子、鈴木峰子、高橋敦子、竹越亜希子、千葉幸子、山田あゆみ、吉田順子

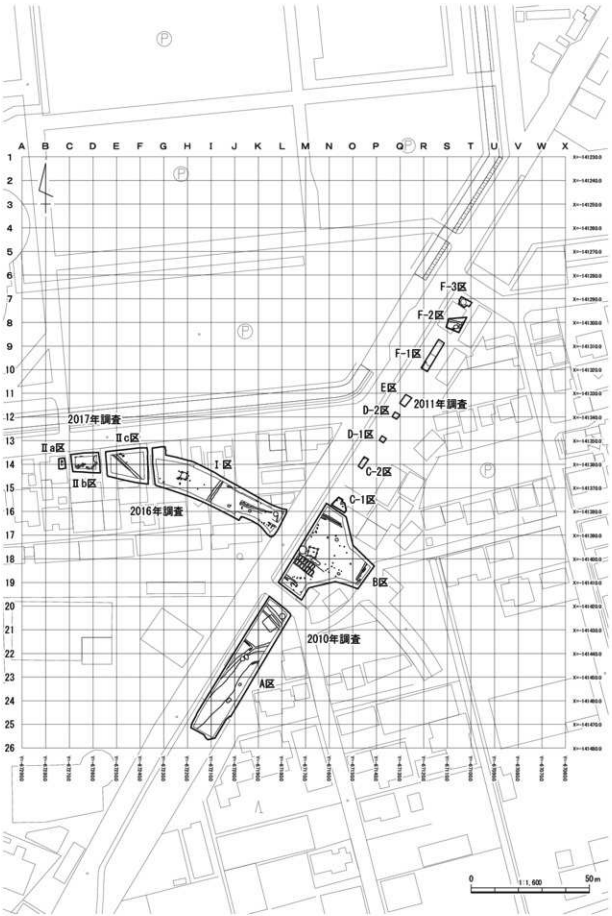



Fig.8　宮竹野際遺跡グリッド配置図

# 第２章　検出遺構

## １　基本層位

### （１）基本層位

**概　要**　８次調査において確認された土層は以前の発掘調査で確認された層位と対比し、遺跡全体を通して共時性を把握できるように、対応する層位番号（１～５層）を付した。また、細分が可能な層位については、枝番号を付した。

**１　層**　１層は表土で、整地・盛土・撹乱層である。調査地では旧地表上面を削平し、土を盛って平坦に整地している。厚さはⅠ区で約 0.7 ～ 1.0m、Ⅱａ区で約 0.6m である。

**２　層**　２層は上層と下層に細分できる。２-１層は灰オリーブ色砂質土で、６次調査以前に確認された２層または２層上層と同一の層位と捉えられる。２-２層は、２-１層の下位に部分的に認められたオリーブ褐色シルト堆積層である。

**３　層**　３層は上層・中層・下層に細分でき、上から順に３-１層、３-２層、３-３層とした。３-１層は暗い色調の灰褐色または暗オリーブ褐色の粘質土、３-２層は炭化物を含んだ暗褐色または黒褐色の粘質土、３-３層は暗灰褐色または暗灰黄色の粘質土である。３-１・３-２層は、中世以前の遺物包含層であり、３-３層には遺物が包含されていなかった。過去の調査においては青灰色粘土層とされていることが多いが、８次調査区とその周辺では場所によっては茶褐色土層であることが確認されている（Fig.7）。

**４　層**　４層は黒褐色粘質土である。過去の調査でもこの黒色粘土層は普遍的に確認されており、遺跡全体に安定的に堆積している土層といえる。

**５　層**　５層は黄灰色シルトの基盤層である。８次調査では本層より下位から遺構や遺物は確認されなかった。６次調査以前の黄灰色シルトもしくはシルト層と同一の層位といえる。

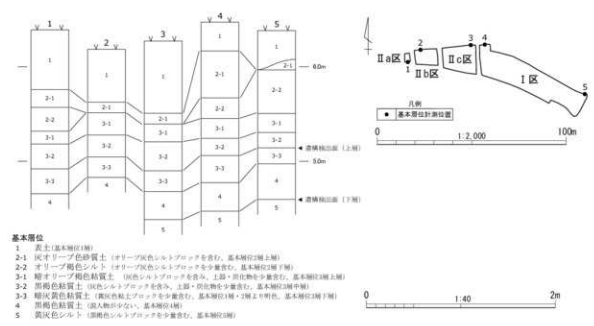



Fig.9　基本層位柱状図

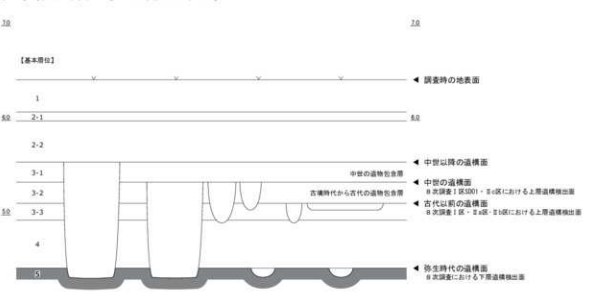
## （2）８次調査における遺構面と遺構検出面の関係

**概　要**　宮竹野際遺跡８次調査では、3 - 3層上面を上層遺構検出面、５層の上面を下層遺構検出面とした。しかし、本来遺構が掘削された面（遺構面）と発掘調査における遺構の検出面の層位が一致していない遺構が多くあり、遺構構築面と遺構検出面の関係を整理する。

**上層遺構検出面**　上層遺構が検出できる検出面は、3 - 1層上面・3 - 2層上面・3 - 3層上面の３つの検出面がある。このうち、確認調査や近隣における本発掘調査において、古代を中心とした時期の遺構が構築された面である3 - 3層上面が、遺構検出面として最も有効であると判断し、遺構検出を実施した。

８次調査区では、調査の進展とともに中世（鎌倉時代）の遺構が主体的であることが判明し、古代以前の遺構は限定的であることが明らかになった。中世の遺構は3 - 1層および3 - 2層上面から構築されており、８次調査によって検出した中世の遺構は、遺構面と遺構検出面の間に、最大40cm程度の高低差がある。遺構検出を行った段階で中世の遺構は上半が削平された状態であったと言え、3 - 1層や3 - 2層の上面を遺構面として構築された中世遺構の実際の規模は、掲載した詳細図よりも平面形が大きく、断面は深かったと言える。なお、SD01は、遺物が埋土に多く含まれていたため、Ⅰ区内ではあるが部分的に3 - 2層を検出面として調査を実施した。また、８次調査の中で最後に調査したⅡｃ区では、８次調査の過程で得た知見をもとに3 - 2層上面が８次調査区において最も遺構検出に適した面と判断し、3 - 2層上面を遺構検出面とした。

**下層遺構検出面**　下層遺構検出面は、５層上面を検出面とした。過去の発掘調査により、溝跡が複数検出されており、８次調査区における遺構の分布状況を確認するため、部分的に調査を行った。遺構の密度は薄く、出土遺物は得られなかった。これまでの発掘調査成果をもとにすると、５層を基盤層として構築された遺構からは弥生土器が出土しており、下層遺構検出面において検出した遺構は、弥生時代のものと捉えられる。




1　表　土
2-1　灰オリーブ色砂質土（オリーブ灰色シルトブロックを含む）
2-2　オリーブ褐色シルト（オリーブ灰色シルトブロックを含む）
3-1　暗オリーブ褐色粘質土（灰色シルトブロックを含み、土器・炭化物を少量含む）
3-2　黒褐色粘質土（灰色シルトブロックを含み、土器・炭化物を少量含む）
3-3　暗灰黄色粘質土（黄灰色粘土ブロックを少量含む）
4　黒褐色粘質土（遺入物がかない）
5　黄灰色シルト（黒褐色シルトブロックを少量含む）

Fig.10　基本層位と遺構検出面の関係

## ２　Ⅰ区の遺構

### （１）Ⅰ区における検出遺構の概要

Ⅰ区は、８次調査地のうち東半分を占めている。過去に発掘調査を行った６次調査Ｂ区とは、(都)中郡福塚線を挟んで西側に位置する。遺構検出面は下層検出面（５層上面:弥生時代）、上層検出面（３-３層上面：古墳時代～鎌倉時代）の２面とした。下層検出面の調査では調査溝２ヶ所と調査区北西隅の調査区で溝跡３条（SD06 ～ SD08）と土坑１基（SK06）を検出した。溝跡はそれぞれで形状や方向が異なり、関連性は不明である。

上層検出面の調査では、古墳時代から平安時代、および鎌倉時代の遺構を検出した。古墳時代～平安時代の遺構は、古墳時代終末期（７世紀）の推定竪穴建物跡（SX02）と、古代の土坑（SK04）が確認できたほか、詳細時期不明ながら当該期とみられる推定水田跡（SX01）と溝跡（SD05）を検出した。鎌倉時代の遺構は、区画溝４条（SD01 ～ SD04）、井戸３基（SE01 ～ SE03）、土坑４基（SK01 ～ SK03・SK05）と柱痕が残る小穴多数を検出した。これらの遺構、遺物から調査地付近は当時の居住、生産域の一部であったと判断できる。今回の発掘調査において畝脚付壺や緑釉陶器といった官衙関連遺跡との関連が窺える遺物が出土しており、古代以前の遺構は、５・６次調査によって存在が指摘された郡家関連施設と関係するものと捉えられる。

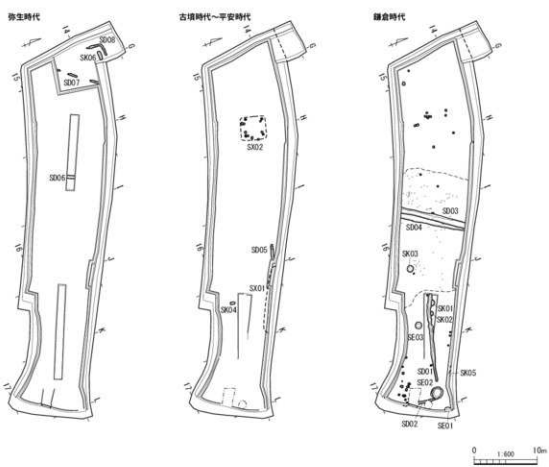



Fig.11　Ⅰ区時代別全体図

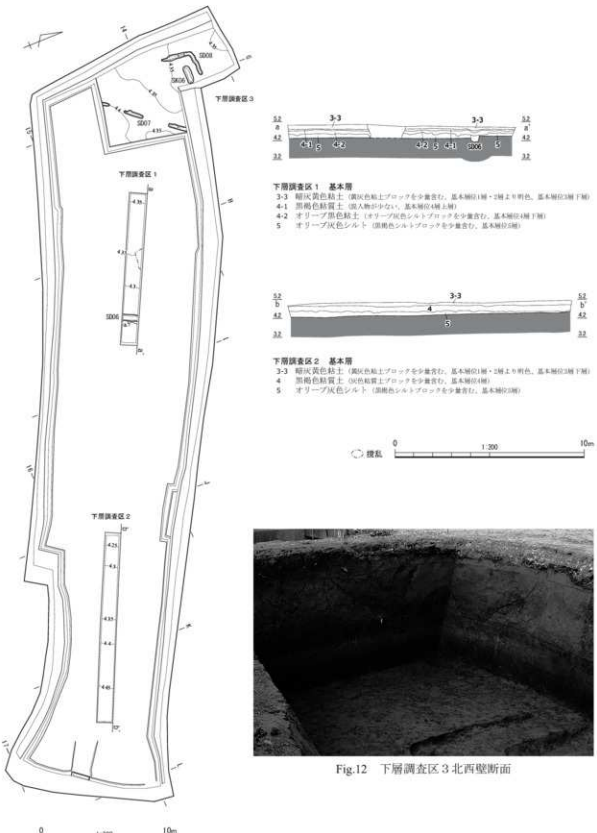



Fig.13　Ⅰ区下層調査区全体図



Fig.12　下層調査区３北西壁断面

（２）Ⅰ区下層（弥生時代）の調査

**概　要**　Ⅰ区下層検出面の調査は、遺構や遺物の密度が希薄なことが想定できたため、２ヶ所の調査溝（下層調査区１・２）と調査区北西端の面積約 31 ㎡の拡張部（下層調査区３）において部分的に行った。遺構検出面は基本層位５層の上面とし、下層調査区１、および下層調査区３から小規模な溝跡３条（SD06 ～ SD08）、土坑１基（SK06）を検出した。下層調査区２では遺構を検出できなかった。遺構密度が低く出土遺物もみられないことから居住域中心部とは考え難い。居住域の縁辺もしくは生産域に近い場所と推定される。SD06 と SD07 は区画溝として、水田等を規格的に区画している可能性も考えられる。なお、調査溝壁面では基本層５層は東から西へ緩く傾斜しているが、遺構検出面を測量するとほぼ平坦である。下層での遺構の時期は、過去の調査成果と検出層位から弥生時代に属すると捉えられる。

**溝　跡**（Fig.14）　溝跡は、SD06 ～ SD08 の３条を検出した。SD06 は下層調査区１、SD07・SD08 は下層調査区３で検出した。このうち SD06・SD07 は調査区外へ延びており、全体形は不明だが、断面形はいずれも箱形である。SD06 は検出面で幅 0.50m、深さ 0.35m である。溝の方向は N-26° -E を示す。SD07 は２ヶ所で途切れているが、一直線に並ぶこと、溝幅や断面形、深さが一定であることから１条の溝ととらえられ、検出面で幅 0.3m 前後、深さ 0.40m である。溝の方向は N-39° -E を示す。SD08 は L 字形の溝で、検出長は延べ 4.2m である。幅 0.32 ～ 0.45m、深さ 0.09 ～ 0.24m で溝の断面形状は半円形である。SD06 ～ SD08 はいずれも基本層５層上面から構築され、埋土も同質であることからほぼ同時期とみられる。これらの溝跡から遺物は出土しなかった。

**土　坑**（Fig.14）　下層調査区３の SD08 南東に隣接して SK06 を検出した。検出面での東西方向の長軸 1.42m、短軸 0.54m、深さは 0.18m である。SD07 のように途切れつつ調査区外へと延びる溝跡の可能性もある。主軸の方向は SD08 東半とほぼ同様である。他にも、断面形が半円形な点、埋土がオリーブ黒色粘土の単一層である点で SD08 と共通する。遺物は出土しなかった。

（３）Ⅰ区上層（古墳時代～平安時代）の調査

**概　要**　Ⅰ区上層における遺構は、基本層位３- ３層（３層下層、Fig.9）上面において検出した。溝跡５条（SD01 ～ SD05）と井戸３基（SE01 ～ SE03）、土坑５基（SK01 ～ SK05）、および SX01・SX02 が主要な遺構である。このうち SD05、SK04、および SX01・SX02 が出土遺物と構築層位から古代以前に位置づけられる。SX01 はⅠ区の東部にある古代以前の水田跡と推定される遺構、SX02 は西部にある竪穴建物跡と推定される遺構である。SX02 は出土遺物から古墳時代終末期（７世紀代）に位置づけられる。また、SK04 もほぼ同時期の遺構である。宮竹野際遺跡における７世紀代の遺構はこれまでの宮竹野際遺跡で実施した調査では確認できておらず８次調査で初めて検出したものである。

**溝　跡**（Fig.16）　溝跡は SD05 の１条を検出した。SD05 はⅠ区東部北壁近くで、SX01 西に隣接する細い溝である。SX01 に向かうように構築されており、東端は重複する可能性があるが、検出面では新旧関係は確認できなかった。調査区壁で溝の土層断面が認められなかったことから、SD05 が古く、SX01 によって壊されていることも考えられる。検出面での幅は 0.4m、深さ 0.07m、断面形は浅い逆台形で、溝の方向は N-74° -W を示す。３- ３層の傾斜に沿った方向であることから、SX01 につながる水路とも捉えることもできる。遺物はわずかに土師器甕破片が出土したのみで、図示できるようなものはなかった。構築時期は古墳時代終末期を中心とした時期と想定できる。

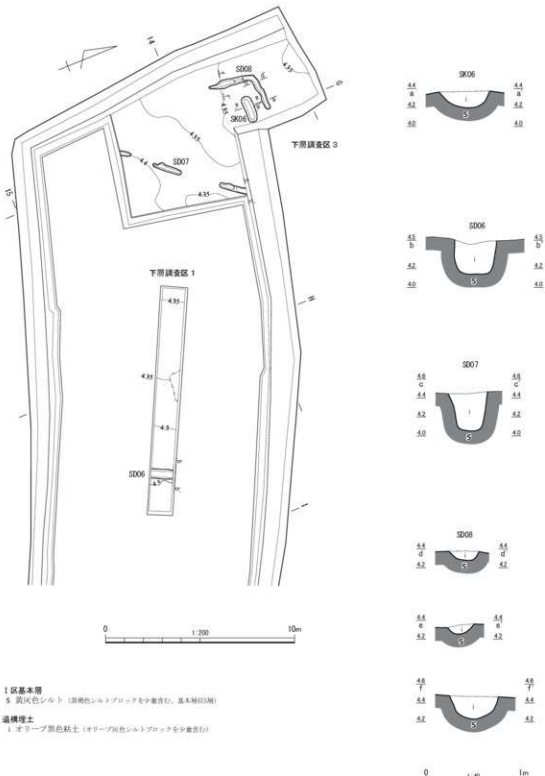



Fig.14　Ⅰ区下層 SD06 ～ SD08・SK06 詳細図

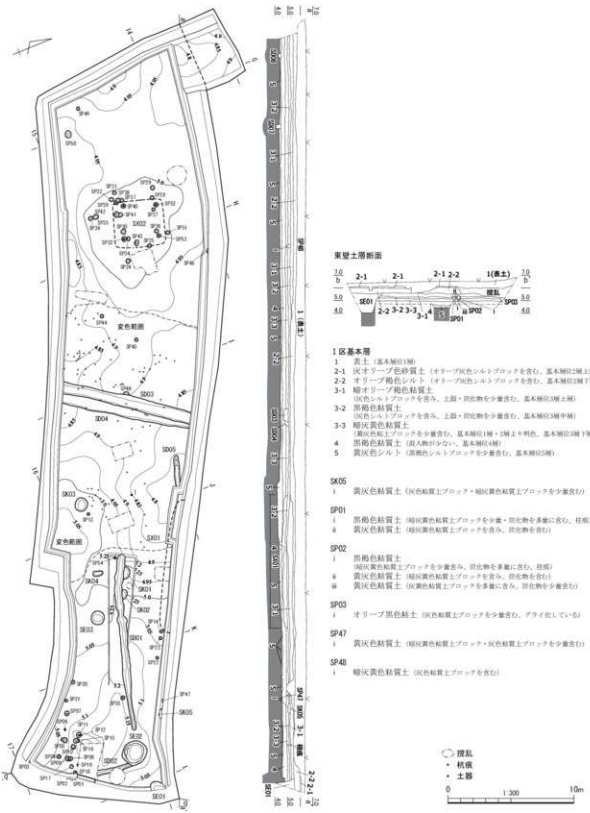



Fig.15　Ⅰ区上層（古墳時代～平安時代・鎌倉時代）全体図

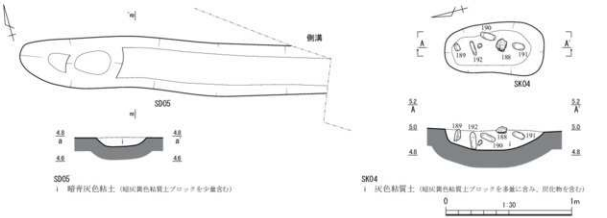
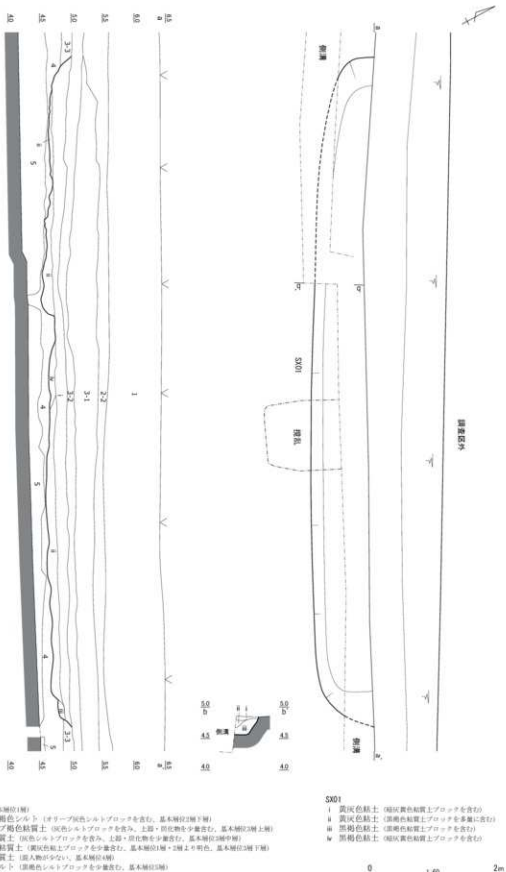



Fig.16　Ⅰ区 SD05・SK04 詳細図

**土　坑**（Fig.16）　土坑は SK04 の 1 基を検出した。SX01 の南約 5m に位置する。位置関係からは他の土坑とともに土坑群を形成しているようにみえるが、長円形の形状、明るい灰色粘質土の埋土、さらに出土遺物の様相で他と一線を画す。検出面で長軸約 0.8m、短軸約 0.4m、深さは 0.17m で、断面形は弧状である。埋土中からは土師器台付鉢、砥石、編物石と思われる複数の楕円礫が出土した。また、図示できなかったが形状不明の鉄製品も出土した。遺物の特徴から構築時期は古代と捉えられる。

**SX01**（Fig.17）　SX01 はⅠ区東半の北壁付近において検出した遺構である。検出面で長軸約 10.5m、短軸約 0.8m で、基本層 3 - 3 層を深さ 0.25 ～ 0.3m 程掘り込んで構築されている。平面形は不明であるが南辺はほぼ直線である。土層断面では、底面は凹凸が多く壁は斜めに立ち上がっている。埋土は上層に黄灰色粘土が、下層に黄灰色粘土と黒褐色粘土が堆積している。下層は複数の土層が自然堆積した様子を窺えるが、上層は単一の土層が均一な堆積状況を示し、人為的な整地層のようにも思える。遺構の規模、直線的な平面形、凹凸の多い底面と上下で異なる土層等の要素を検討した結果、小規模な水田跡と推定した。なお、遺物が全く出土していないが、逆にこれもまた水田とする傍証の一つとなり得ると考えられる。ただし、検出できた範囲は遺構の一部分にとどまり、土層断面、検出面での平面形状のいずれでも、畦畔等の施設は確認することができなかった。SX01 の構築時期は、基本層 3 - 3 層を掘り込み、3 - 2 層に覆われていることから、古墳時代終末期～古代の間に位置づけられる。

**SX02**（Fig.18・19）　SX02 はⅠ区西部で検出した遺構である。正確な規模・形状は不明ながらも、竪穴建物跡と推定される。柱痕を残す小穴を四方に配し、小穴周辺の基本層 3 - 3 層を 0.15 ～ 0.18m 掘りくぼめている。土層断面から竪穴の規模を一辺 3.7 ～ 3.9m、平面形状は柱穴の配置からほぼ正方形と想定し、その形状を図上に破線で示した（Fig.18）。建物の主柱穴は SP33・40・52・53 の 4 ヶ所と思われる。柱穴は長軸 0.31 ～ 0.40m の不整円形で、深さは 0.12 ～ 0.30m、柱間隔は 2.6 ～ 2.7m である。建物範囲内で柱痕が認められた小穴はこのほかにも SP42・SP43 があるが、これらは補助柱穴もしくは建て替えに伴うものと考えられる。柱穴のうち、SP33 と SP40 を結んだ方向は N-68° -W を示す。柱穴以外の小穴は、SX02 の範囲内にあるものは SX02 に伴うものとして図示した。SX02 の埋土は 2 層に分層でき、厚さ 5 ～ 6cm の薄い i 層の下に十数 cm の厚さで ii 層が堆積している。建物の床面は検出されなかったが、遺物や焼土の検出状況、土層断面から ii 層上面が床面と捉えられる。なお、焼土の分布が SX02 の中央付近で認められた。検出面での規模は差し渡し約 0.3m である。焼土付近で床面の掘り込みは認められなかった。白色粘土等のカマド構築材と認識できる



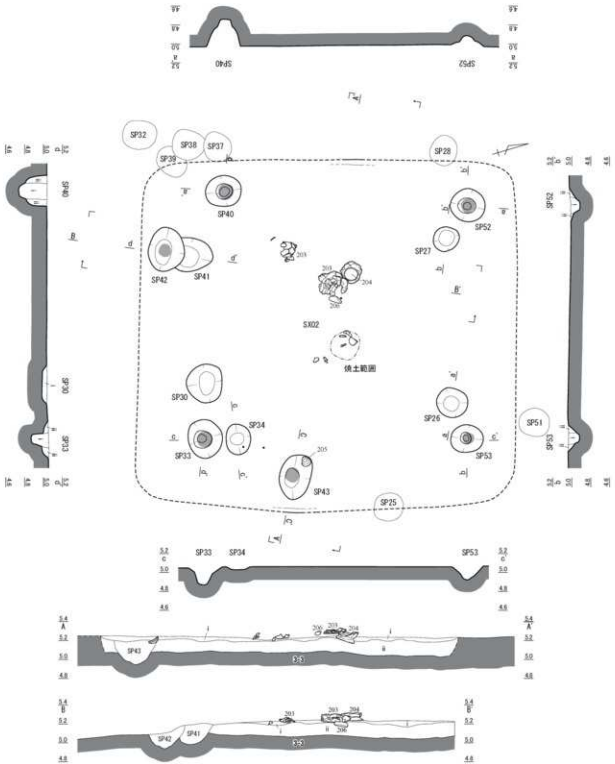

**Ⅰ区基本層**

1　表土（基本層位1層）
2-2　オリーブ褐色シルト（オリーブ灰色シルトブロックを含む。基本層位2層下層）
3-1　暗オリーブ褐色粘質土（灰色シルトブロックを含み、土器・焼土粒を少量含む。基本層位3層上層）
3-2　黒褐色粘質土（灰色シルトブロックを含み、土器・焼土粒を少量含む。基本層位3層中層）
3-3　暗灰黄色粘質土（黄灰色粘土ブロックを少量含む。基本層位3層・2層より明色。基本層位3層下層）
4　黒褐色粘質土（混入物が少ない。基本層位4層）
5　黄灰色シルト（黒褐色シルトブロックを少量含む。基本層位5層）

**SX01**

i　黄灰色粘土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む）
ii　黄灰色粘土（黒褐色粘質土ブロックを多量に含む）
iii　黒褐色粘土（黒褐色粘質土ブロックを含む）
iv　黒褐色粘土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む）

Fig.17　Ⅰ区下層 SX01 詳細図




**SX02**
i　黄灰色粘質土
（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、灰白色粘質土ブロックを少量含む。部分的に焼土粒子を少量含む）
ii　オリーブ黒色粘質土
（暗灰黄色粘質土ブロックを少量含み、にぶい黄色シルトブロックを上面に少量含む）
3-3　灰黄色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む。基本層位3層下層）

**焼土範囲**
黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む）

**SP30**
i　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを多量に含む）

**SP33**
i　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックをに含み、炭化物を少量含む、柱痕）
ii　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、灰黄色粘質土ブロックを少量含む）

**SP40**
i　黄灰色粘質土
（暗灰黄色粘質土ブロックを多量に含み、炭化物を少 量含む、柱痕）
ii　黄灰色粘質土
（暗灰黄色粘質土ブロックを多量に含み、にぶい黄色粘質土ブロックを少量含む）

**SP52**
i　暗灰黄色粘質土（灰色粘質土ブロックを含む、柱痕）
ii　暗灰黄色粘質土（灰色粘質土ブロックを多量に含む）

**SP53**
i　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む、柱痕）
ii　黄灰色粘質土（灰色粘質土ブロック・暗灰黄色粘質土ブロックを少量含む）

Fig.18　Ⅰ区 SX02 詳細図（1）

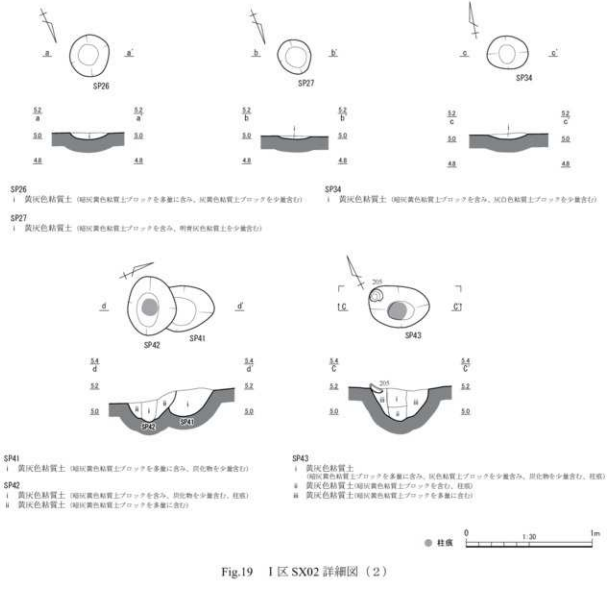



Fig.19　Ⅰ区 SX02 詳細図（２）

ものはみられなかった。火処の詳細は不明だが、焼土の検出位置から炉の可能性が高い。

遺物は、焼土範囲内、および約 0.5m 離れた位置から、土師器甕破片が集中して出土した。また、ii 層を掘り込んで構築されている SP43 から須恵器蓋杯が出土した。これらの遺物の特徴から、遺構の時期は古墳時代終末期の７世紀代に位置づけられる。

### （４）Ⅰ区上層（鎌倉時代）の調査

**概　要**　Ⅰ区上層における遺構のうち、前項で掲載した SD05、SK04、SX01・SX02 以外の遺構を、鎌倉時代以後に構築されたものとして本項で掲載する。溝跡４条（SD01 ～ SD04）、井戸３基（SE01 ～ SE03）、土坑４基（SK01 ～ SK03・SK05）、小穴は SP01 ～ 25・28・29・31・32・35 ～ 39・44 ～ 46・49 ～ 51・54・55 である。SD03・SD04 は直線的に一定の幅、深さで構築されていること、ほとんど同じ位置で溝を再掘削していることから区画溝と捉えられる。同時期に同じ特徴をもつ溝として、SD14・SD15 があり、関連性が窺える。このほか、SD01・SD02 の２条が SE02 を頂点として直交方向に延びており、３つの遺構が一連の施設であった可能性が考えられる。また、詳細な時期は不明ながらも柱痕を有する小穴が調査区東端近くに集中して分布する。ある程度規格的に並ぶ様

子がみられるものの、建物跡と確定できる配置はなかった。

Ⅰ区上層における遺物の出土量は、東部の SD01・SE02 からの出土量が突出して多く、SD03・SD04 がそれに次ぐ。建物跡は検出されなかったものの居住域のごく近傍であり、時間的には限定的ながらも活発な生活活動を窺うことができる。なお、調査区中央部において 3 - 3 層上面の土壌が還元されて変色している範囲が確認された（Fig.15「変色範囲」）。変色は SD03・SD04 を中心に東西約 18m におよび、この範囲に杭痕が密集していた。湿地帯に何らかの施設が構築されていた様子が窺える。杭は基本層 3 層の上位からの打設である。

**溝　跡**（Fig.20 ～ 22）　溝跡は SD01 ～ SD04 の 4 条を検出した。SD01 は調査区東部で検出した直線的な溝跡で、検出面で幅約 0.6m、深さ 0.30 ～ 0.40m である。断面形は弧状に近い。溝の方向は概ね東西で N-74° -W を示し、東端の至近距離に SE02 がある。本来は両者が接続していたとみられる。埋土の下層から中層にかけてやや豊富に遺物が出土し、13 世紀代の山茶碗を主体としている。遺構構築から埋没途中までの年代を示すと思われる。なお、古代の緑釉陶器破片が 1 点出土している。SD02 は SD01 とほぼ直交方向に延びる溝である。検出面で幅 0.35m、深さ 0.21m であり、断面形は U 字形に近い。北端で SE02 と接し、調査時の所見ではそれより古い。溝の方向は N-7° -E で調査区東壁に向かうが、壁面で断面が確認されず、構築時から 3.0 ～ 3.5m 程度の長さだったと推定できる。埋土の上層から少量の遺物が出土した。

SD03・SD04 はⅠ区中央を南北に横断する直線的な溝跡である。SD03 が新しく、SD04 西縁を壊して構築されている。検出面は基本層 3 - 3 層上面であるが、埋土の質や遺物の出土状況から 3 - 2 層上面から構築されていた可能性が高い。SD03 は検出面で幅 0.85 ～ 1.0m、深さ 0.30m で、断面形は浅い逆台形である。溝の方向は N-35° -E を示す。SD04 は幅 0.9m 以上、深さ 0.20 ～ 0.25m、断面形は箱形で底面はほぼ平坦である。溝の方向は N-33° -E である。SD03・SD04 の方向は概ね一致し、埋土の土質もほぼ同質である。SD04 埋没後ほとんど間を空けずに SD03 が掘削されたと考えられる。それぞれ埋土から少量の遺物が出土している。SD01 らの出土遺物とほぼ同時期の 13 世紀のものであり、遺構の構築も当該期とみられる。なお、SD03 埋土から獣脚付壺が出土している。

**井　戸**（Fig.23・24）　井戸は 3 基を検出した。いずれの井戸も素掘りで、枠や石組は確認できなかった。SE01 はⅠ区北東角に位置し、井戸の南西部 1/4 ないし 1/6 程度を発掘した。検出面は基本層 3 - 3 層であるが、3 - 1 層から構築されている。壁は上端から強くすぼまり、屈折して傾斜を急角度にしつつ平坦な底面まで掘削される。検出面での平面形は楕円形、深さは 3 - 1 層上面から底面まで 1.55m である。遺物はほとんど出土しなかったが、3 - 1 層の上面から構築されているため、構築時期は中世以後である。

SE02 はⅠ区北東端近く、SE01 から約 1.9m 西で検出した。平面形は不整円形で、検出面で長軸 2.05m、短軸 1.85m、深さ 0.80m である。一部に中段を有しながら平坦な底部までやや斜めに掘り込まれる。底面は長軸 1.2m、短軸 0.9m の楕円形である。西に SD01 が、南へ SD02 が延びることから両者と一連の遺構群を形成するとみられる。溝跡と同様に、上位の 3 - 2 層から構築されている可能性が高い。土層断面では埋没過程で再掘削が行われたことが読みとれる。再掘削は底面上約 0.3m まで行われている。遺物は埋土上端から iii 層上面までの間で豊富に出土した。ほとんどは山茶碗を主体とした中世遺物で、それらに混じって青磁碗が 1 点出土した。また、破砕礫、古代以前の遺物なども少量出土した。

SE03 は、SE01・SE02 に比べると著しく小形の井戸である。検出面での平面形はほぼ円形で、径 1.10m、深さ 0.80m である。壁は急角度で掘り込まれる。底面は不整円形で長軸 0.57m、短軸 0.52m

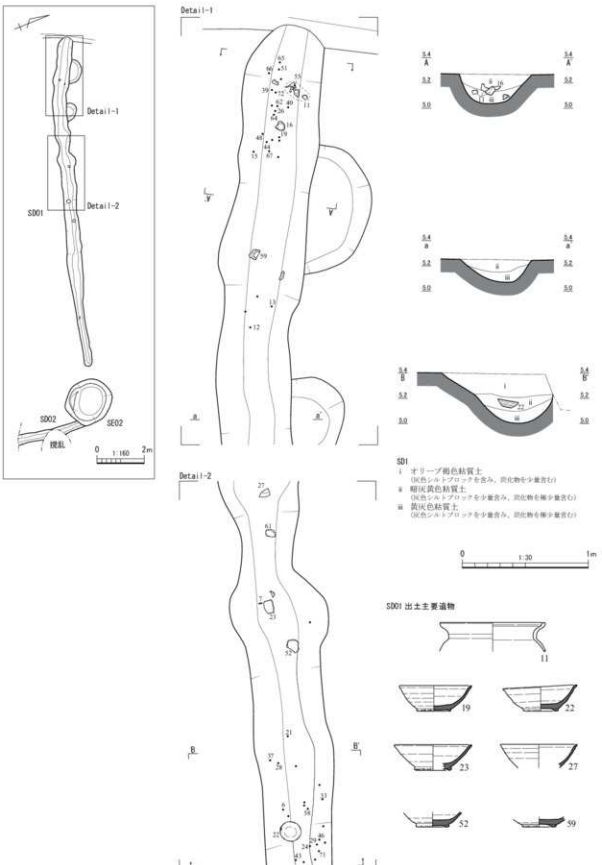



Fig.20　Ⅰ区 SD01 詳細図

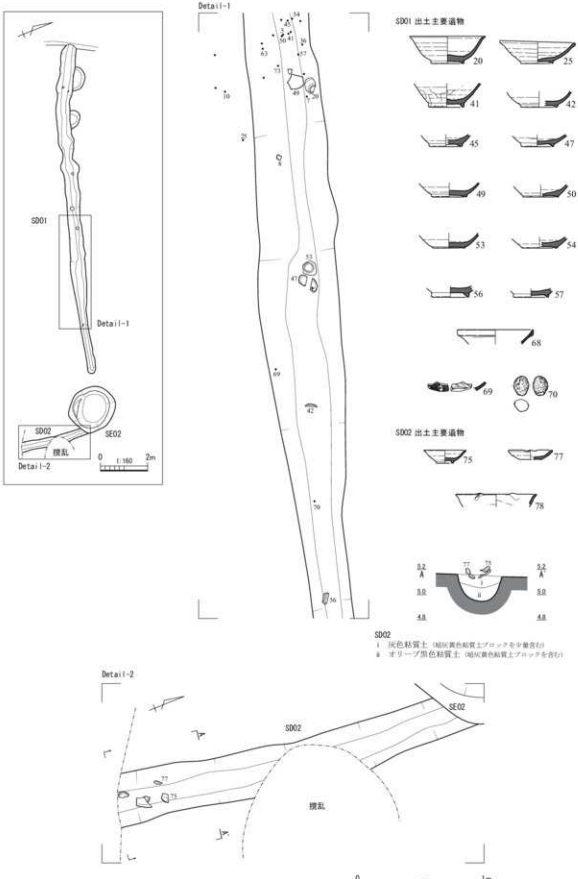



Fig.21　Ⅰ区 SD01・SD02 詳細図

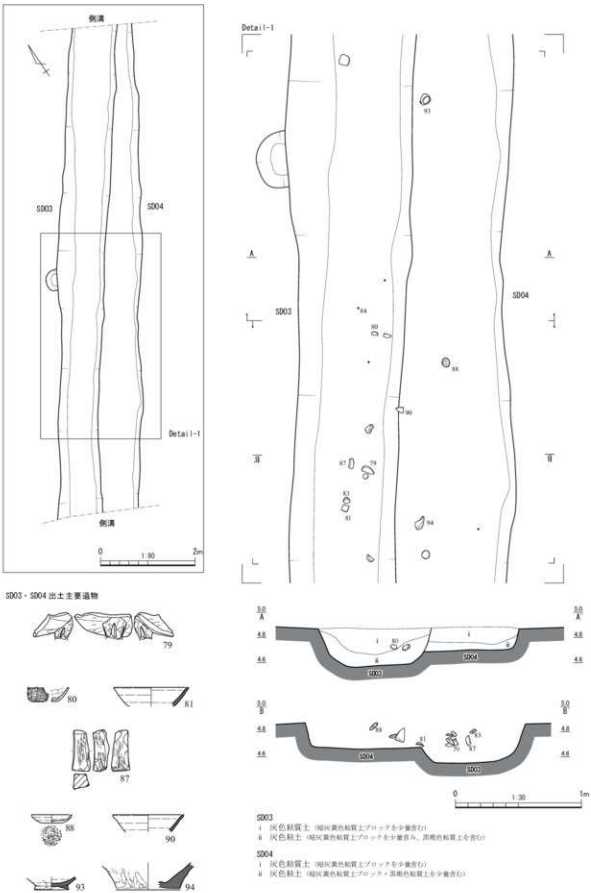



Fig.22　Ⅰ区 SD03・SD04 詳細図

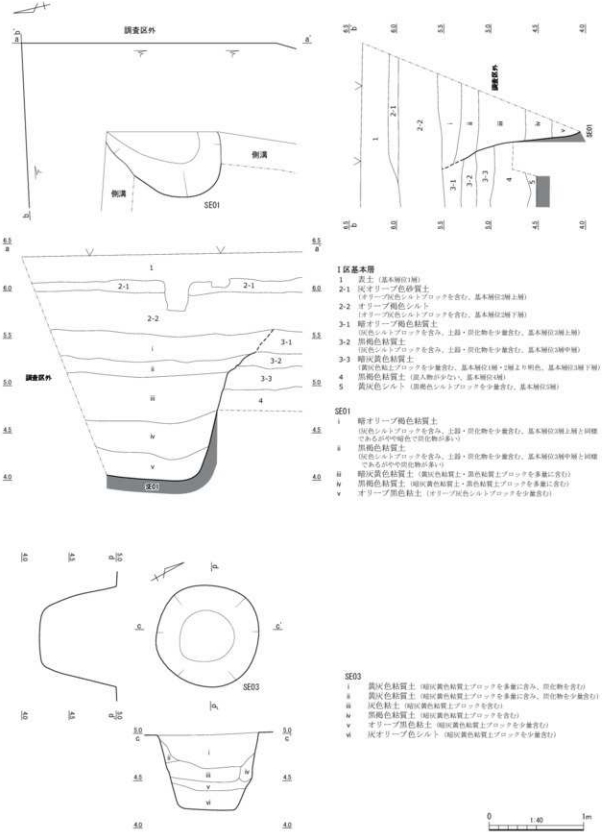



Fig.23　Ⅰ区 SE01・SE03 詳細図

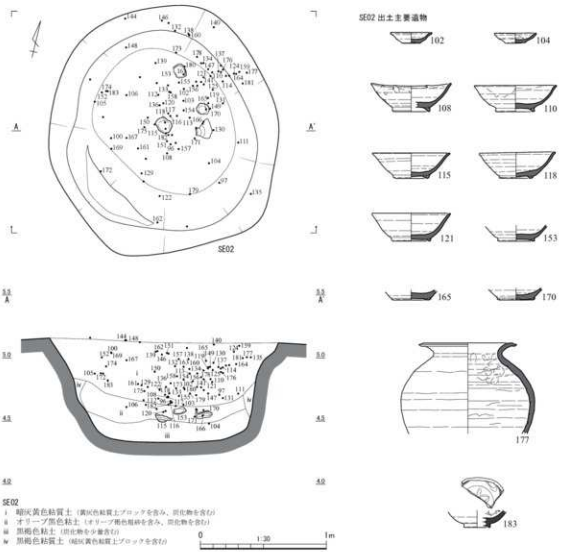



Fig.24　Ⅰ区 SE02 詳細図

である。SD01 の南約 1m の至近距離にあるが、埋土の色調や混入物が異なることや、遺物がほとんど出土していないことなどから、両者に強い関係があったとは考えにくい。時期差があるとも考えられるが、新旧関係は不明である。

**土　坑**（Fig.25）　土坑は 4 基検出した。すべてⅠ区東半部に位置し、SD03・SD04 による区画内にある。SK01・SK02 は SD01 に重複し、それより古い土坑である。ほぼ半分が SD01 構築時に壊されている。SK01 は円形または不整円形と推定され、検出面で長軸 0.96m、短軸 0.50m、深さ 0.12m である。断面形は浅い逆台形で底面はほぼ平坦である。SK02 は楕円形と推定され、長軸 0.79m、短軸 0.43m、深さ 0.14m、断面形は弧状である。SK01・SK02 間の距離は約 0.8m である。埋土がともに暗灰黄色粘質土であることや、断面形や深さが近似する点から同時期のものである可能性が高いといえるが、併存したか否かは不明である。SK01 からは山茶碗の破片と伊勢型甕の破片が、SK02 からは土師器の小破片が出土した。SD01 出土遺物との時期差は小さい。SK03 は SK01 の西南西約 5.5m に位置する土坑である。平面形は不整円形で、検出面で長軸 1.07m、短軸 1.08m、深さ 0.19m である。断面形は弧状である。SK01・SK02 と平・断面形・規模・埋土が類似し、近接した時期の構築を考えることができる。SK05 はⅠ区北壁で検出した。土層断面のみの確認である。3-2 層上面から構築され、断面形は浅い台形である。

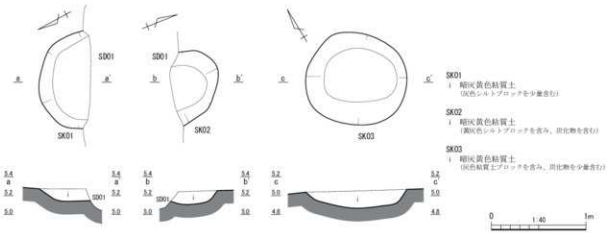



Fig.25　Ⅰ区 SK01 ～ SK03 詳細図

**小　穴**（Fig.26 ～ 29）　小穴はⅠ区上層で 55 基検出し、そのうち SX02 に伴う 11 基と、断面のみ検出した 5 基を除く 39 基を個別図示した。SP01 ～ SP12・SP15 ～ SP21 の 19 基は、Ⅰ区東端近くの東西約 8m、南北約 3m の範囲に集中する。これらの小穴のうち 10 基において柱痕が確認できた。なお、SP05 では柱根の残存が確認された。柱穴の規模はいずれも長軸 0.3 ～ 0.4m、短軸 0.25 ～ 0.35m 程度で、深さ 0.25 ～ 0.35m である。明らかに意図的に配置されたと思われる箇所もあるが、建物跡としては認定できなかった。小穴群を構成する小穴からは散発的に遺物が出土し、そのほとんどが 12 世紀～ 13 世紀のものであった。

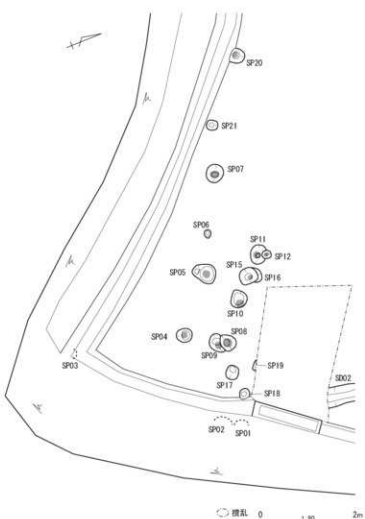
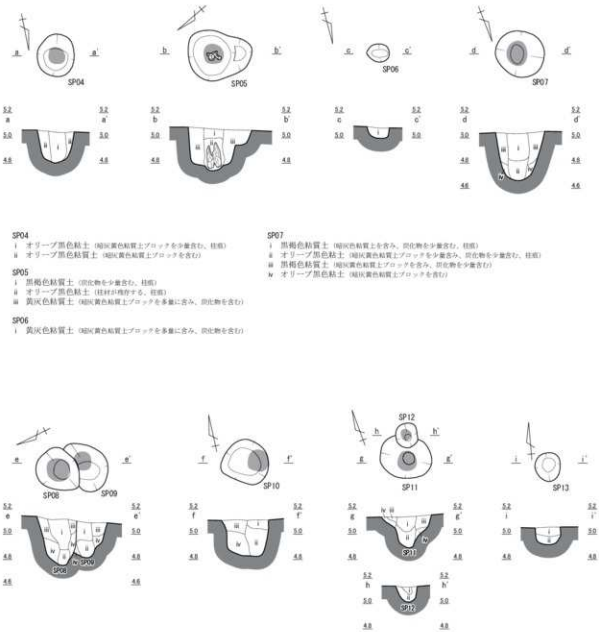



Fig.26　Ⅰ区東端小穴群

小穴群付近では、柱痕が残る SP54・SP55 をそれぞれ単独で検出した。このほか、SX01 東方に SP22 ～ SP14 が並ぶが、いずれからも柱痕は認められなかった。Ⅰ区中央部付近では小穴は疎らであり、検出した SP13・SP45・SP46 のいずれにも柱痕は認められなかった。中央以西では、柱痕が残る小穴は SX02 範囲内で検出したものに限られる。それらについては SX02 に伴うものとして掲載してあるので、ここでは割愛した。




SP04
i　オリーブ黒色粘土（暗灰黄色粘質土ブロックを少量含む、柱痕）
ii　オリーブ黒色粘土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む）

SP05
i　黒褐色粘質土（炭化物を少量含む、柱痕）
ii　オリーブ黒色粘土（柱材が残存する、柱痕）
iii　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを多量に含み、炭化物を含む）

SP06
i　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを多量に含み、炭化物を含む）

SP07
i　黒褐色粘質土（暗灰色粘質土を含み、炭化物を少量含む、柱痕）
ii　オリーブ黒色粘土（暗灰黄色粘質土ブロックを少量含み、炭化物を少量含む、柱痕）
iii　黒褐色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、炭化物を少量含む）
iv　オリーブ黒色粘土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む）

SP08
i　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを少量含み、炭化物を少量含む、柱痕）
ii　オリーブ黒色粘土（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、炭化物を少量含む、柱痕）
iii　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを多量に含み、炭化物を少量含む）
iv　オリーブ黒色粘土（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、炭化物を少量含む）

SP09
i　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを多量に含み、炭化物を少量含む、柱痕）
ii　黒褐色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを少量含み、炭化物を少量含む、柱痕）
iii　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、炭化物を少量含む）
iv　黒褐色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む）

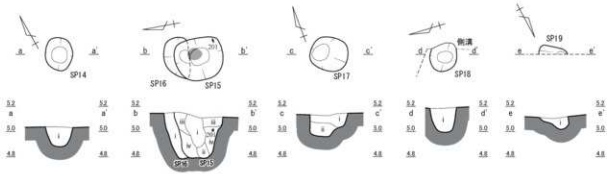
SP10
i　暗灰黄色粘質土（黄灰色粘質土ブロックを少量含み、炭化物を少量含む、柱痕）
ii　黒褐色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを少量含み、炭化物を少量含む、柱痕）
iii　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを多量に含み、炭化物を含む）
iv　黒褐色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む）

SP11
i　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む、柱痕）
ii　黒褐色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、炭化物を少量含む、柱痕）
iii　黄灰色粘質土（ややや明色、暗灰黄色粘質土ブロックを含み、炭化物を少量含む）
iv　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを多く含む）

SP12
i　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを多く含む）
ii　灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを少量含み、炭化物を少量含む）

SP13
i　灰色粘土（灰色粘質土ブロックを少量含み、炭化物を少量含む）
ii　灰色粘土（灰色粘質土ブロックを含む）

Fig.27　Ⅰ区 SP04 ～ SP13 詳細図




SP14
ⅰ 暗灰黄色粘質土（黄灰色粘質土ブロックを含み、炭化物を含む）

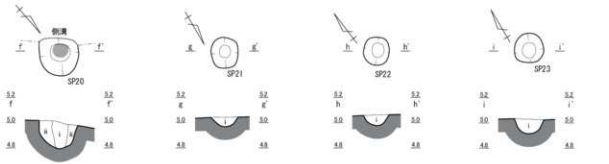
SP15
ⅰ 黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを少量含み、炭化物を少量含む。柱痕）
ⅱ 黒褐色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む。柱痕）
ⅲ 暗灰黄色粘質土（灰色粘質土を含み、炭化物を少量含む）
ⅳ 黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、炭化物を少量含む）

SP16
ⅰ 黄灰色粘質土
（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、炭化物を少量含む。下部は暗色が強く、やや粘質が強くなる）

SP17
ⅰ 暗灰黄色粘質土（灰黄色粘質土ブロックを含み、炭化物を少量含む）
ⅱ 黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む）

SP18
ⅰ 黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む。炭化物を少量含む）

SP19
ⅰ 灰色粘質土（黄褐色粘質土ブロック・暗灰黄色粘質土ブロックを少量含み、炭化物を少量含む）

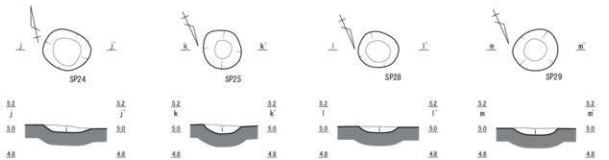



SP20
ⅰ 黄灰色粘質土
（黄褐色粘質土ブロック・暗灰黄色粘質土ブロックを少量含み、炭化物を含む。柱痕）
ⅱ 黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、炭化物を少量含む）

SP21
ⅰ 黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを少量含み、炭化物を少量含む）

SP22
ⅰ 黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、炭化物を少量含む）

SP23
ⅰ 黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを多量に含み、炭化物を少量含む）




SP24
ⅰ 黄灰色粘質土（灰黄色粘質土ブロックを含む）

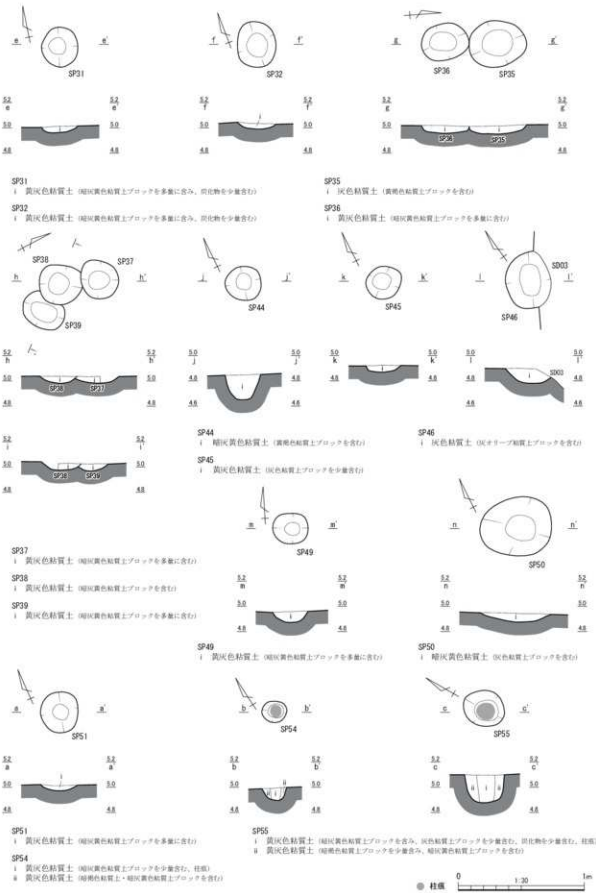
SP25
ⅰ 黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを多量に含む）

SP28
ⅰ 黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを多量に含む）

SP29
ⅰ 黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを多量に含む）

● 柱痕　0　1:30　1m

Fig.28　Ⅰ区 SP14 ～ SP25・SP28・SP29 詳細図




SP31
i　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを多量に含み、炭化物を少量含む）

SP32
i　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを多量に含み、炭化物を少量含む）

SP35
i　灰色粘質土（黄褐色粘質土ブロックを含む）

SP36
i　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを多量に含む）

SP37
i　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを多量に含む）

SP38
i　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む）

SP39
i　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを多量に含む）

SP44
i　暗灰黄色粘質土（黄褐色粘質土ブロックを含む）

SP45
i　黄灰色粘質土（灰色粘質土ブロックを少量含む）

SP46
i　灰色粘質土（灰オリーブ粘質土ブロックを含む）

SP49
i　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを多量に含む）

SP50
i　暗灰黄色粘質土（灰色粘質土ブロックを含む）

SP51
i　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを多量に含む）

SP54
i　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを少量含む、柱痕）
ii　黄灰色粘質土（暗褐色粘質土・暗灰黄色粘質土ブロックを含む）

SP55
i　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、灰色粘質土ブロックを少量含む、炭化物を少量含む、柱痕）
ii　黄灰色粘質土（暗褐色粘質土ブロックを少量含み、暗灰黄色粘質土ブロックを含む）

◎ 柱痕

Fig.29　Ⅰ区 SP31・32・35 ～ 39・44 ～ 46・49 ～ 51・54・55 詳細図

## 3　Ⅱ区の遺構

### （1）Ⅱ区における検出遺構の概要

Ⅱ区は、８次調査地の西半分で、Ⅱａ・Ⅱｂ・Ⅱｃに分割して調査を行った。本節ではこれら３つの調査区を一括してⅡ区とする。遺構検出面は、Ⅱａ区・Ⅱｂ区では基本層３- ３層上面、Ⅱｃ区では３- ２層上面とした。３- ３層上面では、Ⅱａ区で溝２条（SD9・SD10）と小穴１基、Ⅱｂ区で溝跡２条（SD12・SD13）と土坑２基（SK07・SK08）、および小穴を検出した。古代以前の遺構と捉えられる。Ⅱａ区の遺構は調査面積が少ないため詳細不明であるが、Ⅱｂ区の溝跡は蛇行しつつも地形の傾斜に沿っている。３- ２層上面では、井戸１基（SE04）と溝跡３条（SD11・SD14・SD15）、土坑３基（SK09 ～ SK11）、加えて複数の小穴が集中する小穴群を検出した。これらはいずれも鎌倉時代の遺構とみられる。このうち SD14・SD15 はⅠ区の SD03・SD04 と類似点が認められ、同様の区画溝と考えられる。遺物の様相もほとんど同じであることから同時期である可能性が高い。SD11 もおそらく区画目的の溝である。SE04 は SD11 と重複して構築され、土地の区画と生活施設の構築にある程度の時間幅があることが判る。

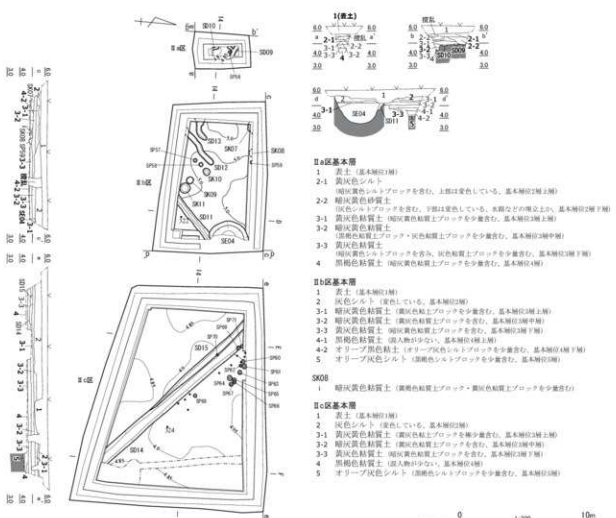
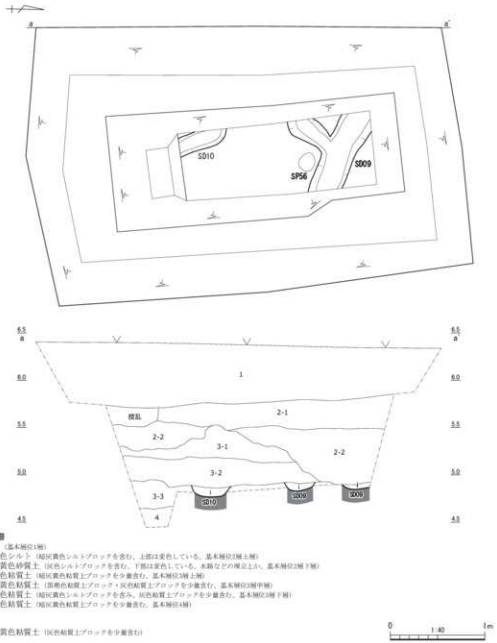



Fig.30　Ⅱ区全体図




Ⅱa区基本層
1　表土（基本層位1層）
2-1　黄灰色シルト（暗灰黄色シルトブロックを含む。上部は変色している。基本層位2層上層）
2-2　暗灰黄色砂質土（灰色シルトブロックを含む。下部は変色している。水路などの埋立土か。基本層位2層下層）
3-1　黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを少量含む。基本層位3層上層）
3-2　暗灰黄色粘質土（黒褐色粘質土ブロック・灰色粘質土ブロックを少量含む。基本層位3層中層）
3-3　黄灰色粘質土（暗灰黄色シルトブロックを含み、灰色粘質土ブロックを少量含む。基本層位3層下層）
4　黒褐色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを少量含む。基本層位4層）

SD09
i　暗灰黄色粘質土（灰色粘質土ブロックを少量含む）

SD10
i　暗灰黄色粘質土（灰色粘質土ブロックを含む）

Fig.31　Ⅱ区 SD09・SD10 詳細図

（２）Ⅱ区の遺構

**溝　跡**（Fig.31 ～ 34）　Ⅱ区全体で７条の溝跡を検出した。Ⅱａ区で SD09・SD10、Ⅱｂ区で SD11 ～ SD13、Ⅱｃ区で SD14・15 である。SD09 はⅡａ区北部に位置する概ね東西方向の溝で、Y 字形に分岐し、両端ともに調査区外へ延びる。検出面で幅 0.25 ～ 0.33m、深さ 0.05 ～ 0.08m である。検出長は 0.8m 程度で詳細は不明である。SD10 は SD09 の南約 0.6m に隣接する。検出面で幅 0.20m、深さ 0.10m、検出長は約 0.5m である。SD12・SD13 はⅡｂ区南西角付近に位置し、両者とも南西調査区外へ延びている。SD12 は幅 0.43m、深さ 0.12m、断面形は浅い逆台形で、緩く S 字状に蛇行する。SD13 は幅 0.45 ～ 0.65m、深さ 0.12m、不規則に蛇行している。以上の４条の溝跡は基本層位３- ３層上面で構築され、３- ２層に被覆されることから、古墳時代～平安時代のものである。SD11 は

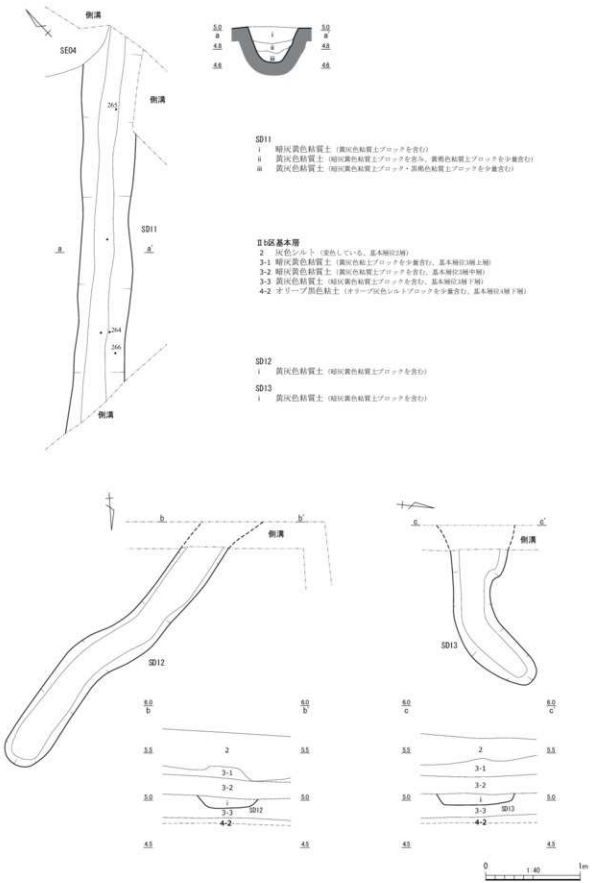



Fig.32　Ⅱ区 SD11 ～ SD13 詳細図

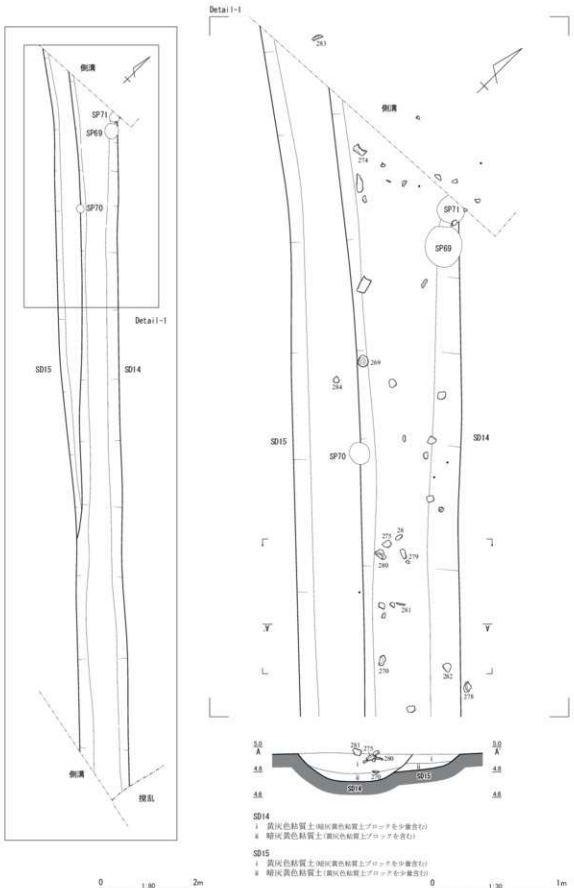



Fig.33　Ⅱ区 SD14・SD15 詳細図（１）

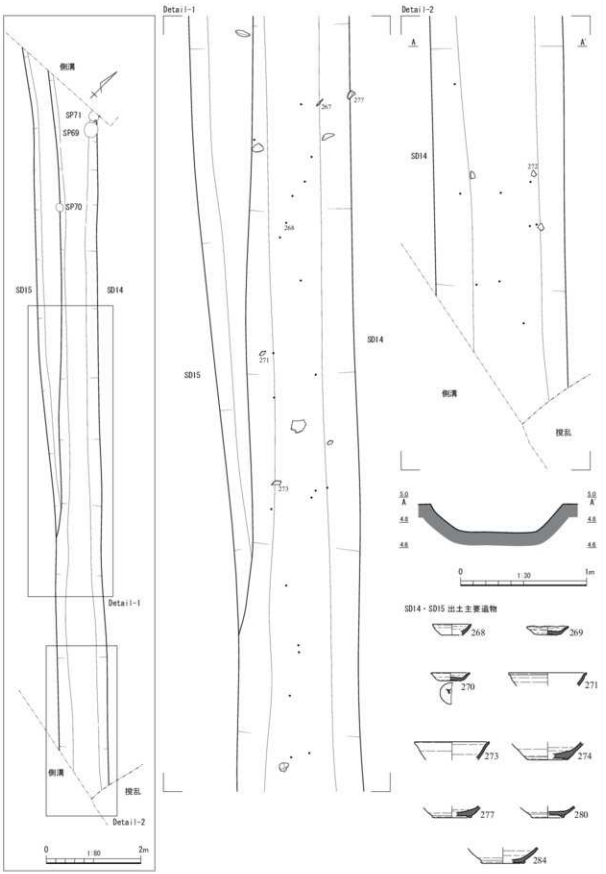



Fig.34　Ⅱ区 SD14・SD15 詳細図（2）

Ⅱｂ区南東部に位置する溝である。北東－南西方向、N-40°-Eを指して直線的に構築され、両端ともに調査区外へ延びる。幅0.56m、深さ0.37m、断面形はU字形である。形状や方向から、区画溝とみられる。遺物は13世紀の山茶碗破片が主体だが、古代の壺G破片も出土している。SD14・SD15はⅡｃ区を北西―南東方向に直線で横断する溝である。ほぼ同方向の２条の溝が重複している。SD15が古くSD14が新しい。SD14は検出面で幅0.85～1.15m、深さ0.23m、断面形は弧状である。溝の方向はN-46°-Wを示す。SD15は検出面で幅0.55m以上、深さ0.12mである。溝の方向はN-48°-Wで、地形の傾斜にほぼ直交し、等高線に沿う。これら２条の溝跡は、Ⅰ区SD03・SD04と共通する点が多い。ともに3-2層に幅0.8～1.1mで直線的に構築される点や、同じ場所で溝を再掘削して新しい溝のほうが深い点など、同時に開削、および再掘削を行ったことを強く窺わせる。調査区外で接続する可能性も十分考え得る。遺物はSD14埋土上部から多く出土し、北半からの出土量が多い。遺物の時期は13世紀である。なお、SD14から出土した小皿に墨書が認められるが、判読不能である。

**井　戸**（Fig.35）　井戸はSE04の１基のみ検出した。SE04はⅡｂ区東壁際に位置する大形の井戸である。東半は調査区外で、西半のみ発掘した。検出面の平面形は楕円形で、長軸は約3.21m、深さ1.64mである。断面形は半円形で、底面は丸底、井戸枠・石組みは存在せず、素掘りである。南端にSD11が重複し、溝が埋没した後にSE04が構築されている。ただし、構築が基本層位3-2層上面で、埋没後に3-1層に覆われる点は共通する。埋土の上部からは13世紀の山茶碗を主体とした遺物が豊富に出土し、埋没時期が当該期であることを示している。SD11で出土した遺物より新しいものが多い。また、８次調査で唯一、木製品が出土した。木製品は埋土下層の暗灰色粘土層から集中して出土しており、他の遺物と出土層位が異なることが興味深い。埋没初期に木製品が包含され、埋没の末期に山茶碗類が包含されている。井戸として利用しつつ投棄されたのが木製品で井戸跡のくぼみに廃棄されたのが山茶碗類と言うこともできよう。なお、木製品の中に、用途不明ながら巻縄状製品がある。

**土　坑**（Fig.36）　Ⅱ区の土坑SK07～SK11はいずれもⅡｂ区で検出した。SK07は調査区北西角で一部が確認された、平面形不明の土坑である。検出面で長軸1.02m、深さ0.23mである。上端から緩く斜めに掘り込まれ底面も明確でないことから、土坑以外の遺構である可能性もある。SK08は調査区壁で土層断面のみ確認された。幅0.67m、深さ0.09mである。断面形は浅い逆台形である。両土坑ともに遺物は出土していないが、構築層位から古代以前である。SK09はSK11西に隣接する土坑である。検出面で長軸0.59m、短軸0.55m、深さ0.07m、平面形はほぼ円形である。SK10はSK09の北西約0.9mに位置する。検出面で長軸0.60m、短軸0.54m、深さ0.09m、平面形は不整円形である。SK09・SK10の埋土は黄灰色粘質土で、SK11等中世の遺物が出土した土坑とは異質である。極端に浅いことからも、より上層から掘り込まれている可能性がある。SK11は調査区南壁際で検出したほぼ円形の土坑である。検出面で径0.81m、深さ0.61mである。断面形は逆台形で、底面は径0.53mの円形である。埋土の下層から山茶碗と、摩耗の痕跡がある4cm大の球形礫が出土している。

**小　穴**（Fig.37）　小穴はⅡ区全体で16基検出した。SP56・SP59は基本層3-3層上面から構築され、近くの溝跡と同様、古墳時代～古代のものとみられる。２基とも、柱痕は確認できなかった。残りの14基、SP57・SP58・SP60～SP71は基本層3-2層上面から構築されたもので、鎌倉時代と推定される。小穴のうち、SP60～SP67・SP69～SP71の11基はⅡｃ区北壁際の東西3.4m、南北2.6mの狭い範囲に密集しており、分布状況からさらに調査区外にも広がる可能性が高い。この小穴群で

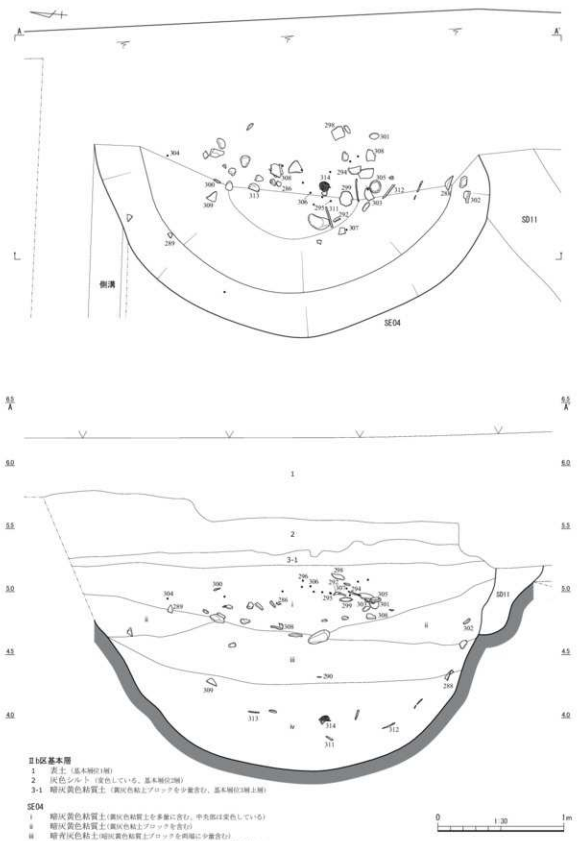



Fig.35　Ⅱ区 SE04 詳細図

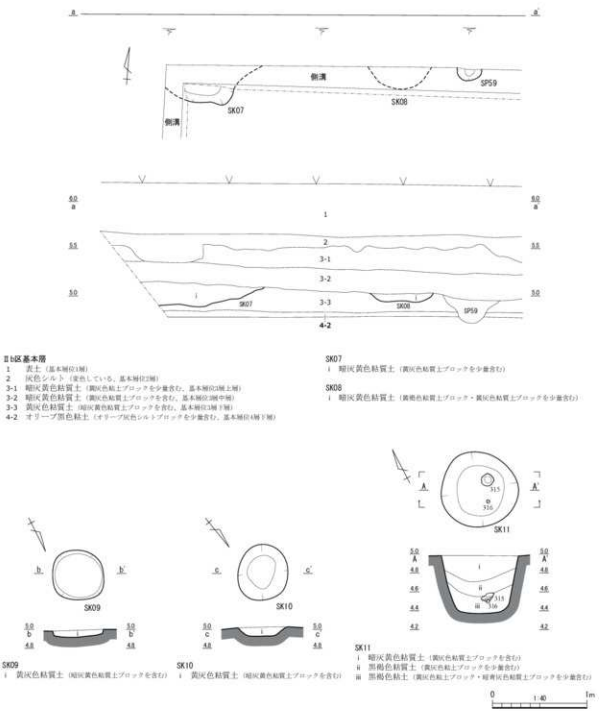
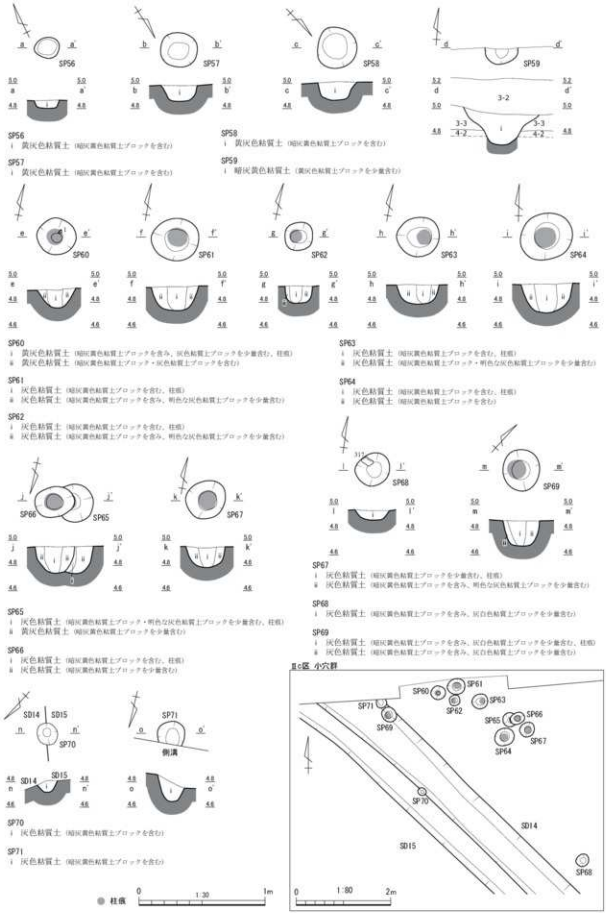



Fig.36　Ⅱ区 SK07 ～ SK11 詳細図

は、SP70・SP71 を除く 9 基で柱痕を確認した。柱穴の規模は、検出面で長軸 0.25 ～ 0.42m、短軸 0.22 ～ 0.34m であり、平均すると長軸 0.30m、短軸 0.28m 程度である。深さは 0.13 ～ 0.23m である。各柱穴の間隔は不等で、建物跡と認められる配置は確認することができなかった。SD14 と重なる SP69 ～ SP71 は溝より古いが、SP60・SP70 から山茶碗の破片が出土していることから、小穴群全体としては SD14・SD15 と大きな時期差はないものと思われる。この小穴群と SD14 の遺物が北部で多いことの関連性も考え得るのではないだろうか。本小穴群は、Ⅰ区東端の小穴群と基本的には同種の遺構と捉えられるが、具体的な構築物の姿を復元することはできなかった。




SP56
ⅰ 黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む）

SP57
ⅰ 黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む）

SP58
ⅰ 黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む）

SP59
ⅰ 暗灰黄色粘質土（黄灰色粘質土ブロックを少量含む）

SP60
ⅰ 黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、灰色粘質土ブロックを少量含む、柱痕）
ⅱ 黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロック・灰色粘質土ブロックを含む）

SP61
ⅰ 灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む、柱痕）
ⅱ 灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、明色な灰色粘質土ブロックを少量含む）

SP62
ⅰ 灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む、柱痕）
ⅱ 灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、明色な灰色粘質土ブロックを少量含む）

SP63
ⅰ 灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む、柱痕）
ⅱ 灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロック・明色な灰色粘質土ブロックを少量含む）

SP64
ⅰ 灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む、柱痕）
ⅱ 灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む）

SP65
ⅰ 灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロック・明色な灰色粘質土ブロックを少量含む、柱痕）
ⅱ 黄灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを少量含む）

SP66
ⅰ 灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む、柱痕）
ⅱ 灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを少量含む）

SP67
ⅰ 灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを少量含む、柱痕）
ⅱ 灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、明色な灰色粘質土ブロックを少量含む）

SP68
ⅰ 灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、灰白色粘質土ブロックを少量含む）

SP69
ⅰ 灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、灰白色粘質土ブロックを少量含む、柱痕）
ⅱ 灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含み、灰白色粘質土ブロックを少量含む）

SP70
ⅰ 灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む）

SP71
ⅰ 灰色粘質土（暗灰黄色粘質土ブロックを含む）

Fig.37　Ⅱ区小穴群詳細図

# 第３章　出土遺物

## １　Ⅰ区の出土遺物

**SD01 出土遺物**（Fig.38 ～ 41）　SD01 からは、上層から底面直上まで比較的豊富に遺物が出土した。大部分は山茶碗の破片で、同時期の陶器・甕破片のほか若干の土師器・須恵器と灰釉陶器１点、緑釉陶器１点、貿易陶磁器２点等が混じって出土している。そのうち、古代以前の遺物、山茶碗類、中世陶器、貿易陶磁器、および鉄・石製品を 73 点図示した。なお、山茶碗の底部破片は図示したもの以外にも多く出土しているが、口縁部破片は図示したもの以外はわずかである。1・2 は土師器皿で、1 は口径 11.4cm、高さ 3.0cm を測り、下半に削り調整を施している。2 は口径 16.4cm でやや厚手、口縁部外面に稜を有する。3・4 は土師器甕で、3 は口縁部が水平近くまで開き、口径は 21.6cm である。4 は底部破片で、外面にハケ調整を施す。土師器はいずれも８世紀代中葉～後半頃に比定できる。5・6 は須恵器で、5 は皿、6 は平行叩きが施された甕である。7 は灰釉陶器無台碗である。小片で、底部がわずかに上げ底になっている。8 は底面まで全面施釉した緑釉陶器の碗もしくは皿である。底部外縁を削り円盤状の高台を作り出している。底面に圏線状の筋がみえるが途切れている部分もある。９世紀代の畿内で生産されたものである。9 以降は鎌倉時代の遺物である。９～ 12 は伊勢型甕であり、いずれも口縁端部を短く折り返すものである。13 は山茶碗小碗で、短い「ハ」の字形の高台が付される。14 は小碗ないしは小皿である。15 ～ 18 は無台の小皿で、13 より後出のものである。17 はより扁平化が進行し、図示した中では最も新しい形態である。口径は 8.6 ～ 9.2cm である。19 ～ 63 は山茶碗である。19 は口縁が欠けているものの輪花碗の可能性がある。口縁部の器形が判る 19 ～ 40 はいずれも丸みを持って斜めに開き、程度の差はあるが口縁端

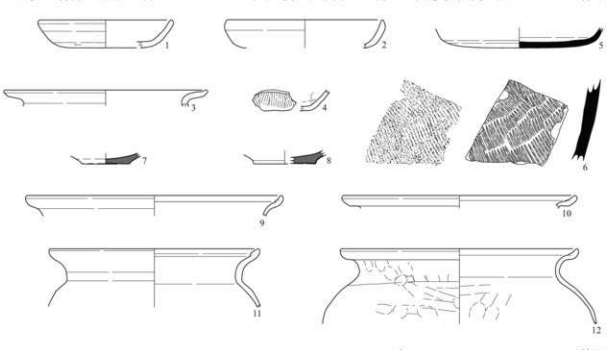



Fig.38　SD01 出土遺物（１）

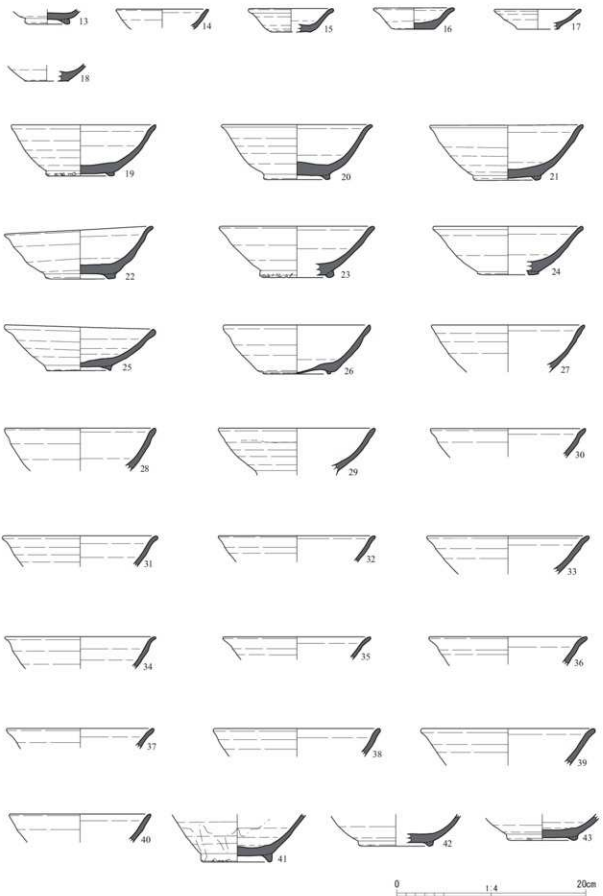



Fig.39　SD01 出土遺物（２）

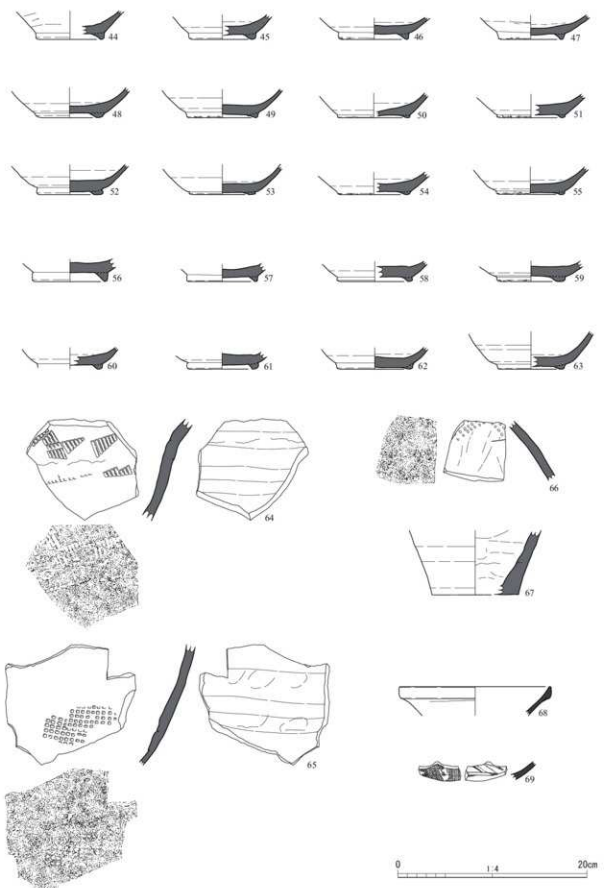



Fig.40　SD01 出土遺物（3）

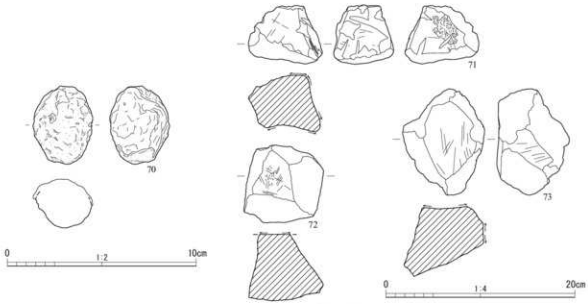



Fig.41　SD01 出土遺物（4）

部が外反する。この中で口縁部の丸みが少なく内面が直線的なものが 25・26 で、その特徴から尾張・知多産と考えられる。他の個体との時期差はないと思われる。他の山茶碗は湖西渥美産の特徴を持つ。口径が大きく高い高台をもつものなど古手の要素がみえないいっぽうで、口縁部が完全に箱形とならないことから、実年代では 13 世紀前半頃と捉えられる。64 は壺、65 ～ 67 は渥美産の甕である。押印文は肩部から下胴部にかけて帯状に施される。68・69 は貿易陶磁器で、68 は玉縁の白磁碗、69 は外面櫛描文・内面劃花文の青磁碗である。ともに 12 世紀のものである。70 は用途不明の楕円体鉄製品である。重さは 37.1g である。71 ～ 73 はいずれも砥石破片で、一部に研磨された面を残している。石質は砂岩で、３点ともに被熱が認められる。この他にも複数の石製品破片、礫類が出土しており、その多くに被熱が確認できる。

**SD02 出土遺物**（Fig.42）　SD02 からは、埋土上層から少量の遺物が出土した。いずれも小破片であるため、このうち５点を図示するにとどまった。74 は土師器甕の底部破片であり、古代のものである。75 は山茶碗小碗である。口径 9.0cm。76・77 は小皿で、77 は口縁にくぼみが認められ、片口の可能性がある。口径は 76 が 10.0cm、77 が 9.4cm である。78 は輪花碗である。中世の遺物はいずれも、12 世紀末～ 13 世紀のものと考えられる。

**SD03 出土遺物**（Fig.42）　SD03 からは、埋土中位から山茶碗破片類を主として遺物が出土した。それらに混じって古代の畝足が出土している。これらから９点を図示した。79 は畝足で、残存する器形から畝脚付壺だと考えられる。６次調査 SD06 で出土した畝足と造形がよく似ており、正面・側面に施される３条の深い刻みも同様である。表面は細かな削り調整で整形している。80 は土師器甕の底部である。81 ～ 86 は山茶碗である。81・82 などは口縁端部の外反が少なく、やや厚手で口縁部の丸みもあまりないが、84 はまだ丸みを残している。逆に 86 は口縁部が直線的で腰の張りもなく、図示した中では新しい段階の資料である。実年代では 13 世紀中葉頃であろう。87 は砥石で、直方体の４側面すべてを使用している。また、下端部には敲打痕が認められる。

**SD04 出土遺物**（Fig.42）　SD04 からは、山茶碗を主体として少量の遺物が出土したが、それらの中にかわらけや土錘が混じることが特筆される。SD04 出土遺物のうち８点を図示した。88 は完形のかわらけである。ロクロ成形で、底部から口縁部がやや内湾しつつ開き、外面に稜を有する。底面は回転糸切り痕が残り、無調整である。口径 8.2cm、底径 4.2cm、高さ 1.8cm である。山茶碗と

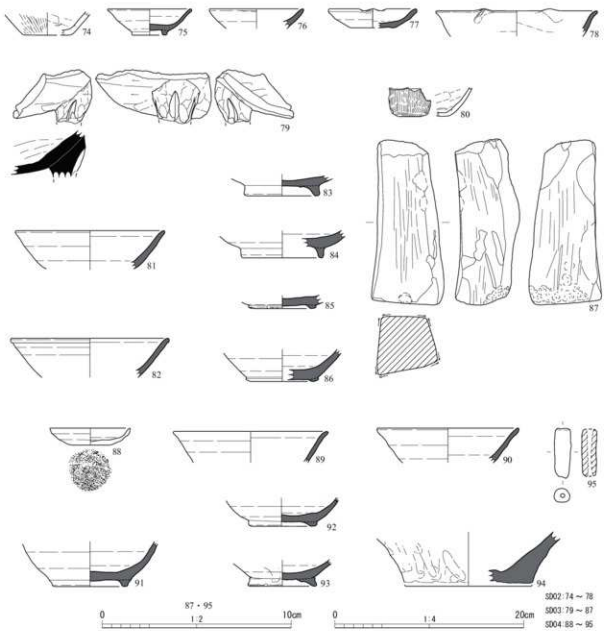



Fig.42　SD02 ～ SD04 出土遺物

同時期のものと捉えられる。89 ～ 93 は山茶碗である。口縁端部は外反し、口縁部はやや丸みを持つ。SD03 出土遺物に比べるとやや古い要素があり、遺構の重複関係と整合している。94 は陶器の甕である。95 は土錘で、ほぼ完形品である。直線的な円筒形で、長さ 2.6cm、直径 0.8cm、孔径 0.3cm で古代～中世に普遍的に存在する形状である。重さは 1.8g である。

**SE02 出土遺物**（Fig.43 ～ 46）　SE02 からは、埋土上端から底面付近まで豊富な遺物が出土した。総点数はおおよそ 200 点に及ぶ。主体を占めるのは SD01 ～ SD04 と同様に山茶碗破片で、古代以前の遺物が混じって出土している。須恵器、灰釉陶器、かわらけ、山茶碗類、壺・甕、貿易陶磁器を合計 88 点図示した。96 ～ 98 は古代の須恵器である。96 は壺で、広く平らな底面に長方形の高台を付している。97・98 は甕である。99 はかわらけで、非ロクロ成形、底径が大きく扁平な器形である。小片であるが推定で口径 7.8cm、底径 5.4cm である。100・101 は山茶碗の小碗、102 ～ 107 は無台の小皿である。102 ～ 105 は口縁部中程に稜を持つやや深めのもの、106・107 は浅く扁

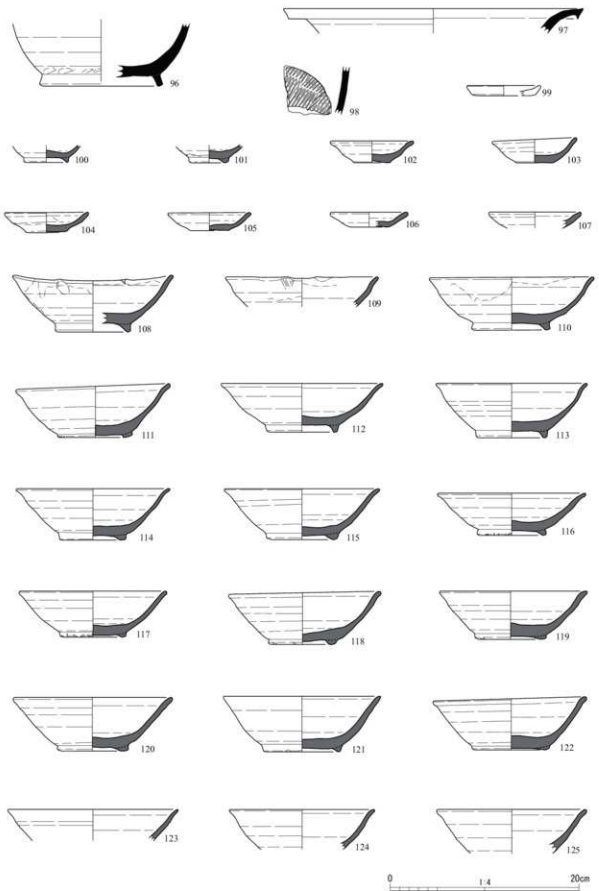



Fig.43　SE02 出土遺物（１）

Fig.44　SE02 出土遺物（2）

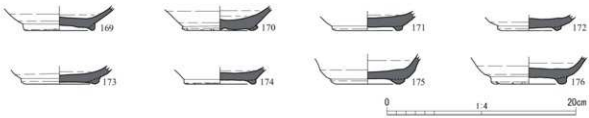



Fig.45　SE02 出土遺物（3）

平なものである。口径は 8.2 ～ 9.8cm である。108 ～ 176 は山茶碗である。108・109 は輪花碗、110 ～ 136 で器形が判別できるものはすべて口縁部に丸みを持つ。口縁が残存しないものの中には輪花碗が含まれる可能性もある。このうち 129 は高台部の色調が体部と著しく違い（PL.28 参照）、器形も他の個体と差異がみられる。8 次調査では、Ⅰ区包含層出土の 240 が同様の特徴をもつ以外、他に類例がみつけられなかった。類似する器形の製品は渥美の笹尾窯や坪沢窯などでみられる。137 ～ 174 は口縁部がやや直線的になっているものの、箱形とはいえない器形である。山茶碗の末尾に掲載した 175・176 は底部からの立ち上がりが急で、箱形といえるかもしれない。全体としては丸みを持ち口縁端部が外反するものが主体で、後続する箱形の碗がほとんどみられないことから 12 世紀末～ 13 世紀前半頃に比定でき、SD01 と概ね同時期である。177 は広口壺で、口縁部は内面にわずかな段を有し、端部は薄く尖りやや垂れ下がるまで大きく開く。胴部はなで肩で丸く、押印文は認められなかった。178 ～ 180 は片口鉢の底部である。178 底面には焼成前に「コ」字状の篦記号と抉りによる円形窪みが施される。181・182 は甕で、182 には押印文が施される。183 は龍泉窯系の青磁碗で、内面には劃花文を配する。底部内面に描かれているのは蓮花と推定される。

**SE03 出土遺物**（Fig.47）　SE03 からは土師器、灰釉陶器、山茶碗の小破片が約 10 点出土した。うち図示可能な灰釉陶器 1 点を図示した。184 は碗で、薄手で口縁端部の反りは弱く、釉を漬け掛けしている点から折戸 53 号窯式である。

**SK01 出土遺物**（Fig.47）　SK01 からは山茶碗、土師器の小破片が十数点出土し、うち図示可能な 2 点を図示した。185 は土師器甕で、古代のものである。186 は伊勢型甕で、口縁端部を短く折り返す。SK01 は SD01 と重複し切り合い関係からは SD01 より古いが、遺物からは明確な時期差を窺うことができない。

**SK03 出土遺物**（Fig.47）　SK03 からは土師器・須恵器・山茶碗の小破片が数十点出土した。うち 187 の 1 点を図示した。187 は山茶碗である。底部外面は回転糸切痕が残り、未調整である。比較的高い高台を付し、口縁部は丸みをもって立ち上がる。

**SK04 出土遺物**（Fig.47）　SK04 は、埋土中位から土師器台付鉢 1 点、石類 4 点がまとまって出土した。この 5 点を図示した。188 は土師器の台付の盤・皿類もしくは鉢で、内外面に赤彩を施し、焼成後に大きく「×」形の線刻を施す。古代のものと捉えられる。189 は流紋岩製の砥石で、上端と折損部を除き全面に擦痕が認められる。上端は細かい敲打痕が残る。190 ～ 192 は楕円形の自然礫であるが、190・191 には中央部にわずかな摩耗が認められ、192 は上下端に敲打痕がある。重量は 190 が 463.8g、191 が 330.7g、192 が 236.7g である。192 に摩耗が観察できないものの、この 3 点は一組の編物石の可能性がある。SK04 出土遺物は、出土状況や遺物の様相から、何らかの意図をもって集められた印象を受け、祭祀等に伴う埋納遺構と想定できる。なお、図示したもののほかに土師器小破片少量と、形状不詳の小型鉄製品が出土している。

**SP04 出土遺物**（Fig.47）　SP04 は、SP01 ～ SP20 で構成される Ⅰ 区東端部小穴群の一つである。出土遺物は少なく、193 の山茶碗小碗 1 点を図示した。193 は小碗で、高台径は 5.2cm で比較的大

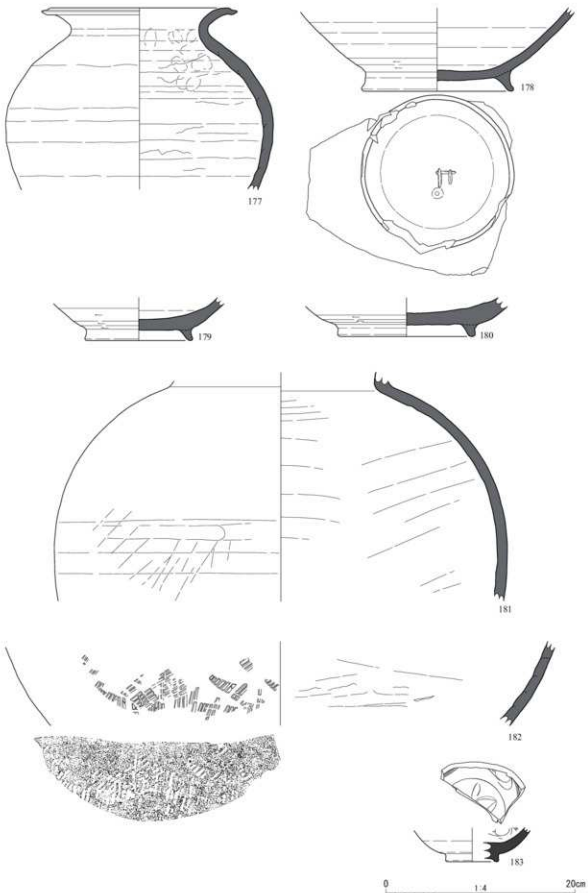



Fig.46　SE02 出土遺物（4）

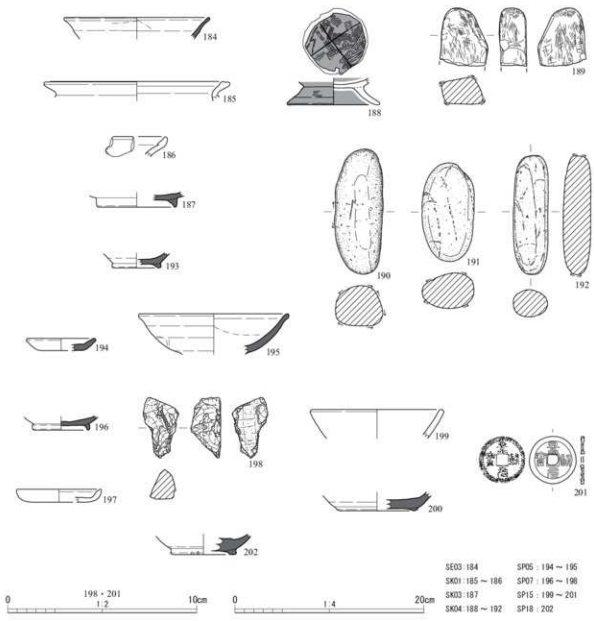



Fig.47　SE03・SK01・SK03・SK04・SP04・SP05・SP07・SP15・SP18 出土遺物

形である。

**SP05 出土遺物**（Fig.47）　SP05 は、SP04 と同じくⅠ区東端部小穴群の一つである。出土した２点を図示した。194 は山茶碗小皿である。口縁部が短く扁平で、口径 7.4cm と小さい。13 世紀中頃のものと思われる。195 は山茶碗で、口径 16.0cm である。器形その他の特徴から小皿より古い段階のものとみられる。なお、SP05 には柱根が残存していた（Fig.27）。

**SP07 出土遺物**（Fig.47）　SP07 は、Ⅰ区東端部の小穴群の一つである。出土した３点を図示した。196 は灰釉陶器碗で、三日月高台を付しており黒笹 90 号窯式～折戸 53 号窯式のものと捉えられる。197 はかわらけで、底径が大きく扁平なものである。口径は 9.0cm、底径は 7.6cm である。198 は石器で、石材はチャートである。原礫面を残す剥片の縁辺を細かく打ち欠いている。定型的な石器ではなく、用途目的は不明である。長さ 3.2cm、重さは 8.2g である。

**SP15 出土遺物**（Fig.47）　SP15 は、Ⅰ区東端部の小穴群の一つである。土師器・須恵器破片、山茶碗、

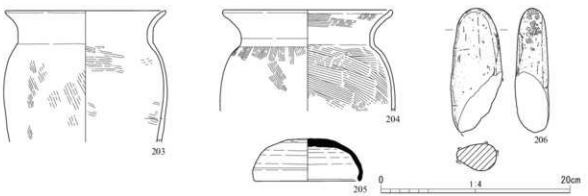



Fig.48　SX02 出土遺物

渡来銭、打割穿が出土した。うち図示可能な３点を図示した。199 は土師器杯で、口縁部はやや急に立ち上がる。８世紀頃と思われる。200 は山茶碗で、厚手、直線的な立ち上がり、つぶれた高台などの要素が認められる。201 は北宋銭の景祐元寶（1034 年初鋳）である。

**SP18 出土遺物**（Fig.47）　SP18 は、Ⅰ区東端部の小穴群の一つである。出土した１点を図示した。202 は山茶碗である。口縁部の立ち上がりが丸みを帯びる。高台下面には籾痕が顕著である。

**SX02 出土遺物**（Fig.48）　SX02 範囲内からは土師器破片が多量に出土したが、その大部分は 203・204 の甕のものであった。これらの甕と共伴した石器と SP43 出土の須恵器を加えて４点を図示した。203・204 は両者ともに口縁部から胴部までの残存で、底部は出土しなかった。203 は長胴甕で、口縁部が弧状に外反する。胴部外面には縦方向のハケ調整、内面には横方向のハケ調整を施す。204 も長胴甕で 203 に比べると頸部の屈曲が明瞭で肩が張っている。口縁端部がわずかに摘まみ上げられる点も異なる。調整は胴部外面が縦方向のハケ調整、内面は口縁内面も含めて横方向のハケ調整を施している。口径は 203 が 17.0cm、204 が 17.8cm である。器形の違いはあるもののほぼ同時期のものとみられ、遠江型長胴甕出現以前の７世紀前半～中頃と考えられる。205 は蓋坏の蓋である。SP43 からの出土であるが、SX02 に伴う可能性が高い。天井部がほぼ平坦で口縁部はやや内湾する。口径は 11.2cm、高さ 4.5cm で甕とほぼ同時期の７世紀前半～中頃を中心とした時期のものである。206 はわずかに摩耗、敲打痕が認められる楕円礫である。

**Ⅰ区包含層出土遺物**（Fig.49・50）　表土掘削から遺構検出までの調査過程で出土した遺物と、排水溝掘削時に出土した遺物をまとめて包含層出土遺物として本目に図示した。包含層からは数百点の遺物が出土し、主体は山茶碗である。古墳時代～古代の土師器・須恵器、灰釉陶器、陶器類、および数点の石器・礫が混じる。うち 57 点を図示した。207 ～ 214 は土師器である。207 ～ 210 までが古墳時代に属するもの、211 ～ 214 が古代に属するものである。207 は高坏の坏部で口径 15.6cm、内外面に赤彩を施す。208 は皿で、平坦な底部から短い口縁部が急角度で立ち上がる。口径は 19.0cm で、内外面に赤彩を施す。209 は脚付皿で、内外面赤彩である。210 は甕で、SX02 出土資料に類似する長胴甕と推定される。口縁部は緩く弧状に反り、内面には横方向のハケ調整を施す。いずれも古墳時代終末期頃のものと思われる。211 ～ 213 はいずれも遠江型長胴甕で、底部破片の 214 もおそらく同類であろう。口縁部が大きく開き、端部はわずかに上向く。胴部が残存する 213・214 には外面に斜め方向のハケ調整を施す。８世紀中頃に比定できる。215 ～ 217 は須恵器である。215 はつまみ付き蓋で、７世紀後半と推定される。216 は皿で、回転削りを施す底部から口縁部が丸みをもって滑らかに開く。６次調査 SD06 上～中層で類例が出土し、遠江編年 V-2 ～ 3 期の８世紀代に比定できる。217 は箱坏である。７世紀後半～８世紀頃とみられる。218 ～ 220 は灰

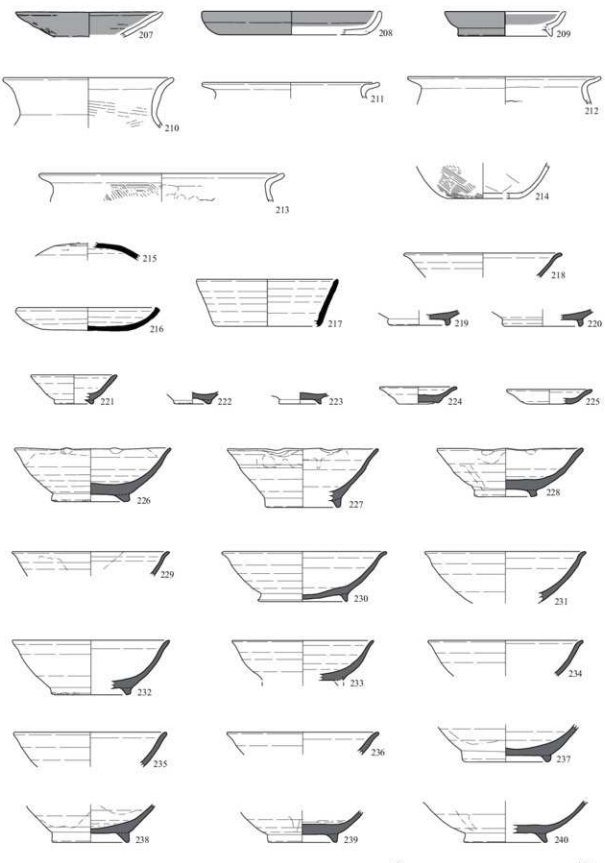



Fig.49　Ⅰ区包含層出土遺物（1）

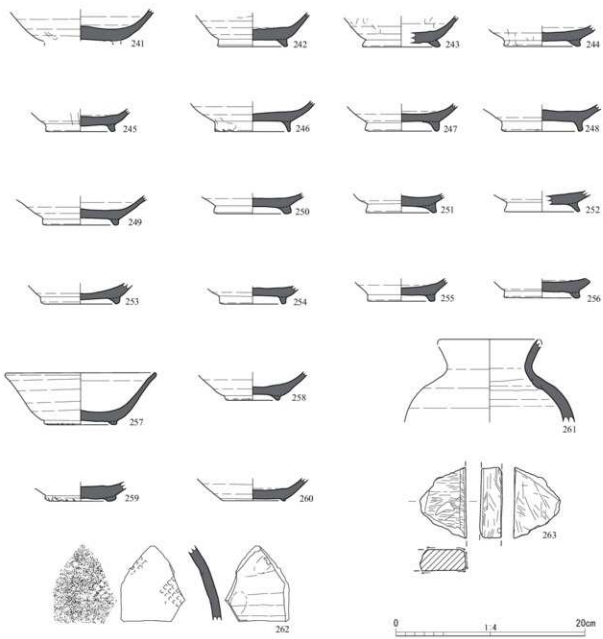



Fig.50　Ⅰ区包含層出土遺物（2）

釉陶器の碗で、いずれも黒笹90号窯式～折戸53号窯式である。221～223は山茶碗の小碗である。221の口径は9.1cmである。224・225は小皿で、口径は224が8.2cm、225が9.0cmである。226～260は山茶碗である。226～228は輪花碗で、釉の漬け掛けが認められる。229・237・238等にも灰釉を漬け掛けしている。これらを含め、256までの資料は口縁部が丸みを持ち、口縁端部が外反し、高い高台を付すものである。口径は、230の17.4cmを筆頭に231が17.0cm、226が16.6cmなど16cmを超えるものが多く、出土資料の中で古い段階に位置づけられる。これに対して、257～260は口縁部が直線的なものである。257の口径は16.0cmで、まだ小形化に至ってはいない。出土した山茶碗の中には、明確に箱形と言える個体は認められなかった。261は口縁部が短く外反する小型壺である。262は押印文の施された渥美産の甕破片、263は板状の砥石破片で、石材は流紋岩である。

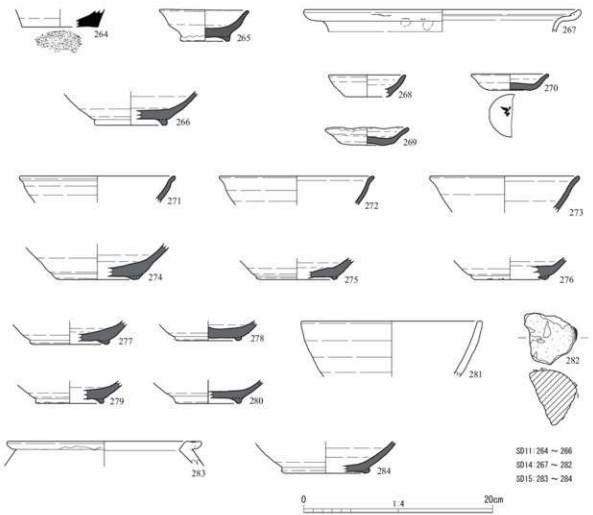



Fig.51　SD11 ～ SD15 出土遺物

## 2　Ⅱ区の出土遺物

**SD11 出土遺物**（Fig.51）　SD11 からは完形の小碗と古代の壺 G を含む 7 点の遺物が出土し、うち 3 点を図示した。264 は助宗窯産の須恵器壺 G である。底面は回転糸切痕が残り、未調整である。直線的な体部が急角度で立ち上がる。底径は推定で 8.0cm である。265 は完形の山茶碗小碗である。口径 9.5cm、高台径 5.3cm、高さ 3.4cm。266 は山茶碗である。

**SD14 出土遺物**（Fig.51）　SD14 からはやや豊富に遺物が出土し、特に北半に偏在していた。主体は山茶碗破片で、甕類破片と礫類が混じる。うち 16 点を図示した。267 は伊勢型甕で、口径は 29.4cm である。268 ～ 270 は小皿で、268 はやや深めのもの、269・270 は口縁が外反する扁平なものである。270 の底面には判読不能ながら墨書が認められる。271 ～ 280 は山茶碗で、口縁端部は外反し、口縁部は丸みをもつものと直線的なものがある。高台は総じて低い。281 は鉢で推定口径 19.2cm である。282 は摩耗ある礫の破片である。被熱して変色している。

**SD15 出土遺物**（Fig.51）　SD15 は大部分を SD14 に壊され、遺物の出土は少ない。出土遺物から 2 点を図示した。283 は 8 次調査で唯一の清郷型甕である。口径は 20.3cm で、口縁は短く外反し胴部には指抑えがみられる。10 世紀後半と思われる。284 は山茶碗で、底面の外縁に低い高台を付す。

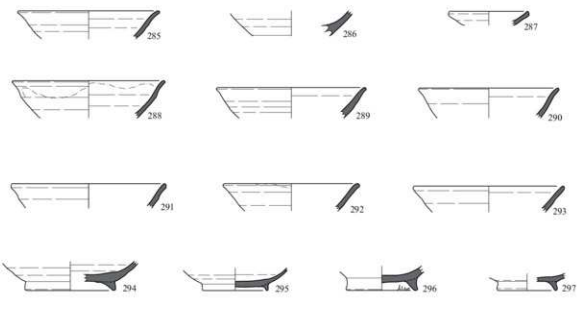



Fig.52　SE04 出土遺物

**SE04 出土遺物**（Fig.52・53）　SE04 からは埋土上層と底面近くの下層で遺物が豊富に出土した。上位には陶器・山茶碗類が集中し、下層に木製品が集中する。うち 30 点を図示した。285・286 は灰釉陶器碗で、黒笹 90 号窯式である。287 は扁平な山茶碗の小皿で、口径 8.5cm、高さ 1.5cm である。288 ～ 307 は山茶碗である。292 のように口径 14.4cm と小形化した個体があるいっぽう、294 のように 17cm を超えるとみられる個体も混じっている。308・309 は甕である。308 の口縁部は大きく反り返り、端部は段を有して薄く尖る。口径は 32.3cm である。310 は古瀬戸の皿または鉢の底部である。底径は 10.2cm、ロクロ整形で無釉、外面は肌色、内面は灰白色である。遺構埋没時期の上限を示す遺物と捉えられる。311 ～ 314 は木製品類である。311・312 は薄い板状木製品で、何らかの製品の破片か再利用の可能性がある。312 は縁辺の一部にささくれ状の逆棘があり、斎串の可能性もある。313 は不整円形の薄板で、長軸 7.6cm、厚さ 0.4cm である。表面は比較的丁寧に削られ、二か所に長方形の貫通孔を設ける。314 は直径 1.2cm の木の棒を芯として樹皮を粗く撚った縄を幾重にも巻き付けたもので、縄の太さは 6mm 前後である。長さ 7.0cm、幅 5.6cm、厚さ 3.3cm で、断面形は楕円形である。用途は不明である。

**SK11 出土遺物**（Fig.53）　SK11 からは山茶碗と 4 cm 大の円礫が共伴して出土した。その 2 点を図示した。315 は山茶碗で 7 割が残存する良好な資料である。316 の円礫は表面が研磨によって光沢をもち、一部には線状痕もみえる。磨石として使用したことが明白である。山茶碗内面底部も摩耗しており、両者が一組である可能性も考えられて興味深い。

**SP68 出土遺物**（Fig.53）　SP68 はⅡ c 区の小穴群の南東約 2.8m に位置する。出土した 1 点を図示した。317 は山茶碗である。口縁部は丸みをもって開く。高台は剥離している。

**Ⅱ区包含層出土遺物**（Fig.53）　Ⅱ a・Ⅱ b・Ⅱ c 区の遺構外から出土した数十点の遺物から、7 点を図示した。318 は須恵器箱坏である。319 は灰釉陶器碗で、低い三角形の高台を付す。東山 72 号窯式か。320・321 は山茶碗小皿で、320 の底径は 5.0cm、321 は 4.2cm である。322 ～ 324 は山茶碗である。

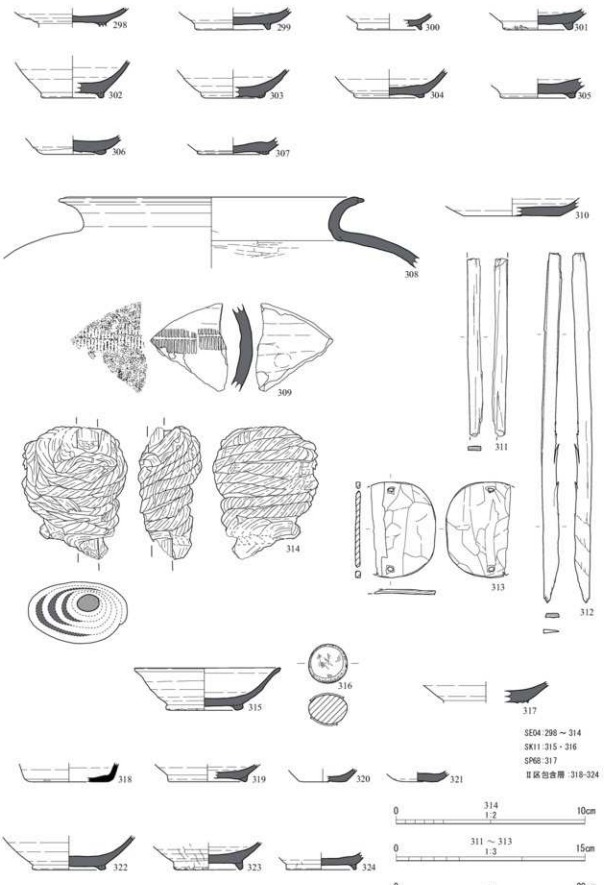



Fig.53　SE04・SK11・SP68・Ⅱ区包含層出土遺物

# 第4章　後　論

## 遺跡景観の復元―中世の様相―

### （1）出土遺物概観

宮竹野際遺跡8次調査では、山茶碗が遺物の主体をなしているが、特にSD01・SE02からの出土量が多い。これら2遺構から出土した山茶碗はいずれも胎土が砂質であり、器表面が粗い。湖西産美濃産のものとみられる。緻密な胎土が特徴となる北部系の美濃須衛型、東濃型はみられなかった。さらに、薄手で青灰色であることが特徴的な東遠型も確認できなかった。総じて器形が比較的深めで、高台は断面が逆台形、方形、つぶれた楕円形等の変化があり、輪花や釉薬漬け掛け等、古い要素を持つものは高台が高い。畳付きにみられる融着防止の痕跡には籾痕と砂目があり、つぶれた低い高台に籾痕を残す資料が目立つ。底面がやや厚く、1cm前後を測る厚い個体が多い。こうした湖西渥美窯の特徴を示す資料の中に混じり、尾張・知多産と思われる資料が少量認められた。SD01の25・26は直線的な口縁部と、内面をくぼませる底面、細くて断面形が三角形の高台など、他と異なる特徴をもつ。胎土も他と比較するとやや粗く砂粒が目立つ。また、湿美湖西産の製品の中にも高台と器体で明確に胎土・色調が違うものが少数確認された。掲載129（PL.28参照）と75であり、どちらも器体より高台部が黒く、やや胎土が粗い。129は口径が不明ながらかなり大型で、出土遺物の中では古手に位置づけられる資料である。

法量では、両遺構の資料はすべて口径15.0cm以上であり、推定18cm近くとなるものも確認されている（Fig.55）。SD01では、小破片を除くと33の口径17.6cmが最大値である。17cmを超えるものは1点のみで、他は15.6cm～16.6cmの範囲に収まり、16.0～16.4cmのものが最も多い。口径16.6cmの29は口縁部の丸みが緩やかで腰が張り、SD01出土遺物の中では最古段階とみられる資料である。SE02では、同じく小破片を除くと口径17.4cmの110が最も大きく、3点が17cm以上である。口径17cm以上の個体と17cm未満の個体で明らかに器形が違い、興味深い。3点以外は口径15.6～16.9cmで、16.0～16.6cmが最も多い。口径値と生産時期は相関が認められており、挿図に引用した鈴木敏則の論考によると（鈴木2013）山茶碗の口径が16cm台前後となるのはⅡa～Ⅲa期前半である。

SD01・SE02では、山茶碗とともに高台付小碗と小皿が出土している。SD1では、小皿の口径は8.6～9.2cm、器高は2.1～2.5cmで、鈴木編年によると扁平化以前のⅡa～Ⅱc期である。SE02は102が口径8.8cm、器高2.3cm、103が口径9.0cm、器高2.7cmであるいっぽう、106は口径8.2cm、器高1.6cmと扁平化・小型化した段階とみられる個体である。107も細片ながら器高1.7cmで底径が大きい。SE02の資料はⅡa～Ⅲa期のものとみられる。

SD01とSE02の遺物を比較すると、山茶碗では、古い段階においてSE02のほうが全体に遺存が良好で、SE02への遺物投棄開始がSD01開削に先行する可能性がある。両遺構ともに最新資料は口径15cm台後半で箱形への変化以前である。しかし、SE02の扁平小皿の存在から、埋没終了時期にもずれがあった可能性が考えられる。よって、遺物からは両者の帰属時期は、SE02埋没開始→SE02へ遺物投棄開始（Ⅱa）→SD01開削・遺物投棄開始（Ⅱa～Ⅱb）→SD01埋没（Ⅱc）→SE02埋没（Ⅲa）と復元することができる。

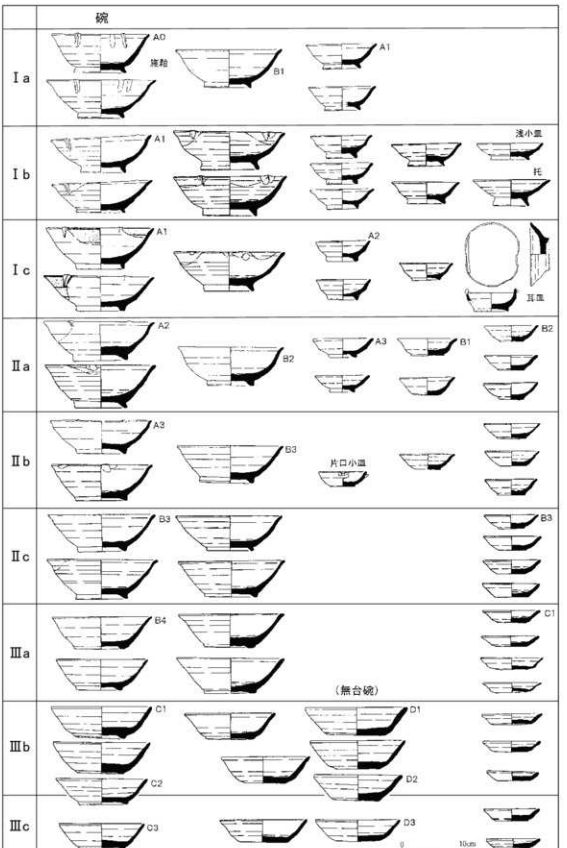



Fig.54　湿美湖西窯の碗皿類編年図（鈴木 2013 から引用）

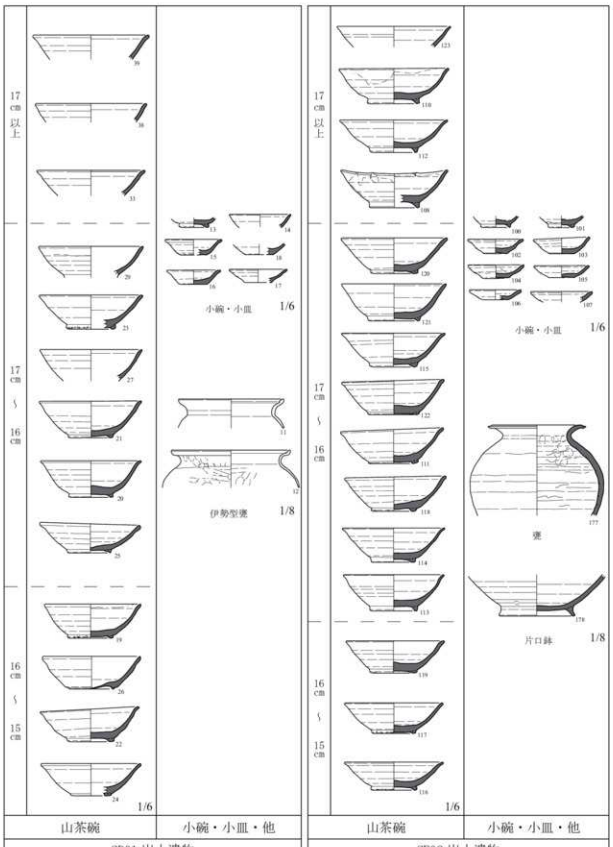



Fig.55 SD01・SE02 出土主要遺物

（2）中世鎌倉時代の遺構

8次調査における遺構・遺物の数量的主体は12世紀末～13世紀前半の鎌倉時代である。当該期と考えられる遺構は、SD1～SD4・SD11・SD14・SD15、SE02～SE04、SK01～SK03・SK05・SK09～SK11、およびⅠ区東端とⅡc区で検出した小穴群である。なお、SD03・SD04とSD14・SD15については、ともに同一遺構の再掘削と捉えられ、埋土や出土遺物からみるかぎり新旧遺構間の時期差は大きくないとみられることから、以下の記述ではそれぞれSD03・04、SD14・15として一括することにしたい。小穴群については、個々の構築時期までは確定できないものの出土遺物がいずれも鎌倉時代の所産であること、調査区壁で構築層位が確認できるSP01・02は基本層位3-2層を掘り込んで3-1層に被覆されていることから、一括して中世に位置づけた。

これらのうち溝跡は基本的に区画目的と推定され、過去の調査に類例を求めることができる。8次調査では、溝跡と井戸が同時期に併存したSD01・SD02とSE02の複合施設が確認されたことが特筆される。SD01は、西方に傾斜する地形に沿って直線的に構築された溝で、SE02からの排水を流すことを目的とした可能性も考え得るが、埋土に水成堆積と認められる土層がなかった点、底面付近まで遺物が出土している点、直角に交わるSD02が併存する点から、単純な排水溝とはみなしがたい。過去の調査事例に倣って区画を目的とした遺構と捉えられよう。なお、SD02は地形の傾斜には一致せず、どこへも繋がっていない。この点も、水路と看做しえない根拠の一つである。おそらく、井戸を基点として何らかの境界とされていたものであろう。なお、井戸と溝跡が接続する位置関係はⅡ区のSD11とSE04も同様であるが、構築時期に差があることが確実なためこちらは別個の遺構と判断した。SD11の方向がSD14・15と概ね直交することが注目される。

SD01・02が生活域を区切る小区画施設だとすれば、それよりも大規模なSD03・04、およびSD14・15はさらに大きな面積で土地を分ける地割溝である。SD03・04は概ね北東―南西方向の溝であるが、この方向は基本的に地形の傾斜に沿っている。8次調査、および1・2次調査でみつかった中世の区画溝はいずれも同方向か直交する方向に構築され、地形に規範された土地区画がなされていたことが判る。SD14・15はほぼSD03・04と直交するが、調査区西方の窪地の影響か若干南北方向へ振れている。溝による区画内ではそれぞれで井戸を検出しており、区画範囲それぞれが一

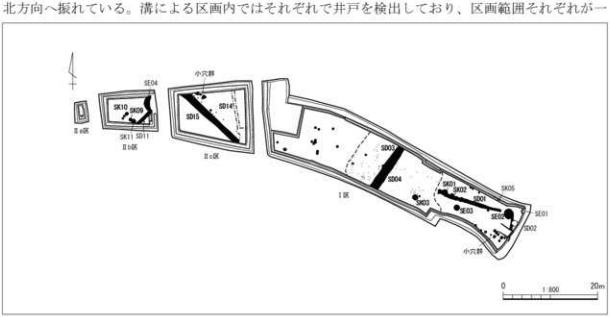



Fig.56　8次調査における中世の遺構

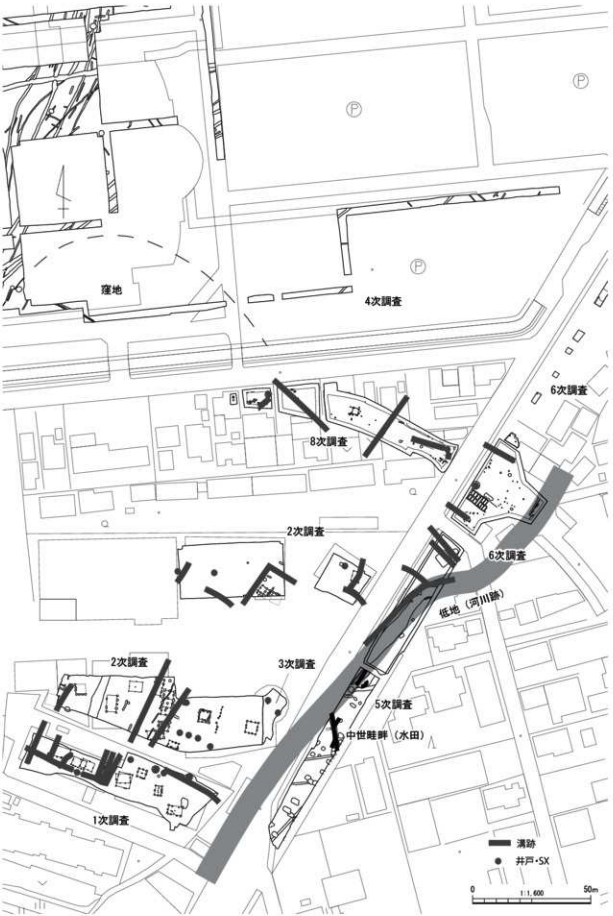



Fig.57 宮竹野際遺跡の中世以後の遺構（溝・井戸）

つの生活の場であることが窺われる。1・2・6次調査では同一区画内に掘立柱建物等の居住施設も確認しており、特に1次調査では鎌倉時代に位置づけられる建物跡を主体的に検出した。2次調査で検出した建物跡のうちいくつかも鎌倉時代のものと目される。

宮竹野際遺跡の区画施設は、過去調査でたびたび指摘されてきたように、基本的に古代条里区画には一致しない。宮竹野際遺跡では、5次調査で確認された河川跡（旧宮井戸川）左岸（南東側）の大畦畔が古代条里区画に一致するいっぽう、1・2・6次調査で検出した溝跡のように河川跡右岸（北西側）は条里区画にとらわれずに区画を設けている。地籍図に重ねてみるとそれは明瞭であり、遺跡北方の「長表」から西方の「長面」にかけて弓なりに広がる旧流路跡の低地と旧宮井戸川跡の低地間にある、狭長な「中島」を地形に基づいて区画している様子がよく分かる（Fig.58）。それとともに、遺跡の区画が地籍図の区画と一致しており、中世の区画が近代にいたるまでほぼ継続されたこと、中世以後も条里型水田としての開発が行われなかったことが読み取れる。

なお、図中央左下付近に真南北からやや西に振れた直線的な地割がみえるが、この地割と5次調査での大畦畔は間隔110m前後で並行する。地籍図の地割が5次調査大畦畔から1町西の大畦畔の名残であること、さらに、近代まで長期間にわたって地割が存続するなんらかの理由があったことが類推される。

### （3）遺跡景観の復元

宮竹野際遺跡周辺は古代末期に寄進地系荘園の蒲御厨が成立し、鎌倉時代には周辺一帯で活発な開発活動が行われた痕跡が遺跡として残されている。山の神遺跡で確認された一町四方の区画もその一端として捉えられ、多数の建物跡と併せて当時の屋敷地整備状況を窺うことができる。8次調査区の成果も同様に、当時の活発な土地開発を示すものと認められる。東方に埋没した旧宮井戸川跡低地、西方に幅広い流路跡低地を望む狭い微高地を、地形の傾斜に沿った溝（SD14・15）、直交する溝（SD03・04）で区画し、区画内部には井戸（SE02・04）を構築する。居住地周辺施設（Ⅰ区・Ⅱ区小穴群）、小区画施設（SD01・02）等の小規模施設も整備されている。これらは土層、遺物の様相から12世紀末から13世紀前半の数十年間で形成されたものである。蒲御厨は12世紀末には北条氏が地頭に任じられたが、蒲氏が現地の荘官として実質的な支配を続け、開発を主導していたものと考えられる。そのような背景のもと、8次調査で確認された遺構からは、微高地上を屋敷地として整備して水田開発を推進した様子を窺うことができる。これらの遺構を遺した居住者としては、6次調査で出土した青白磁合子に表されるような威信財をもつ、比較的上位の支配者層の存在が想定される。8次調査では、SD03・04以東での遺物出土量が多く、貿易陶磁器がSD01・SE02のみで出土していることから、調査区東半に集落内において比較的高位の居住者が存在したと考えられる。

### （4）小　結

8次調査の成果は、鎌倉時代に関わる情報が突出して多い。いっぽう、宮竹野際遺跡における他の調査地点に比べ、鎌倉時代以外の調査成果は限定的であった。ゆえに鎌倉時代の情報が良好な状態で確認でき、当時の様相を端的に表していると評価できる。出土遺物の量や内容から8次調査区とその周辺に集落において比較的上位の居住者が存在したと推定した。近現代まで踏襲される土地利用の基礎が12世紀末から13世紀前半を中心とした比較的短期間のうちに形成されたことが指摘でき、地域の形成過程を探求する上で重要な成果といえる。

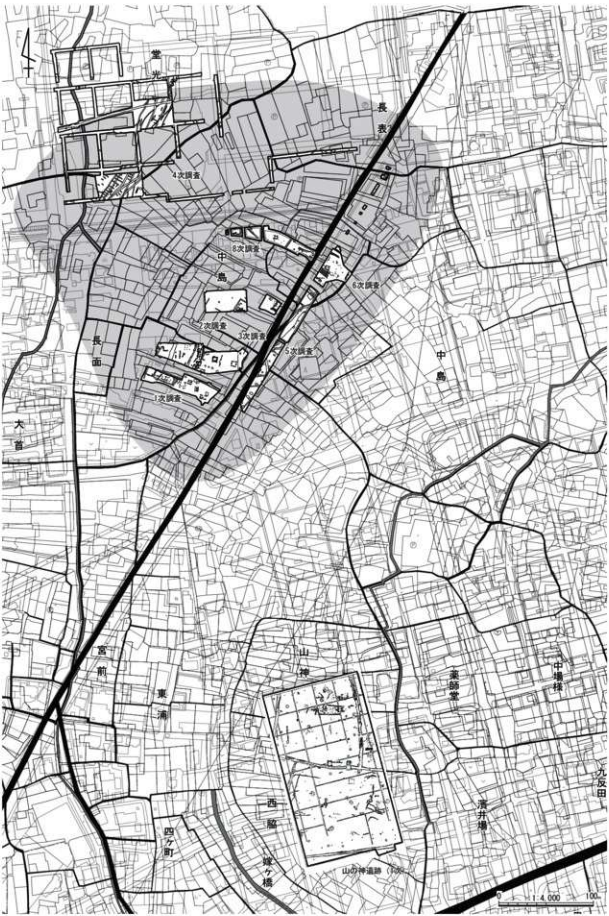



Fig.58 宮竹野際遺跡周辺の調査成果と地籍

## [参考文献]

愛知県史編さん委員会　2012『愛知県史　別編　窯業３　中世・近世　常滑系』
菊川シンポジウム実行委員会　2005『陶磁器からみる静岡県の中世社会　発表要旨・論考編』
後藤健一　2015『遠江湖西窯跡群の研究』
佐野五十三　1996「遠・駿・豆における古代の煮沸具」『鍋と甕そのデザイン』第４回東海考古学フォーラム
静岡県　1994『静岡県史』通史編１　原始・古代
静岡県教育委員会　1989『静岡県の窯業遺跡　本文編』
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所　2006『宮竹野際遺跡』
鈴木一有　2012「宮竹野際遺跡と長上都家『宮竹野際遺跡６次』(財) 浜松市文化振興財団
鈴木敏則　2013「湿美湖西窯の山茶碗編年」『湿美窯　編年の再構築』東海土器研究会
第９回東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会　2002『東海の中世集落を考える』
中世土器研究会　1997『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
東海土器研究会　2013『湿美窯　編年の再構築』
東海土器研究会　2014『灰釉陶器を考える　―編年と課題―』
中野晴久　2013『中世常滑窯の研究』
日本考古学協会 2008 年度愛知大会実行委員会　2008『日本考古学協会 2008 年度愛知大会研究発表資料集』
浜松市教育委員会　1988『宮竹野際遺跡』
浜松市教育委員会　1995『宮竹野際遺跡３』
浜松市教育委員会　2014『松東遺跡３次』
浜松市教育委員会　2015『鳥居松遺跡７』
浜松市教育委員会　2016『高塚遺跡３』
浜松市教育委員会　2017a『梶子遺跡 18 次』
浜松市教育委員会　2017b『梶子遺跡 21 次』
浜松市市民部文化財課　2015『浜松の遺跡３』
(財) 浜松市文化協会　1989『山の神遺跡』
(財) 浜松市文化協会　1994『宮竹野際遺跡２』
(財) 浜松市文化協会　1997『宮竹野際遺跡４』
(財) 浜松市文化協会　2004『大蒲村東Ⅰ・Ⅱ遺跡』
(財) 浜松市文化協会　2005『森西遺跡』
(財) 浜松市文化協会　2004『坊ヶ跡遺跡』
(財) 浜松市文化振興財団　2012『宮竹野際遺跡６次』

## [図出典]

Fig.54　鈴木敏則　2013「湿美湖西窯の山茶碗編年」『湿美窯　編年の再構築』東海土器研究会　図３を転載

# 第５章　総　括

本書で報告した調査結果は、宮竹野際遺跡の古墳時代終末期における集落の再形成期と中世に関わる情報を提供した。調査内容と後論の事象を時代ごとに要約し、総括とする。

**弥生時代**　宮竹野際遺跡は弥生時代の水田跡が展開する遺跡として知られている。今回の調査地では、下層検出面において複数条の溝跡を検出した。出土遺物はないが、検出層位から弥生時代に遡るものと捉えられる。これらの溝跡は、水田に関わるものの可能性がある。

**古墳時代**　宮竹野際遺跡における古墳時代の遺構検出例は、従来の調査成果において極めて少ないが、遺物がわずかに出土することから再形成期が古墳時代終末期に遡ることが想定されてきた。今回の調査地では、７世紀中頃を中心とした時期と捉えられる SX02 を検出した。SX02 は、竪穴建物跡の可能性が高く、宮竹野際遺跡における集落の再形成時期の様相を窺い知る上で、重要な情報を提供したといえる。今後、さらなる発掘調査による情報の蓄積を待って精度を高める必要があるが、現状での情報を総合すると、集落再形成の時期は、７世紀中頃を中心とした時期と捉えておきたい。

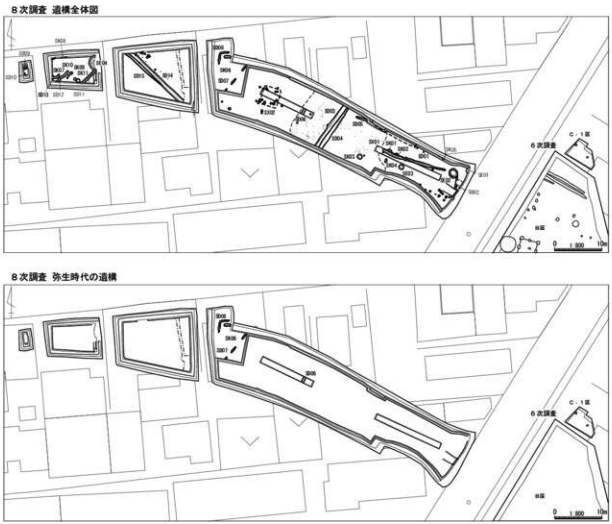



Fig.59　宮竹野際遺跡８次調査区の変遷（１）

**奈良・平安時代**　宮竹野際遺跡は、遠江国長上郡家と有機的なつながりをもつ関連施設が展開していたと想定されている。今回の調査地では、奈良・平安時代に帰属する遺構はⅠ区を中心にわずかに検出できたのみであったが、９世紀代のものと捉えられる須恵器の獣脚付壺や壺Ｇ、緑釉陶器が出土したことが特筆できる。これらの出土遺物は、官衙に関連する遺跡に出土が偏ることが知られており、８次調査地とその周辺が郡家関連施設の一部であったことを追認できる重要な成果といえる。なお、８次調査区における古代の遺構や遺物の密度は従来の調査に比べて低く、８次調査区が古代における宮竹野際遺跡の周辺部にあたると捉えてよいだろう。

**鎌倉時代**　今回の発掘調査において、鎌倉時代を中心とした時期の遺構・遺物を最も多く検出した。８次調査区内には、溝により区画された３つ以上の屋敷地があったと推定できる。区画の規模はいずれも50m（半町）四方程度と推定できる。なかでも、最も東側の区画では井戸や柱穴が多く検出できた。この区画は、遺物の出土量が突出している。また、鎌倉時代に構築された区画が近現代の地割にも踏襲されていたことが確認できる。近現代まで踏襲される地割の基本が鎌倉時代に形成されたことが推定できる重要な成果といえる。出土遺物は、平安時代末から鎌倉時代にかけてのものと捉えられる山茶碗が主体であり、青磁や白磁といった貿易陶磁器も少量含まれている。宮竹野際遺跡とその周辺に造営された集落は、蒲御厨内の拠点的な集落のひとつであった捉えることが可能であろう。

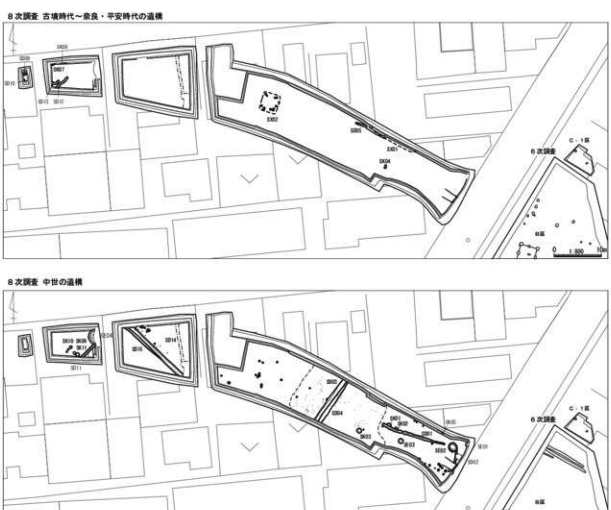



Fig.60　宮竹野際遺跡８次調査区の変遷（２）

# 出土遺物観察表

**凡例**

「残存率」 全体における残存している割合を％（10％きざみ）で示す
「反」 反転して図化したもの
大きさの単位は「cm」　重量の単位は「g」
「色調」は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠している

# 出土遺物観察表（1）

| Fig. | No. | 区 | 遺構／層位 | 種別 | 細別 | 残存 | 反転 | 器径（長） | 器高（幅） | 口径（厚） | 底径（重量） | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 38 | 1 | I | SD01 上層 | 土師器 | 皿 | 10 | 反 | | (3.0) | (14.4) | | 浅黄橙色 | 密 | 不良 | 底部ヘラケズリ |
| 38 | 2 | I | SD01 埋土 | 土師器 | 皿 | 10以下 | 反 | | (3.0) | (16.4) | | 橙色 | 密 | やや良 | |
| 38 | 3 | I | SD01 上層 | 土師器 | 甕 | 10以下 | 反 | | (1.69) | (21.6) | | 明黄褐色 | 密 | やや良 | |
| 38 | 4 | I | SD01 中層 | 土師器 | 甕 | 10以下 | | 4.6 | (2.2) | | | 明赤褐色 | 密 | やや良 | 内面煤付着 |
| 38 | 5 | I | SD01 上層 | 須恵器 | 皿 | 20 | 反 | | (2.0) | | (11.2) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部回転ヘラ切り　内外面火襷痕 |
| 38 | 6 | I | SD01 上層 | 須恵器 | 甕 | 10以下 | | 10.9 | (8.6) | | | 暗灰色 | 密 | 良 | |
| 38 | 7 | I | SD01 埋土 | 灰釉陶器 | 無台碗 | 10以下 | 反 | | (1.2) | (5.2) | | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 |
| 38 | 8 | I | SD01 埋土 | 緑釉陶器 | 碗 | 10以下 | 反 | | (1.5) | | (6.4) | オリーブ灰色 | 密 | 良 | 削り出し圏線高台 |
| 38 | 9 | I | SD01 埋土 | 土師質土器 | 鍋 | 10以下 | 反 | | (2.2) | (27.0) | | にぶい橙色 | やや粗 | やや良 | 伊勢型鍋 |
| 38 | 10 | I | SD01 上層 | 土師質土器 | 鍋 | 10以下 | 反 | | (1.3) | (24.4) | | にぶい橙色 | やや粗 | やや良 | 伊勢型鍋　内外面煤付着 |
| 38 | 11 | I | SD01 埋土 | 土師質土器 | 鍋 | 10 | 反 | | (6.2) | (22.2) | | にぶい橙色 | やや密 | やや不良 | 伊勢型鍋 |
| 38 | 12 | I | SD01 中層 | 土師質土器 | 鍋 | 20 | 反 | | (8.0) | (25.2) | | 灰白色 | やや粗 | 良 | 伊勢型鍋　外面煤付着 |
| 39 | 13 | I | SD01 中層 | 山茶碗 | 小碗 | 20 | 一部反 | | (1.6) | | 4.8 | 灰白色 | 密 | 良 | 内面自然釉 |
| 39 | 14 | I | SD01 下層 | 山茶碗 | 小碗 | 10以下 | 反 | | (2.1) | (9.8) | | 灰白色 | 密 | 良 | 内面自然釉 |
| 39 | 15 | I | SD01 中層 | 山茶碗 | 小皿 | 10 | 反 | | 2.5 | (9.0) | (4.4) | 灰白色 | 密 | 良 | 内面自然釉 |
| 39 | 16 | I | SD01 埋土 | 山茶碗 | 小皿 | 40 | 一部反 | | 2.3 | (8.6) | 4.6 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切→ナデ　内面灰釉　重ね焼き |
| 39 | 17 | I | SD01 埋土 | 山茶碗 | 小皿 | 10以下 | 反 | | 2.1 | (9.2) | | 灰白色 | 密 | 良 | 内面自然釉 |
| 39 | 18 | I | SD01 中層 | 山茶碗 | 小皿 | 10以下 | 反 | | (1.7) | | (4.6) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　内面自然釉　重ね焼き |
| 39 | 19 | I | SD01 中層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 80 | 一部反 | | 5.4 | (15.4) | 7.2 | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切　内外面自然釉　籾痕 |
| 39 | 20 | I | SD01 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 40 | 反 | | 5.9 | (16.0) | (7.0) | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部ナデ　内面自然釉　砂目 |
| 39 | 21 | I | SD01 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 50 | 一部反 | | 5.9 | (16.0) | 7.0 | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切　籾痕 |
| 39 | 22 | I | SD01 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 90 | | | 5.6 | 15.8 | 7.4 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　内面自然釉　籾痕　砂目 |
| 39 | 23 | I | SD01 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 40 | 反 | | 5.4 | (16.4) | (7.8) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ　籾痕 |
| 39 | 24 | I | SD01 上層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 反 | | 5.1 | (15.6) | (6.5) | 明褐灰色 | 密 | やや良 | 擂投痕？　内面自然釉 |
| 39 | 25 | I | SD01 上層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 90 | | | 4.9 | 16.0 | 6.9 | 灰白色 | 粗 | 良 | 底部糸切　内外面自然釉　籾痕 |
| 39 | 26 | I | SD01 中層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 50 | 反 | | 5.2 | (15.6) | (7.2) | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切　籾痕 |
| 39 | 27 | I | SD01 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (5.0) | (16.2) | | 灰白色 | 密 | 良 | 内面自然釉 |
| 39 | 28 | I | SD01 上層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (4.5) | (16.0) | | 灰白色 | 密 | 良 | |
| 39 | 29 | I | SD01 上層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | | | (5.0) | (16.6) | | 灰白色 | 密 | 良 | 内外面灰釉 |
| 39 | 30 | I | SD01 中層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (3.0) | (16.4) | | 灰白色 | 密 | 良 | 内面自然釉 |
| 39 | 31 | I | SD01 下層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (3.3) | (16.4) | | 灰白色 | やや密 | 良 | |
| 39 | 32 | I | SD01 中層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (2.8) | (16.4) | | 灰白色 | 密 | 良 | |
| 39 | 33 | I | SD01 上層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (4.1) | (17.2) | | 灰白色 | やや密 | 良 | 内面自然釉 |
| 39 | 34 | I | SD01 中層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (3.4) | (16.0) | | 灰白色 | 密 | やや良 | |
| 39 | 35 | I | SD01 上層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (2.4) | (15.4) | | 灰白色 | 密 | 良 | 内面自然釉 |
| 39 | 36 | I | SD01 上層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (3.1) | (16.8) | | 灰白色 | 密 | 良 | |
| 39 | 37 | I | SD01 上層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (2.1) | (15.6) | | 灰白色 | 密 | 良 | 内面自然釉 |
| 39 | 38 | I | SD01 中層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (3.0) | (17.6) | | 灰白色 | 密 | やや良 | 内面自然釉 |
| 39 | 39 | I | SD01 中層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (3.9) | (18.2) | | 灰白色 | 密 | 良 | 内面自然釉 |
| 39 | 40 | I | SD01 中層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (3.0) | (15.0) | | 灰白色 | 密 | 良 | 内外面自然釉 |
| 39 | 41 | I | SD01 上層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 40 | 一部反 | | (5.1) | | 7.6 | 灰白色 | やや密 | やや良 | 底部糸切　漬け掛け　籾痕 |
| 39 | 42 | I | SD01 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (3.4) | | (7.8) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　籾痕 |
| 39 | 43 | I | SD01 上層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (2.8) | | (7.4) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部手持ちヘラケズリ　内面自然釉　籾痕 |
| 40 | 44 | I | SD01 中層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (3.0) | (7.2) | | 灰白色 | 密 | 良 | 外面敲打痕？ |
| 40 | 45 | I | SD01 上層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (2.6) | | (7.0) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　砂目　重ね焼き |
| 40 | 46 | I | SD01 上層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (2.3) | | (7.4) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　籾痕 |
| 40 | 47 | I | SD01 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 一部反 | | (2.6) | | 6.9 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ　内面自然釉　籾痕 |
| 40 | 48 | I | SD01 中層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | (3.2) | | 7.1 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ |
| 40 | 49 | I | SD01 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 反 | | (3.0) | | (7.2) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部手持ちヘラケズリ？　内面自然釉　籾痕 |
| 40 | 50 | I | SD01 上層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (2.6) | | (7.6) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ　籾痕　重ね焼き |
| 40 | 51 | I | SD01 中層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (2.5) | | (7.2) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ　内面自然釉　籾痕 |
| 40 | 52 | I | SD01 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | (3.2) | | 7.0 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　籾痕　砂目 |
| 40 | 53 | I | SD01 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 反 | | (3.2) | | (7.0) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ |
| 40 | 54 | I | SD01 上層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (2.4) | | (7.6) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ナデ　内面自然釉　籾痕 |
| 40 | 55 | I | SD01 中層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | | | (2.9) | | 7.2 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　籾痕 |
| 40 | 56 | I | SD01 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | | | (2.4) | | 8.0 | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部糸切 |
| 40 | 57 | I | SD01 上層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | (1.9) | | 7.5 | 灰白色 | 密 | 良 | 砂目 |
| 40 | 58 | I | SD01 上層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (2.1) | | (8.0) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　砂目 |
| 40 | 59 | I | SD01 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (2.2) | | (7.2) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ　内面自然釉　内面・高台部籾痕　見込み墨付着　砂目 |
| 40 | 60 | I | SD01 中層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | (6.8) | (2.3) | | | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　内面自然釉 |
| 40 | 61 | I | SD01 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | | | (1.8) | | 7.6 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　砂目 |
| 40 | 62 | I | SD01 中層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (2.3) | | (8.0) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部手持ちヘラケズリ　籾痕　砂目 |
| 40 | 63 | I | SD01 上層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 反 | | (4.0) | | (7.0) | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部糸切　内面自然釉 |
| 40 | 64 | I | SD01 中層 | 中世陶器 | 壺 | 10以下 | | 11.9 | 10.6 | | | 褐灰色 | 密 | 良 | 渥美産　内面自然釉 |
| 40 | 65 | I | SD01 中層 | 中世陶器 | 甕 | 10以下 | | 13.8 | 12.8 | | | 褐灰色 | 密 | 良 | 渥美産 |
| 40 | 66 | I | SD01 中層 | 中世陶器 | 甕 | 10以下 | | | (5.8) | | | 褐灰色 | 密 | 良 | 渥美産 |
| 40 | 67 | I | SD01 中層 | 中世陶器 | 甕 | 10以下 | 反 | | (6.8) | | (9.2) | 褐灰色 | 密 | やや良 | 渥美産 |
| 40 | 68 | I | SD01 上層 | 貿易陶磁 | 白磁碗 | 10 | 反 | | (3.1) | (16.0) | | 浅黄橙色 | 密 | 良 | 内外面灰釉 |
| 40 | 69 | I | SD01 上層 | 貿易陶磁 | 青磁碗 | 10以下 | | 4.5 | 2.1 | | | 灰オリーブ色 | 密 | 良 | 外面櫛描き　内面劃花文 |
| 41 | 70 | I | SD01 下層 | 鉄製品 | 鉄鏃？不明 | | | 3.1 | 4.1 | 2.5 | 37.1 | | | | 楕円体 |
| 41 | 71 | I | SD01 上層 | 石製品 | 砥石 | | | 7.8 | 6.2 | 6.3 | 295.5 | | | | 砂岩　被熱 |
| 41 | 72 | I | SD01 中層 | 石製品 | 砥石 | | | 8.4 | 8.2 | 7.2 | 634.1 | | | | 砂岩 |
| 41 | 73 | I | SD01 上層 | 石製品 | 砥石 | | | 4.3 | 5.6 | 3.8 | 89.3 | | | | 砂岩　被熱 |
| 42 | 74 | I | SD02 埋土 | 土師器 | 甕 | 10以下 | | | (2.5) | | (5.0) | にぶい橙色 | 密 | 良 | 内面煤付着 |
| 42 | 75 | I | SD02 埋土 | 山茶碗 | 小碗 | 40 | 一部反 | | (2.8) | (9.0) | 3.7 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ　内面自然釉　重ね焼き |
| 42 | 76 | I | SD02 埋土 | 山茶碗 | 小皿 | 10以下 | 反 | | (2.0) | (10.0) | | 灰白色 | 密 | 良 | 内面灰釉 |
| 42 | 77 | I | SD02 埋土 | 山茶碗 | 小皿 | 30 | | | 2.0 | (9.4) | (4.6) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部手持ちヘラケズリ　内面自然釉　輪花 |
| 42 | 78 | I | SD02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (2.7) | (17.0) | | 灰白色 | 密 | 良 | 内外面灰釉　輪花 |
| 42 | 79 | I | SD03 埋土 | 灰釉陶器 | 獣足付壺 | 10 | | 12.2 | 5.2 | | | 灰白色 | やや密 | やや良 | |
| 42 | 80 | I | SD03 埋土 | 土師器 | 甕 | 10以下 | | 4.5 | (3.1) | | | にぶい橙色 | 密 | やや良 | |
| 42 | 81 | I | SD03 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (4.1) | (15.8) | | 灰白色 | 密 | 良 | |
| 42 | 82 | I | SD03 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (4.2) | (16.8) | | 灰白色 | 密 | 良 | |
| 42 | 83 | I | SD03 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (2.3) | | (8.0) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　内面自然釉 |

| Fig. | No. | 区 | 遺構／層位 | 種別 | 細別 | 残存 | 反転 | 最大長（長） | 最大径（幅） | 口径（厚） | 底径（重量） | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 42 | 84 | 1 | SD03 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | | (2.9) | | | | 灰白色 | やや密 | 良 | 砂目 |
| 42 | 85 | 1 | SD03 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | (1.4) | | | (7.2) | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部糸切 輪痕 |
| 42 | 86 | 1 | SD03 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | (2.4) | | | (7.8) | 灰白色 | やや密 | やや良 | 底部糸切 |
| 42 | 87 | 1 | SD03 埋土 | 石製品 | 硯石 | | | 3.8 | 8.7 | 3.4 | 144.8 | | | | 砂岩 |
| 42 | 88 | 1 | SD04 埋土 | かわらけ | 小皿 | 完形品 | | | 1.8 | 8.4 | 4.2 | にぶい橙色 | 密 | 不良 | 底部糸切 |
| 42 | 89 | 1 | SD04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 以下 | 反 | | (3.4) | (16.4) | | 灰白色 | 密 | 良 | 内面底部格 |
| 42 | 90 | 1 | SD04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (3.7) | (15.0) | | 灰白色 | 密 | 良 | 内面底部格 |
| 42 | 91 | 1 | SD04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 反 | | (4.8) | | (8.0) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切→ナデ 内面自然釉 輪痕 二次被熱 |
| 42 | 92 | 1 | SD04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | (3.0) | | 7.2 | 明褐灰色 | やや密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 砂目 |
| 42 | 93 | 1 | SD04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (2.8) | | 7.3 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ 外面灰釉 輪痕 重ね焼き |
| 42 | 94 | 1 | SD04 埋土 | 中世陶器 | 壺 | 10 | 反 | | (5.5) | | (13.6) | 灰色 | やや密 | 良 | 灰釉 内面自然釉 |
| 42 | 95 | 1 | SD04 埋土 | 土製品 | 土錘 | 完形品 | | 0.8 | 2.65 | 0.3 | 1.8 | 灰白色 | やや密 | やや不良 | |
| 43 | 96 | 1 | SE02 埋土 | 須恵器 | 壺 | 20 | 反 | | (6.6) | | (13.0) | 灰色 | やや密 | 良 | 底部ナデ 内面灰釉 |
| 43 | 97 | 1 | SE02 埋土 | 須恵器 | 壺 | 10 以下 | 反 | | (2.6) | (31.8) | | 灰オリーブ褐色 | 密 | 良 | 内外面灰釉 |
| 43 | 98 | 1 | SE02 埋土 | 須恵器 | 壺 | 10 以下 | 反 | 5.0 | 5.2 | | | 灰オリーブ色 | 密 | 良 | 外面自然釉 |
| 43 | 99 | 1 | SE02 埋土 | かわらけ | 小皿 | 10 以下 | 反 | | 2.1 | (7.0) | (5.4) | 黒褐色 | やや密 | やや良 | |
| 43 | 100 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 小椀 | 30 | 一部反 | | (1.6) | | 4.7 | 灰白色 | 密 | 良 | 湖西産か？ 底部糸切 |
| 43 | 101 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 小椀 | 40 | 一部反 | | (1.9) | | 4.2 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部回転ヘラ切り 内面自然釉 |
| 43 | 102 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 小皿 | 50 | 反 | | 2.3 | (8.8) | (3.6) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ヘラ切り 内面自然釉 |
| 43 | 103 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 小皿 | 60 | | | 2.7 | (9.0) | 4.0 | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部糸切 内外面自然釉 |
| 43 | 104 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 小皿 | 80 | 一部反 | | 2.1 | (8.9) | 4.5 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ヘラ切り→ナデ 漬け掛け |
| 43 | 105 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 小皿 | 50 | 一部反 | | 1.9 | (8.6) | 4.0 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内外面自然釉 |
| 43 | 106 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 小皿 | 40 | 反 | | (1.6) | (8.2) | (4.2) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 |
| 43 | 107 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 小皿 | 10 以下 | 反 | | (1.7) | (9.6) | | 灰白色 | 密 | 良 | |
| 43 | 108 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 40 | 反 | | 6.0 | (17.0) | (8.0) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ 輪花 漬け掛け |
| 43 | 109 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 以下 | 反 | | (3.2) | (16.2) | | 灰白色 | 密 | 良 | 漬け掛け 輪花 |
| 43 | 110 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | 5.6 | (17.4) | 8.5 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 漬け掛け |
| 43 | 111 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 80 | | | 5.7 | 16.3 | 7.9 | 黄灰色 | やや密 | やや良 | 底部糸切 内外面自然釉 輪痕 外面煤付着 |
| 43 | 112 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 40 | 一部反 | | 5.2 | (17.2) | 7.6 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 |
| 43 | 113 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 40 | 反 | | 5.8 | (16.0) | (7.6) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切→手持ちヘラケズリ 内外面自然釉 砂目 重ね焼き |
| 43 | 114 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 50 | 一部反 | | 5.5 | (16.2) | 7.0 | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 砂目 重ね焼き |
| 43 | 115 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 50 | 一部反 | | 5.4 | (16.4) | 7.6 | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切 砂目 |
| 43 | 116 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 40 | 反 | | 4.4 | (15.6) | (7.4) | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部糸切→ナデ 内面自然釉 輪痕 |
| 43 | 117 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 40 | 反 | | 4.8 | (15.6) | (7.0) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内外面自然釉 輪痕 |
| 43 | 118 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 90 | | | 5.6 | 16.2 | 7.0 | 明褐灰色 | やや粗 | 良 | 底部糸切 内外面自然釉 輪痕 |
| 43 | 119 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 60 | 一部反 | | 5.1 | (15.6) | 7.6 | 灰白色 | やや密 | 良 | 内面自然釉 輪痕 砂目 |
| 43 | 120 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 40 | 一部反 | | 5.7 | (16.9) | 7.5 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 |
| 43 | 121 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 40 | 反 | | 5.9 | (16.6) | (8.2) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 輪痕 |
| 43 | 122 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 80 | | | 5.6 | 16.3 | 8.2 | 灰白色 | やや密 | やや良 | |
| 43 | 123 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 以下 | 反 | | (2.3) | (14.4) | | 灰色 | 密 | やや良 | 漬け掛け |
| 43 | 124 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 以下 | 反 | | (4.2) | (15.4) | | 灰白色 | 密 | 良 | 内面自然釉 |
| 43 | 125 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (4.6) | (15.8) | | 灰白色 | 密 | 良 | |
| 43 | 126 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 以下 | 反 | | (2.4) | (16.2) | | 灰白色 | 密 | 良 | 漬け掛け？ |
| 43 | 127 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 以下 | 反 | | (3.3) | (16.0) | | 灰白色 | やや密 | 良 | 内面自然釉 |
| 43 | 128 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 以下 | 反 | | 3.5 | (16.2) | | 灰白色 | やや密 | 良 | |
| 44 | 129 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 40 | 反 | | (4.0) | | (7.6) | 灰色 | やや密 | 良 | 底部糸切 内外面自然釉 輪痕 重ね焼き |
| 44 | 130 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 40 | 一部反 | | (3.4) | | 7.0 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ 輪痕 内面煤付着 |
| 44 | 131 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (4.4) | | (8.2) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ 内外面灰釉 砂目 重ね焼き |
| 44 | 132 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 以下 | 反 | | (2.2) | | (8.4) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ 内面自然釉 重ね焼き |
| 44 | 133 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 50 | 一部反 | | (5.6) | | 7.6 | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切 漬け掛け 砂目 重ね焼き |
| 44 | 134 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 反 | | (5.0) | | (8.6) | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部糸切 砂目 |
| 44 | 135 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (3.5) | | (9.2) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ 輪痕 重ね焼き |
| 44 | 136 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | (4.4) | | 8.2 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 |
| 44 | 137 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (2.5) | | (9.2) | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 |
| 44 | 138 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (2.8) | | (7.6) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 砂目 重ね焼き |
| 44 | 139 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (3.0) | | (7.6) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 輪痕 |
| 44 | 140 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 以下 | 反 | | (2.3) | | (8.4) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ 内面自然釉 |
| 44 | 141 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 40 | 一部反 | | (3.3) | | 7.8 | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 輪痕 |
| 44 | 142 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 以下 | 反 | | (2.8) | | 8.0 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ 内面自然釉 重ね焼き |
| 44 | 143 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 以下 | 反 | | (2.2) | | (7.6) | 灰白色 | やや密 | 良 | 外面灰釉 輪痕 |
| 44 | 144 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 一部反 | | (2.2) | | 7.2 | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部ロクロナデ 内外面自然釉 輪痕 |
| 44 | 145 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 以下 | 反 | | (2.8) | | (7.4) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ 重ね焼き |
| 44 | 146 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 一部反 | | (3.0) | | (7.6) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 輪痕 |
| 44 | 147 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | (3.5) | | 7.4 | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切 内面灰釉 輪痕 |
| 44 | 148 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | 2.9 | | 7.9 | 灰白色 | 密 | 良 | 輪痕 |
| 44 | 149 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | (3.0) | | 7.0 | 灰色 | やや密 | やや良 | 底部糸切 砂目 |
| 44 | 150 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | (3.1) | | 6.6 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ナデ 内面自然釉 輪痕 内外面煤付着 |
| 44 | 151 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (2.7) | | 9.4 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 重ね焼き |
| 44 | 152 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 反 | | (2.6) | | 7.3 | 灰白色 | やや密 | やや良 | 底部糸切 輪痕 |
| 44 | 153 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 反 | | (3.4) | | 7.8 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 |
| 44 | 154 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 反 | | (3.3) | | 7.6 | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切→ロクロナデ 内面自然釉 砂目 |
| 44 | 155 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (2.7) | | (8.6) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ 内面自然釉 |
| 44 | 156 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 反 | | (2.9) | | 7.5 | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 |
| 44 | 157 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 40 | 一部反 | | (3.5) | | 7.2 | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 輪痕 砂目 |
| 44 | 158 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (2.8) | | (7.7) | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 輪痕 |
| 44 | 159 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 以下 | 一部反 | | (2.3) | | (8.0) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 輪痕 |
| 44 | 160 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | (3.2) | | 7.8 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 輪痕 |
| 44 | 161 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | (3.3) | | 7.5 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 重ね焼き |
| 44 | 162 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | (3.0) | | 7.5 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ 輪痕 |
| 44 | 163 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | (2.3) | | 7.7 | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部糸切 |
| 44 | 164 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 一部反 | | (2.6) | | 7.7 | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部糸切 輪痕 外面煤付着 |
| 44 | 165 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 一部反 | | (2.2) | | 8.4 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切→ヘラ調整 内面自然釉 |
| 44 | 166 | 1 | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 一部反 | | (1.9) | | 7.7 | 暗灰色 | 密 | 良 | 底部糸切 |

## 出土遺物観察表（3）

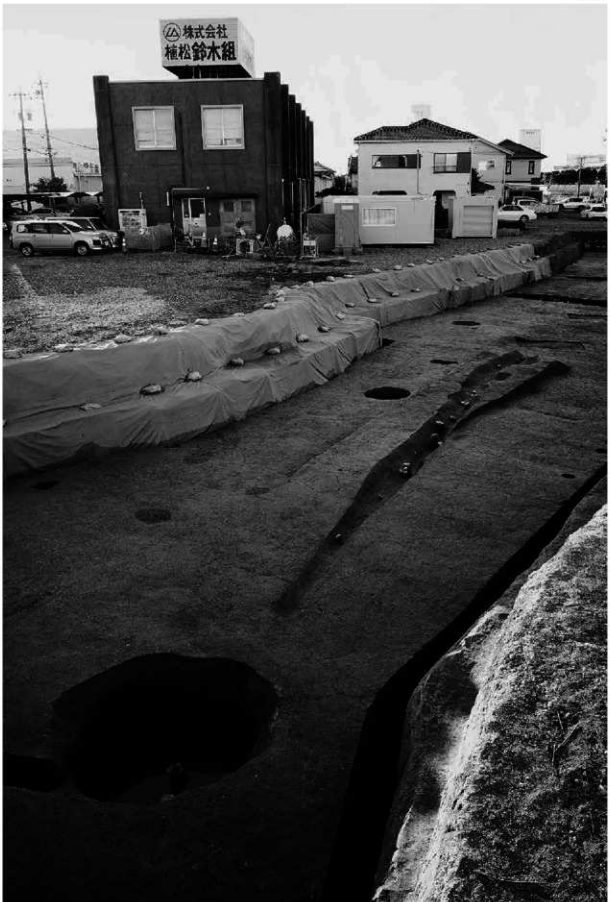
| Fig. | No. | 区 | 遺構／層位 | 種別 | 細別 | 残存 | 反転 | 器径（長） | 器高（幅） | 口径（厚） | 底径（重量） | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 44 | 167 | I | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 一部反 | | (2.3) | | (7.2) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ 籾痕 |
| 44 | 168 | I | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (2.0) | | (7.6) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部手持ちヘラケズリ 籾痕 |
| 45 | 169 | I | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | (2.6) | | 7.6 | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部糸切→ヘラ調整 内面自然釉 籾痕 |
| 45 | 170 | I | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 一部反 | | (2.6) | | 8.0 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 籾痕 外面煤付着 |
| 45 | 171 | I | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 一部反 | | (2.1) | | 7.4 | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 |
| 45 | 172 | I | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 一部反 | | (1.6) | | 6.7 | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部糸切 |
| 45 | 173 | I | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 一部反 | | (1.9) | | 8.2 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 籾痕 |
| 45 | 174 | I | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (1.8) | | (7.6) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ 籾痕 |
| 45 | 175 | I | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (3.4) | | (7.8) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 |
| 45 | 176 | I | SE02 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (2.9) | | 8.0 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 籾痕 |
| 46 | 177 | I | SE02 埋土 | 中世陶器 | 広口壺 | 30 | 反 | | (19.2) | (20.6) | | 灰オリーブ色 | やや密 | 良 | 渥美産 内外面自然釉 |
| 46 | 178 | I | SE02 埋土 | 中世陶器 | 片口鉢 | 20 | 一部反 | | (8.7) | | 16.1 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ナデ 内外面自然釉 重ね焼き 底面ヘラ記号「コ」 |
| 46 | 179 | I | SE02 埋土 | 中世陶器 | 片口鉢 | 20 | 反 | | (4.6) | | (11.4) | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部手持ちヘラケズリ |
| 46 | 180 | I | SE02 埋土 | 中世陶器 | 片口鉢 | 20 | 反 | | (4.1) | | (14.6) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部回転ヘラ切り 内面自然釉？ |
| 46 | 181 | I | SE02 埋土 | 中世陶器 | 甕 | 20 | 反 | (47.9) | (24.2) | | | 灰オリーブ色 | 密 | 良 | 内外面自然釉 |
| 46 | 182 | I | SE02 埋土 | 中世陶器 | 甕 | 10以下 | | (58.2) | (8.2) | | | 灰色 | 密 | 良 | 渥美産 外面自然釉 |
| 46 | 183 | I | SE02 埋土 | 貿易陶器 | 青磁碗 | 20 | 反 | | (3.6) | | (5.6) | 暗オリーブ色 | 密 | 良 | 龍泉窯 内外面緑釉 印花 |
| 47 | 184 | I | SE03 埋土 | 灰釉陶器 | 碗 | 10以下 | 反 | | (2.3) | (15.4) | | 灰白色 | 密 | 良 | 内外面灰釉 |
| 47 | 185 | I | SK01 埋土 | 土師器 | 甕 | 10以下 | | | (2.1) | (20.4) | | 灰白色 | 密 | やや良 | |
| 47 | 186 | I | SK01 埋土 | 土師器 | 甕 | 10以下 | | 3.0 | (2.1) | | | にぶい褐色 | 密 | やや不良 | 伊勢型甕 外面煤付着 |
| 47 | 187 | I | SK03 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (1.6) | | (8.6) | 灰黄色 | 密 | 良 | 底部糸切 |
| 47 | 188 | I | SK04 埋土 | 土師器 | 台付鉢？ | 20 | | | (2.8) | | 9.7 | 橙色 | やや密 | やや良 | 赤彩 |
| 47 | 189 | I | SK04 埋土 | 石製品 | 砥石 | | | 5.1 | 6.2 | 2.9 | 129.8 | | | | 流紋岩 |
| 47 | 190 | I | SK04 埋土 | 石製品 | 編物石 | | | 5.2 | 13.2 | 4.9 | 463.8 | | | | 砂岩 |
| 47 | 191 | I | SK04 埋土 | 石製品 | 編物石 | | | 5.5 | 10.4 | 3.8 | 330.7 | | | | 砂岩 |
| 47 | 192 | I | SK04 埋土 | 石製品 | 編物石 | | | 3.7 | 12.6 | 2.9 | 236.7 | | | | 砂岩 片状（薄くはがれる性質あり） |
| 47 | 193 | I | SP04 埋土 | 山茶碗 | 小碗 | 10以下 | 反 | | (1.6) | | (5.2) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ 内面自然釉 重ね焼き |
| 47 | 194 | I | SP05 埋土 | 山茶碗 | 小皿 | 30 | 反 | | (1.3) | (7.4) | (5.0) | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切 |
| 47 | 195 | I | SP05 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (4.3) | (16.0) | | 灰白色 | 密 | やや良 | 漬け掛け |
| 47 | 196 | I | SP07 埋土 | 灰釉陶器 | 碗 | 20 | 反 | | (1.5) | | (6.1) | 灰白色 | 密 | やや良 | 黒笹90号窯 底部糸切 |
| 47 | 197 | I | SP07 埋土 | かわらけ | 小皿 | 10以下 | 反 | | (1.4) | (9.0) | (7.6) | 黄橙色 | やや密 | やや良 | |
| 47 | 198 | I | SP07 埋土 | 剥片石器 | 加工剥片 | | | 1.9 | 3.2 | 1.6 | 8.2 | | | | チャート |
| 47 | 199 | I | SP15 埋土 | 土師器 | 坏 | 10以下 | 反 | | (3.1) | (14.2) | | 明黄褐色 | 密 | 良 | |
| 47 | 200 | I | SP15 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (2.0) | | (8.6) | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部ロクロナデ |
| 47 | 201 | I | SP15 埋土 | 銭貨 | 宋銭 | 完形品 | | 2.5 | 2.5 | 0.15 | 2.92 | | | | 景祐元寳（北宋1034年） |
| 47 | 202 | I | SP18 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (2.2) | | (7.0) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ 内面自然釉 籾痕 |
| 48 | 203 | I | SX02 埋土 | 土師器 | 甕 | 30 | 反 | | (13.9) | (17.0) | | 明黄褐色 | やや密 | 良 | |
| 48 | 204 | I | SX02 埋土 | 土師器 | 甕 | 30 | 一部反 | | (10.8) | 17.8 | | 黄橙色 | やや密 | 良 | |
| 48 | 205 | I | SX02 埋土 | 須恵器 | 蓋 | 90 | | | 4.5 | 11.2 | | 灰白色 | 密 | 良 | 天井回転ヘラケズリ 外面自然釉 |
| 48 | 206 | I | SX02 埋土 | 石製品 | 磨石・敲石 | | | 5.5 | 13.1 | 3.6 | 305.8 | | | | 砂岩 |
| 49 | 207 | I | 表土 | 土師器 | 高坏 | 10以下 | 反 | | (2.7) | (15.6) | | 橙色 | やや密 | 良 | 内外面赤彩 |
| 49 | 208 | I | 検出面 | 土師器 | 皿 | 20 | 反 | | 2.5 | (19.0) | | 浅黄橙色 | やや密 | 良 | 赤彩 |
| 49 | 209 | I | 表土 | 土師器 | 脚付皿 | 10以下 | 反 | | 2.7 | (12.8) | (10.0) | 橙色 | やや密 | 不良 | 内外面赤彩 |
| 49 | 210 | I | 表土 | 土師器 | 甕 | 10以下 | 反 | | (5.4) | (17.8) | | 橙色 | やや密 | 良 | |
| 49 | 211 | I | 東端部 | 土師器 | 甕 | 10以下 | 反 | | (1.7) | (18.8) | | 浅黄橙色 | 密 | 不良 | 内面赤彩か？ |
| 49 | 212 | I | 検出面 | 土師器 | 甕 | 10以下 | 反 | | (2.9) | (20.2) | | 灰白色 | やや密 | 良 | |
| 49 | 213 | I | 表土 | 土師器 | 甕 | 10以下 | 反 | | (3.0) | (26.0) | | 明黄褐色 | 密 | 良 | |
| 49 | 214 | I | 表土 | 土師器 | 甕 | 10以下 | 反 | | (3.8) | | (7.6) | 明黄褐色 | やや密 | 良 | |
| 49 | 215 | I | 基本層位3層 | 須恵器 | 摘蓋 | 10 | | (7.0) | (2.0) | | | 暗青灰色 | 密 | 良 | 天井回転ヘラケズリ 内面自然釉 |
| 49 | 216 | I | 基本層位3層 | 須恵器 | 皿 | 60 | | | 2.5 | 15.2 | | 灰色 | 密 | 良 | 底部回転ヘラケズリ |
| 49 | 217 | I | 検出面 | 須恵器 | 高坏 | 10以下 | 反 | | (5.0) | (14.8) | (11.0) | 灰色 | 密 | 良 | |
| 49 | 218 | I | 表土 | 灰釉陶器 | 碗 | 10以下 | 反 | | (2.6) | (16.6) | | 灰白色 | 密 | 良 | 内面自然釉 |
| 49 | 219 | I | 検出面 | 灰釉陶器 | 碗 | 10 | 反 | | (1.6) | | (6.6) | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部回転ヘラケズリ |
| 49 | 220 | I | 表土 | 灰釉陶器 | 碗 | 10以下 | 反 | | (1.8) | | (8.2) | 灰白色 | 密 | やや良 | |
| 49 | 221 | I | 表土 | 山茶碗 | 小碗 | 40 | 反 | | 3.1 | (9.1) | (4.2) | 灰白色 | 密 | 良 | 内面自然釉 |
| 49 | 222 | I | 表土 | 山茶碗 | 小碗 | 20 | 反 | | (1.3) | | (4.0) | 灰白色 | 密 | 良 | 籾痕 |
| 49 | 223 | I | 表土 | 山茶碗 | 小碗 | 10 | 反 | | (1.2) | | 4.5 | 灰白色 | 密 | 良 | 内面自然釉 |
| 49 | 224 | I | J15 | 山茶碗 | 小皿 | 50 | 一部反 | | 1.8 | (8.2) | 4.4 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 |
| 49 | 225 | I | 検出面 | 山茶碗 | 小皿 | 20 | 反 | | 1.5 | (9.0) | (4.6) | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部糸切→ナデ 内外面自然釉 |
| 49 | 226 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 60 | 一部反 | | 5.7 | (16.6) | 8.3 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 漬け掛け 輪花 籾痕 重ね焼き |
| 49 | 227 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | 6.3 | (16.0) | (8.2) | 灰白色 | 密 | 良 | 漬け掛け 輪花か |
| 49 | 228 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 60 | 一部反 | | 5.1 | (15.5) | 6.6 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 外面灰釉 内面自然釉 籾痕 重ね焼き 輪花 |
| 49 | 229 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (2.6) | (16.6) | | 灰白色 | 密 | 良 | 漬け掛け |
| 49 | 230 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 70 | 一部反 | | 5.3 | (17.4) | 9.5 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 籾痕 |
| 49 | 231 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 反 | | (5.5) | (17.0) | | 灰白色 | 密 | 良 | |
| 49 | 232 | I | J15 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | 5.8 | (16.6) | (8.4) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ 内外面自然釉 籾痕 |
| 49 | 233 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (4.2) | (15.0) | | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部糸切 |
| 49 | 234 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (3.8) | (16.4) | | 灰白色 | 密 | 良 | |
| 49 | 235 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (3.7) | (16.2) | | 灰白色 | 密 | 良 | 内外面自然釉 |
| 49 | 236 | I | I14 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (2.4) | (16.0) | | 灰白色 | 密 | 良 | |
| 49 | 237 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 40 | 一部反 | | (4.0) | | 9.4 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 漬け掛け |
| 49 | 238 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 反 | | (4.0) | | (8.2) | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切 漬け掛け 砂目？ |
| 49 | 239 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 40 | 一部反 | | (3.4) | | 7.4 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内外面灰釉 砂目 |
| 49 | 240 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 40 | 反 | | (4.4) | | (8.8) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 外面灰釉 内面自然釉 |
| 50 | 241 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | (3.4) | | 8.2 | 灰白色 | やや密 | やや良 | 底部糸切 内外面灰釉 重ね焼き |
| 50 | 242 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 反 | | (3.6) | | (7.4) | 灰白色 | やや密 | やや良 | 底部糸切 内外面灰釉 重ね焼き |
| 50 | 243 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (3.3) | | (8.2) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内外面灰釉 砂目 重ね焼き |
| 50 | 244 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 反 | | (2.2) | | 8.2 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内外面灰釉 |
| 50 | 245 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (2.3) | | (7.4) | 灰白色 | 密 | 良 | 外面灰釉 |
| 50 | 246 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (3.2) | | (8.0) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 内外面自然釉 籾痕 |
| 50 | 247 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 一部反 | | (2.9) | | 7.9 | 灰白色 | やや密 | 良 | 内外面自然釉？ |
| 50 | 248 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (2.8) | | (8.6) | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切 内面自然釉 籾痕 |
| 50 | 249 | I | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | 3.2 | | 8.0 | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部糸切 内外面自然釉 砂目 重ね焼き |

# 出土遺物観察表（4）

| Fig. | No. | 区 | 遺構／層位 | 種別 | 細別 | 残存 | 反転 | 器径（長） | 器高（幅） | 口径（厚） | 底径（重量） | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 50 | 250 | Ⅰ | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (2.2) | | 8.2 | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部糸切　内外面自然釉　重ね焼き |
| 50 | 251 | Ⅰ | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 一部反 | | (2.0) | | 7.5 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　内面自然釉 |
| 50 | 252 | Ⅰ | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (2.2) | | (8.0) | 灰白色 | 密 | 良 | |
| 50 | 253 | Ⅰ | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (2.2) | | (8.2) | 灰白色 | 密 | 良 | |
| 50 | 254 | Ⅰ | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 一部反 | | (1.9) | | 7.0 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　籾痕 |
| 50 | 255 | Ⅰ | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (2.4) | | (7.1) | 灰白色 | 密 | 良 | 内外面自然釉　籾痕 |
| 50 | 256 | Ⅰ | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 一部反 | | (2.0) | | (8.0) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　砥石に転用? |
| 50 | 257 | Ⅰ | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 60 | 一部反 | | 5.5 | (16.0) | 7.7 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　内面自然釉　籾痕 |
| 50 | 258 | Ⅰ | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (3.0) | | (6.0) | 灰白色 | 密 | 良 | 内面自然釉　籾痕 |
| 50 | 259 | Ⅰ | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (2.0) | | (7.5) | 灰白色 | 密 | 良 | 籾痕 |
| 50 | 260 | Ⅰ | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | (2.4) | | 7.0 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　内面自然釉　籾痕 |
| 50 | 261 | Ⅰ | 表土 | 中世陶器 | 壺 | 20 | 反 | (9.0) | (8.8) | | | 灰白色 | 密 | 良 | 内外面自然釉 |
| 50 | 262 | Ⅰ | 基本層位３層 | 中世陶器 | 甕 | 10以下 | | 6.8 | (8.0) | | | 褐灰色 | 密 | 良 | 外面自然釉 |
| 50 | 263 | Ⅰ | 表土 | 石製品 | 砥石 | | | 2.5 | 3.7 | 1.2 | 11.6 | | | | 流紋岩 |
| 51 | 264 | Ⅱb | SD11 埋土 | 須恵器 | 壺G | 10以下 | 反 | | (1.9) | | (8.0) | 灰色 | やや密 | 良 | 湖西助宗　底部糸切 |
| 51 | 265 | Ⅱb | SD11 埋土 | 山茶碗 | 小碗 | 完形品 | | | 3.4 | 9.5 | 5.3 | 灰白色 | やや密 | やや良 | 底部ロクロナデ　内面自然釉　砂目 |
| 51 | 266 | Ⅱb | SD11 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (3.6) | | (7.6) | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部糸切　内面自然釉? |
| 51 | 267 | Ⅱc | SD14 埋土 | 土師質土器 | 甕 | 10以下 | 反 | | (2.4) | (29.4) | | 橙色 | やや粗 | 良 | 伊勢型甕 |
| 51 | 268 | Ⅱc | SD14 埋土 | 山茶碗 | 小皿 | 20 | 反 | | (2.3) | (8.2) | | 灰白色 | 密 | 良 | |
| 51 | 269 | Ⅱc | SD14 埋土 | 山茶碗 | 小皿 | 90 | | | 1.8 | 8.8 | | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切　漬け掛け　輪花 |
| 51 | 270 | Ⅱc | SD14 埋土 | 山茶碗 | 小皿 | 40 | 反 | | 1.7 | (8.2) | (4.2) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　墨書? |
| 51 | 271 | Ⅱc | SD14 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (2.8) | (16.4) | | 灰白色 | やや粗 | 良 | 内外面自然釉 |
| 51 | 272 | Ⅱc | SD14 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (3.1) | (16.4) | | 灰白色 | 密 | 良 | 内面自然釉 |
| 51 | 273 | Ⅱc | SD14 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (3.9) | (15.8) | | 灰白色 | やや密 | 良 | 内面自然釉 |
| 51 | 274 | Ⅱc | SD14 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (3.8) | | (8.2) | 灰白色 | やや密 | やや良 | 底部ロクロナデ　内面自然釉　砂目 |
| 51 | 275 | Ⅱc | SD14 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (2.3) | | (8.6) | 灰白色 | やや密 | やや不良 | 底部糸切　外面煤付着 |
| 51 | 276 | Ⅱc | SD14 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (2.4) | | (7.5) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ　籾痕 |
| 51 | 277 | Ⅱc | SD14 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (2.5) | | (8.4) | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部ロクロナデ |
| 51 | 278 | Ⅱc | SD14 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (2.1) | | (7.0) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 |
| 51 | 279 | Ⅱc | SD14 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (2.4) | | (7.2) | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部糸切　籾痕 |
| 51 | 280 | Ⅱc | SD14 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (2.5) | | (7.0) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　内面自然釉 |
| 51 | 281 | Ⅱc | SD14 埋土 | 中世陶器 | 鉢 | 10以下 | 反 | | (5.9) | (19.2) | | 褐灰色 | 密 | やや良 | |
| 51 | 282 | Ⅱc | SD14 埋土 | 石製品 | 磨石類 | | | 5.6 | 5.5 | 5.8 | 176.7 | | | | 砂岩　被熱 |
| 51 | 283 | Ⅱc | SD15 埋土 | 土師器 | 甕 | 10以下 | 反 | | (2.7) | (20.3) | | 褐色 | やや密 | やや不良 | 清郷型甕 |
| 51 | 284 | Ⅱc | SD15 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (3.4) | (9.4) | | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ　内外面自然釉　重ね焼き |
| 52 | 285 | Ⅱb | SE04 埋土 | 灰釉陶器 | 碗 | 10以下 | 反 | | (3.0) | (15.0) | | 灰黄色 | 密 | 良 | |
| 52 | 286 | Ⅱb | SE04 埋土 | 灰釉陶器 | 碗 | 10以下 | 反 | (10.4) | (2.7) | | | 灰白色 | 密 | 良 | 内面灰釉 |
| 52 | 287 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 小皿 | 10以下 | 反 | | (1.5) | (8.5) | | 灰白色 | やや粗 | 良 | 内外面自然釉 |
| 52 | 288 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 反 | | (4.0) | (16.2) | | 灰白色 | 密 | 良 | 漬け掛け |
| 52 | 289 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (3.3) | (15.8) | | 灰白色 | 密 | 良 | |
| 52 | 290 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (3.2) | (14.8) | | 灰白色 | 密 | やや良 | 内面自然釉 |
| 52 | 291 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (2.6) | (16.4) | | 灰白色 | やや密 | 良 | 内外面自然釉 |
| 52 | 292 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (2.9) | 14.4 | | 灰白色 | やや密 | 良 | 内外面灰釉 |
| 52 | 293 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (2.8) | (16.0) | | 灰白色 | 密 | 良 | |
| 52 | 294 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (3.1) | | (9.6) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　内面自然釉　砂目　重ね焼き |
| 52 | 295 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (2.4) | | 6.8 | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切　内外面自然釉 |
| 52 | 296 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (2.6) | | (7.6) | 灰色 | やや密 | やや良 | 底部糸切　籾痕 |
| 52 | 297 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (1.8) | | (6.4) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ　内面自然釉 |
| 53 | 298 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 一部反 | (7.1) | (2.0) | | | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　内面自然釉 |
| 53 | 299 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | (2.3) | | 8.1 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　砂目 |
| 53 | 300 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10以下 | 反 | | (1.7) | | (6.8) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ |
| 53 | 301 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (2.2) | | 7.4 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部ロクロナデ　籾痕 |
| 53 | 302 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (4.0) | | (6.6) | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部ロクロナデ　籾痕? |
| 53 | 303 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 反 | | (3.0) | | (6.8) | 明褐灰色 | やや粗 | 良 | 底部糸切　内面自然釉 |
| 53 | 304 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | | | (3.0) | | 7.4 | 明褐灰色 | やや密 | 良 | 底部ロクロナデ |
| 53 | 305 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (2.1) | | (8.0) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 |
| 53 | 306 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | | | 2.0 | | 7.4 | 灰白色 | やや粗 | 良 | 底部ロクロナデ |
| 53 | 307 | Ⅱb | SE04 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (1.8) | | (7.6) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 |
| 53 | 308 | Ⅱb | SE04 埋土 | 中世陶器 | 甕 | 10以下 | 反 | | (7.5) | (32.3) | | 灰白色 | やや密 | 良 | 内外面自然釉 |
| 53 | 309 | Ⅱb | SE04 埋土 | 中世陶器 | 甕 | 10以下 | | 8.2 | 9.3 | | | 明褐色 | 密 | 良 | 外面自然釉 |
| 53 | 310 | Ⅱb | SE04 埋土 | 陶器 | 鉢か | 10 | 反 | | (1.9) | | (10.2) | 黄橙色 | やや密 | やや良 | 古瀬戸 |
| 53 | 311 | Ⅱb | SE04 埋土 | 木製品 | 板材 | | | 1.1 | 14.1 | 0.35 | | | | | 木取り（板目） |
| 53 | 312 | Ⅱb | SE04 埋土 | 木製品 | 板材 | | | 1.3 | 27.8 | 0.3 | | | | | 木取り（板目） |
| 53 | 313 | Ⅱb | SE04 埋土 | 木製品 | 札か | 70 | | 4.9 | 7.6 | 0.4 | | | | | 木取り（板目） |
| 53 | 314 | Ⅱb | SE04 埋土 | 木製品 | 巻縄状 | | | 7.0 | 5.6 | 3.3 | | | | | 芯材径 1.2 |
| 53 | 315 | Ⅱb | SK11 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 70 | 一部反 | | 4.5 | (15.5) | 8.2 | 灰白色 | やや密 | 良 | 底部糸切　内面自然釉　籾痕 |
| 53 | 316 | Ⅱb | SK11 埋土 | 石製品 | 磨石 | | | 4.1 | 4.1 | 3.2 | 74.3 | | | | 黒雲母花崗岩 |
| 53 | 317 | Ⅱc | SP68 埋土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 20 | 反 | | (2.3) | | (9.0) | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部糸切 |
| 53 | 318 | Ⅱc | 基本層位３層 | 須恵器 | 蓋坏 | 10以下 | 反 | | (2.0) | | (8.4) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部回転ヘラケズリ |
| 53 | 319 | Ⅱc | 基本層位３層 | 灰釉陶器 | 碗 | 10以下 | 反 | | (1.9) | | (8.4) | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部糸切 |
| 53 | 320 | Ⅱc | 表土 | 山茶碗 | 小皿 | 20 | 反 | | (1.4) | | (5.0) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 |
| 53 | 321 | Ⅱc | 基本層位３層 | 山茶碗 | 小皿 | 20 | 一部反 | | (1.1) | | 4.2 | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切 |
| 53 | 322 | Ⅱb | 基本層位３層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 40 | 反 | | (3.6) | | (7.8) | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部ナデ |
| 53 | 323 | Ⅱc | 表土 | 山茶碗 | 山茶碗 | 30 | 一部反 | | (2.9) | | 7.3 | 灰白色 | 密 | やや良 | 底部糸切　内外面自然釉　籾痕 |
| 53 | 324 | Ⅱc | 基本層位３層 | 山茶碗 | 山茶碗 | 10 | 反 | | (1.8) | | (7.4) | 灰白色 | 密 | 良 | 底部糸切　外面灰釉 |

# 図　版

PLATE




I区　調査区全景（北東から）

1　Ⅰ区　SD01・SD02・SE02（東から）

2　Ⅰ区　SD01 西端遺物出土状況（南西から）

1　Ⅰ区　SD01 遺物出土状況（東から）

2　Ⅰ区　SD01 遺物出土状況（西から）

3　Ⅰ区　SD02 遺物出土状況（南西から）

PL.4

1　Ⅰ区　SD03・SD04 断面（南東から）

2　Ⅰ区　SD03・SD04 南側遺物出土状況（東から）

1　Ⅰ区　SE02 断面（南から）

2　Ⅰ区　SE02 遺物出土状況（南から）

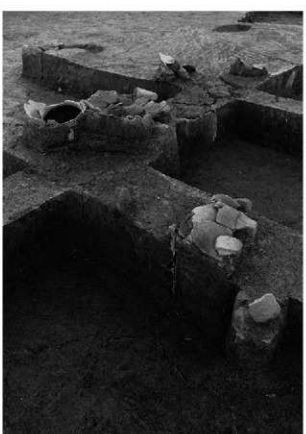
1　Ⅰ区　SE01 完掘状況（西から）

2　Ⅰ区　SE03 完掘状況（南から）

1　Ⅰ区　SK01 と SD01 遺物出土状況（南西から）

2　Ⅰ区　SK04 遺物出土状況（南西から）

1　Ⅰ区　SX02 完掘状況（北東から）



2　Ⅰ区　SX02 遺物出土状況（西から）

3　Ⅰ区　SX02 遺物出土状況 SP43（南から）

1　Ⅰ区　東端小穴群完掘状況（南から）

2　Ⅰ区　SP05 断面（西から）

3　Ⅰ区　SP15 遺物出土状況（西から）

1　Ⅰ区　下層 SD08・SK05（南西から）

2　Ⅰ区　SD08 断面（南から）

3　Ⅰ区　下層調査区 1 完掘状況（西から）

Ⅱb区・Ⅱc区　全景（北西から）

PL.12

1　Ⅱb区　全景（北西から）

2　Ⅱb区　SD11・SK11 完掘状況（南西から）

1　Ⅱb区　SE04 上層遺物出土状況（北西から）

2　Ⅱb区　SE04 下層遺物出土状況（西から）

PL.14

1　Ⅱb区　SE04（北から）

2　Ⅱb区　SK11 遺物出土状況（西から）

1　Ⅱe区　調査区全景（南東から）

2　Ⅱe区　SD14・SD15 全景（北西から）

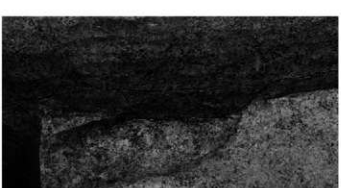
1　Ⅱc区　SD14・SD15遺物出土状況（南東から）

2　Ⅱc区　SD14・SD15遺物出土状況（南から）

3　Ⅱc区　SD14・SD15遺物出土状況（東から）

4　Ⅱa区　全景（北から）

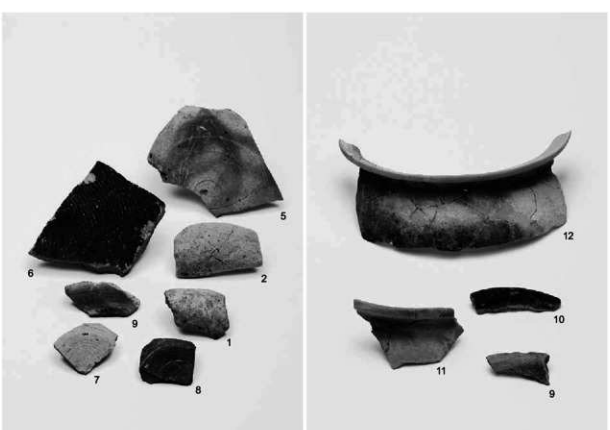
5　Ⅱa区　SD09・SP56完掘状況（北東から）



6　Ⅱa区　SD10完掘状況（東から）

主要出土遺物

1　SD01　主要出土遺物




2　SD01　出土遺物（1）

16

19

21

25

68

69

8

64

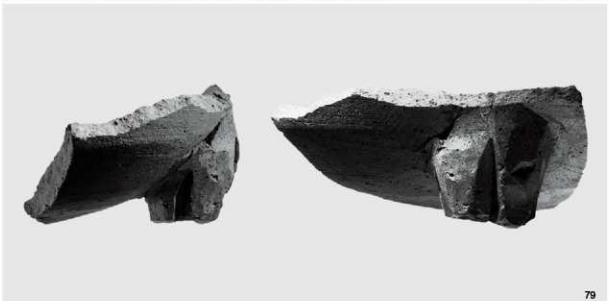
65

SD01　出土遺物（2）

PL.20

75

77


79

87

88

91

94

95

SD02 ～ SD04　出土主要遺物

1　SE02　主要出土遺物

2　SE02　出土遺物（1）

114

118

119

120

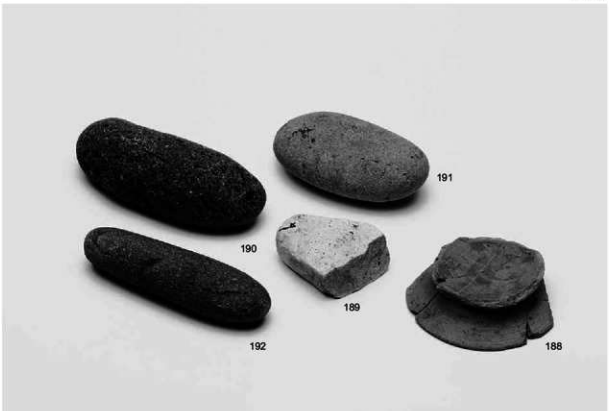
122

177

178

183

SE02　出土遺物（2）




1　SK04　出土遺物（1）

2　SK04　出土遺物（2）

1　SX02　主要出土遺物

2　SX02　出土遺物

SP07 198

SP15 201

Ⅰ区包含層

Ⅰ区包含層 216

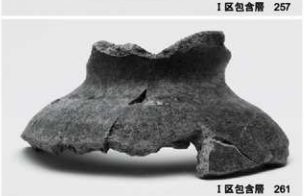
Ⅰ区包含層

Ⅰ区包含層 226

Ⅰ区包含層 230

Ⅰ区包含層 257

Ⅰ区包含層 224

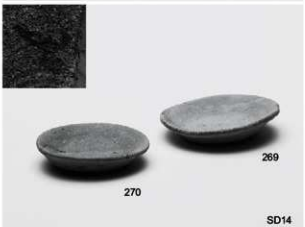

Ⅰ区包含層 261

小穴・Ⅰ区包含層　出土主要遺物

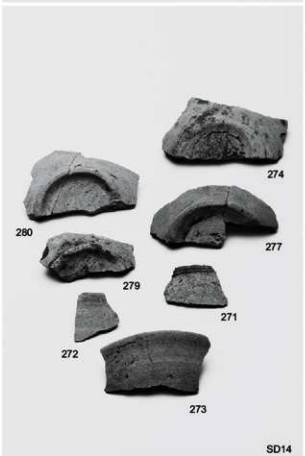
SD11 264

SD11 265

SD14 267



SD14

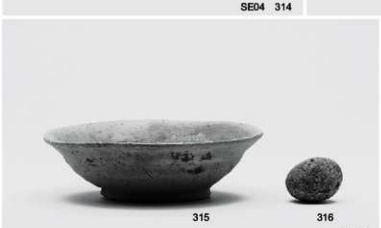


SD14

SD15 283

SD15 284

SD11・SD14・SD15　出土主要遺物



SE04・SK11・Ⅱ区包含層　出土主要遺物

PL.28

山茶碗高台部

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| 書名（ふりがな） | 宮竹野際遺跡７　（みやたけのぎわいせき７） |
| 編著者名 | 福嶋 正史（編集）、和田 達也 |
| 編集・発行機関 | 浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）<br>浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関）<br>〒 430-8652 浜松市中区元城町 103-2<br>TEL(053)457-2466 FAX(053)457-2563 |
| 発行年月日 | 2018 年 3 月 23 日 |

| ふりがな<br>遺跡名 | 所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| みやたけのぎわいせき<br>宮竹野際遺跡<br>（第８次） | しずおかけんはままつし<br>静岡県浜松市<br>ひがしくみやたけちょう<br>東区宮竹町 | 22132 | 02-<br>05-<br>04 | 34 度<br>43 分<br>24 秒 | 137 度<br>45 分<br>58 秒 | 2016 年 10 月 17 日<br>～<br>2017 年 2 月 17 日 | 1,300 | 道路建設工事に先立つ事前調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 宮竹野際遺跡 | 集落 | 古墳時代<br>平安時代<br>中世 | 推定竪穴建物跡<br>溝跡<br>井戸<br>土坑<br>小穴 | 土師器<br>須恵器<br>灰釉陶器<br>中世陶器<br>貿易陶磁器 | |

要約

1986 年より調査が行われてきた宮竹野際遺跡の、第８次発掘調査である。検出された遺構・遺物の多くは鎌倉時代のものである。直線的な溝によって区画された屋敷地と井戸複数を検出し、それらから貿易陶磁器を含んだ 12 世紀～ 13 世紀の遺物が出土した。建物跡は検出されなかったものの、荘園開発を推進する過程で微高地上を居住地として整備した支配者層の存在が想定される。また、古代の遺物として献足・緑釉陶器・壺 G が出土し、過去の調査と同様に官衙関連遺跡の一端であることが裏付けられた。なお、竪穴建物跡と推定される７世紀代の遺構が宮竹野際遺跡で初めて確認できた。

宮竹野際遺跡 7

2018 年 3 月 23 日発行

編集・発行機関　浜松市教育委員会
（浜松市市民部文化財課が補助執行）

印　　刷　松本印刷株式会社

# Miyatake nogiwa Site 7

The 8th Excavation Report

A Report of Archaeological Investigations
In Western Shizuoka,Japan

March,2018

Hamamatsu Municipal Board of Education